

2008

大正十三年二月二十九日(第三種郵便物認可)
昭和六年三月一日發行(毎月一回一日發行)

永樂町人編輯



三月號

(號五十四百第)



資本金 五百萬圓
 諸預金 貳千參百五十拾余萬圓
 殖産積金 參千百拾余萬圓
 契約高金
 代理店 朝鮮殖産銀行鮮内支店及派出所

營業案内及
 住宅資金月
 賦貸パンフ
 レット御申
 込次第贈呈
 致します。

京城府南大門通二丁目



株式 朝鮮貯蓄銀行

電話本局四五八〇番
 振替京城四〇〇六番

營業種目
 殖産積金 殖産貸付
 普通貯金 積金擔保貸付
 特約貯金 預金擔保貸付
 振置貯金 證券擔保貸付
 定期預金 不動産抵當貸付

取締役頭取 森 悟 一
 專務取締役 木村 和水



ふぐ料理

お座敷金襴羅

川
長

旭町一丁目

金剛山
 電話本局
 四二四五

龜屋茶部

金剛饅頭
 金剛六三六
 金剛館

目下二町本城京
屋 龜
 五七四 七二局本話電

内地への御土産
お手近の御贈答品
日常の御使用品には

鮮内産品使用御奨励の

御思召を以て

三和
漢陽
和
高麗
高麗
編
燒
製造元

富田商會へ

御下命願上げます

京城南大門通三丁目

電本三三〇九

同本町二丁目

電本五五四

1931・春の

合身バザー 洋服豫約開始

常に多大の御好評を蒙ります洋服豫約を開始致しました。
 何卒柄合品種の豊富なうちに、工場の輻輳いたしませぬう
 ちにお早く御用命の程願上ます。

生と格
 地と格

燃糸セル、サクソニー、ゼファー、ツイード、カルゼ等、今年の流行を代表
 するもので柄合もお派手なから御地味向まで多数取揃えて御座います。
 この値段で丁子屋の服かと皆様がお驚きになる位断然お安う御座います。

		4	3	圓
セビロ	A	3	8	圓
	B	3	3	圓
	C	3	3	圓
合オーバ	A	3	8	圓
	B	3	3	圓
合インバ	A	3	5	圓
	B	3	2	圓

銀製カフス卸贈呈



りよ日十二月二
 てま日十二月三

豫約清規

御引受日時 二月二十日……三月二十日迄
 出来期日 御注文後三週間
 御手付金 一着ニ付金五圓申受残金御引替

丁子屋

洋服部 (本館二階)

ストーブ

弊店は石炭給供者の立場から實驗研究の結果左の三種を最優良品として各位にお勧め申上ます

キヨウワ・ストーブ

三十五圓より

センター・ストーブ

十八圓五十錢より
八十五圓まで

アルバン・ストーブ

三十六圓より
五十二圓まで

生氣嶺炭

鮮内での燃料は鮮内炭を使用しませよ。
生氣嶺炭は鮮内第一の優良炭で昨年大博覽會に於て總督府燃料研究所から石炭館で發表せられた鮮内著名石炭の分析表に依て其優秀なる事を證明されてゐます。

一噸 拾五圓

價格 半噸 七圓五拾錢

一噸 壹圓貳拾錢

多量御利用ノ向ハ特に御相談仕り候 (市内配達は無料)

京城明治町一ノ五四

櫻井秀專商店

電話 本局三〇〇〇二番
本局四〇〇〇二番

宮内省御用達

菊正宗

京城本町二丁目

鐵前田商店

釜山本町三丁目

本嘉納山支店

春服

既成品

廉價無比何卒
御來店を乞ふ

特別仕立

新地着荷

御注文に依り
入念調製仕候

京城府鍾路一丁目

濱洋服店

電話光化門二四四

泉 温 陽 温

京城とは

目と鼻――

朝鮮一の樂天地

のんびりとした

温泉氣分

言語道斷です

人若し一日の

閑あらば

忘れず温陽へ――

館 井 神

高級化粧品

金 ば こ

○巴里製化粧品のみが最高最上の化粧品ではありませぬ。わが國にも高級化粧品「金箱」があります。

○一たび「金箱」をお用ひ下さい。その色その香、おのづからに恍惚となること請合。これ以上の家庭和樂の源泉はありませぬ。

○「金箱」は精製して極少量を市に出します。それ故ドコの店でもあるとはいへませぬ。京城にては三越、丁子屋等第一流の百貨店にてお求め下さい。



鮮産愛用

の時代來る

漫りに内地酒に

雷同附和しては

いけません

その香

その味

その酔心地

ほんによい酒「福迎」

中流階級の御常用酒として

先づその質を吟味し

値段を極力廉にし

一度これを御飲みになつたらもう

トテモくお忘れ出来ないのが「福

迎」の特色でございます

京成本町(電車終點)

難波酒造場

電話 本局一四六一番
光化門一四五番

次 目 號 月 三

舊師	春の師	重役諸氏へ御願	マラリヤの話	虎狩ゴシップ	吉林一瞥	雜の屠場	歴の屠場	ビールの語る	精神の家	臺灣の神	交通神經の話	多景色	人參と人魚	足裏の觸感	税關通過	車關	朗らかな告別式	李王家の系統	歌かたり	成宗王の識見	財政的援助條約	念佛三昧	義理と人情	朝庭坊の辯	臺變の話	お玉さんと梅忠	子供とカルタ	飛脚旅行	輸入したき事	父を送る	僕	宮津	山陽の百年祭	前と後の味	赤き旗(短歌)	辛未漫録	昌慶園(俳句)	住宅の亂作	品川雜記	銀座回想	財界無題錄	東風抄(短詩)	琉球の人と自然	攻防兩様の手	やまとい歌	ツリストライキ
(城大醫學部)	(城大醫學部)	(瀨戸病院)	(東拓京城支店)	(總督府學務局)	(城大法文學部)	(京城地方法院)	(總督府學務局)	(大日本麥酒支店)	(漢城銀行)	(植村病院)	(道廳稅務課)	(總督府外事課)	(京城測候所)	(總督府鐵道局)	(吉野町一丁目)	(總督府會計課)	(朝鮮銀行)	(不二興業會社)	(朝鮮商業銀行)	(日本人造肥料)	(南米倉町)	(城大法文學部)	(西本願寺別院)	(總督府學務局)	(城大法文學部)	(城大附屬病院)	(洋畫家)	(遞信局工務課)	(鮮滿開拓會社)	(京城高等商業)	(朝鮮鑛業會)	(李王職醫寮)	(朝鮮商業銀行)	(京城齒科醫專)	(三麥載寧鐵山)	(南米倉町)	(朝鮮史編修會)	(朝鮮鐵道會社)	(京城土木出張所)	(中央朝鮮協會)	(朝鮮銀行)	(京城日新開社)	(黃金町五丁目)	(大阪朝日支局)	(京城電氣會社)	(遞信局海事課)
今村	市村	瀬戸	齊藤	加藤	安倍	脇	福士	丹羽	堤	植村	三木	穂積	窪田	佐瀬	松岡	長谷	飯泉	林	足立	今村	泉	清谷	高橋	高木	柳井	柳京	津田	橋本	兼安	德野	池部	森	高橋	角田	中村	新田	長郷	中島	古田	別府	岩淵	澤村	辻繁	國風	松崎	
豐氏(二)	志氏(三)	潔氏(四)	三郎氏(五)	覺氏(六)	成氏(七)	一氏(九)	助氏(一〇)	勇氏(一一)	市氏(一二)	俊二氏(一三)	清一氏(一五)	六郎氏(一六)	治氏(一七)	武雄氏(一八)	久子氏(一九)	市松氏(二〇)	太氏(二二)	苗氏(二五)	朝氏(二七)	哲氏(二八)	眼氏(二九)	吉氏(三〇)	助氏(三一)	平氏(三六)	平氏(三七)	太郎氏(三八)	常男氏(三八)	太郎氏(三九)	太郎氏(四〇)	真士氏(四二)	雄氏(四三)	新氏(四五)	新氏(四六)	昇氏(四七)	司氏(四八)	孝氏(四九)	次郎氏(五〇)	二氏(五一)	司氏(五三)	三郎氏(五四)	吉氏(五五)	水氏(五六)	郎氏(五七)	助氏(五七)	支助氏(五九)	雄氏(六〇)

舊師

今村 豊
(城大醫學部)

不思議でない話

これも京日に數日前出てゐたのだが、カリフォルニアの海岸に波のり板を背負つた數人のヤンキーガールズの並んだ寫眞の説明に、これが眞冬の事だから驚く云々といふ。

カリフォルニアは南北に長くどの地點か不明だが、緯度の關係より云へば大體我が本州に相當するしかし氣候は海岸地方では溫暖な事世界的に有名で、比較的北にあるサンフランシスコでも眞冬一月の平均温度攝氏の十度位。南地方はずつと暖かい筈。これ位ならハネカヘりのヤンキーガールが泳いで驚くにあたらぬ。

僕のサンフランシスコ通つたのは五年前の三月末、勿論冬ではないが、ゴールドンゲートパークの砂濱に數多の男女の嬉々として泳いでゐたのを羨しく眺めた事を想ひ出す(紀元節の夜記す)

◆食堂内所話

三木 一彦

○三越や、丁子屋の食堂が大繁昌!。晝時などに行つて見ると、お歴々の顔がズラリ。
○ところで、このエライ人に限つて、物を食べて歸る時、肝腎の支拂を忘れて行くさうだ。
○食堂では、たまらんから、女の人が追跡して、『あゝモシ、恐れ入りますが、御勘定を、どうぞ』
○或る會社の花形Mさんなどは殆ど三度か三度忘れるので、『あの方、ほんとに殺生よ』

近藤先生

二十年も昔の長崎中學時代の話し。あの頃僕等は上は校長より下小使に至るまで一つ一つ紳名をつけてそれを使つてゐたから、今日となつて紳名と顔の記憶はあつても、とんと本名の思ひ出せない舊師が多い。甚だ忘恩の次第であるこの點近藤先生は例外で別に紳名がなかつた。と云つて特長のなかつた譯では決してない。一から十までの數へ歌の中に四つよこれた近藤さん云々がある。獨り寄宿舎に棲んでいつも古ぼけた袴羽織の一着、甚しく野暮臭いものでよこれたと云ふ僕等地方の形容詞にびつたりはまつた恰好であつた。但し寄宿生の證明する所によれば著も種も常に新しかつたさうである既に形でわかる様に大の國粹主義者で、機嫌がよいと國語の講義が脱線して豪傑の講談になつた。あの日例の脱線で木村又藏の二席を身振り手振りよろしく行つてゐられると、ガラリと戸が開いて校長の參觀である。先生少しも睡がず、『そこで諸君、その事に何か質問はないか』と來られた。その人を喰つた有様は實に木村又藏以上の武者振りであつた。劍道の自慢は毎々聞かされたが大した腕ではなかつたらしい。何時か武道大會で小男の英語先生と組んで大上段に

竹刀をふり上げたまま、つづいて胴と小手をとられてしまはれた。この鮮やかな負け振りに、見てゐた僕等生徒一同の大喝采したのは云ふまでもない。飄逸な所にどこか人格的のひらめきがあつて、生徒一同の人望は非常にあつた。校内に至誠團なるものをつくり、自ら團長となり、土俵築いたりされたが、間もなく先生は辭められるし、校舎も移轉したので至誠團と共に土俵も跡形もなくなつてしまつた。

劍道の自慢はあてにならぬが今一つあてになる自慢があつた。それは秀才の息子のある事。その自慢の息子と云ふのは誰れあらう。現總督秘書官近藤氏だと云ふ。だが本人に確めたのでないから眞偽は保證出来ない。

不思議な話

二ヶ月前の京城日報に玉蜀黍食ふアメリカの赤坊の寫眞が出てゐる、齒が三十二本揃つて云々の説明があつた。

僕の不思議と云ふのは齒が生へた事よりもその數の事である。赤坊だから乳齒に違ひなく生へ揃つたとしても二十本の筈である。

卅二本と云ふのは永久齒で、これも奥まで生へ揃ふのは年頃になつてからの話。卅二本が赤坊に生へたとはなんと不思議でないか。

春の旅

子に、刑事さんが一人居られたとは。此奴等妙な事を云ひくさると云ふので、宿をつきとめたのだと云ふ。云はれて見れば思ひあたると

毎々聞かされたが、いつか武道大會で
かつたらしい。何時か武道大會で
小男の英語先生と組んで大上段に
か。
に生へたとはなんと不思議でない
か。
別と三頁の三月に殺生上」
の方、ほんとに殺生上」

春の旅

市村秀志

(京城師範)

○さんは原稿を書かねばならぬ
のだが、家に居てはどうも人がき
て煩いから姿を晦ませよう、そこで
道後へ行くことに決めました。

『尤も八十圓しか無いから、こ
れが無くなつたら歸らう』

○さんはそう云つて、私に財布を
渡しました。私は書生の事とて別
に異議のある筈はありません。人
に知らせると面倒だからと○さん
は奥さんに固く口止めされるし、
私は私で下宿にも断り無しに行く
ことにしました。奥さんは萬一の
時にと云つて別に二十圓内證でく
れましたが、私は○さんにこれを
だまつて居りました。

斯うして二人はぶらりと家を
出たものです。

道後へ着いたのは其の日の午後
春に早い四國は三月だと云ふのに
櫻がもう三分通り開いて居ました
兎も角立派な宿に着く。○さんの
名刺の肩書のせいか素晴らしい室に
通されました。それから一等の札
で、廣い湯に入つて、手足を伸ば
した時は極楽浄土。裏の山から鶯
が頻にきこえます。二人はやつと
自由な體を喜びあひ、大聲で話し
たり、實際鼻唄さへも出しました。

『俺が原稿を書き出したら、君
はどこでもよい、ぶらついてこ
い』

これだけの條件だから、實に呑氣
なものです。○さんが机に向つた
なと思ふと、早速飛が出して、坊

ちやんと山嵐とが障子の穴から覗
いて居たと云ふ宿屋や、有名な天
麩羅屋を見歩いたり、水月燒を冷
かしたりして長々と遊んで歸りま
す。心の中では春の日に原稿書か
ねばならぬ○さんを悩みながらそ
つと戸をあけて見れば、これはま
たふんぞり反つて、好い心持ちで
寢て居ります。机の上には原稿紙
を廣げるとは廣げたが申譯け的
に題目だけ大きく書いてあるだけ
日は午になつて、鐵瓶の音長閑で
す。私も仕方なしに机によつて、
原稿紙を盗んで、ペンを執ります。

湯歸りや道後は櫻三分なり
行く人に酒の芳りや春の風
御茶運ぶ紅き裳裾や湯女の春

等屁なぶつて居ると、女中が廊下
をバタ／＼ときて、松山から電話
ですと云ふ。どうして分つたか、
そんな筈がないがと出てみると縣
廳の視學からで、○さんが来て居
るだらう隠れてもだめだと云ふ。
知らぬと云へば首實驗に行くと言
ふ。仕方ないから居ると云ふ。そ
れじや晩に大勢で行くから準備し
て置いてくれと云ふ。どうしようば
れてしまつたのです。

どうしてばれたかと云ふと其の
晩に分つたのですが、二人で風呂
へ入つて、はしやいきつて、大き
な聲でルソーがカントがと云ふ。
プロチヌスとかカダス、アイネが
とか云ふ。そうかと思ふと鼻唄が
出る。所が豈夫知らんや湯の隅つ

子に、刑事さんが一人居られたと
は。此奴等妙な事を云ひくさると
云ふので、宿をつきとめたのだと
云ふ。云はれて見れば思ひあたる
ことども。始めて知れり風呂の話
はつゝしまねばならぬことを。

翌日湯に入つても二人は顔見合
すばかり、無言の行。自業自得と
は云ひながらさして笑止千萬の
事でありました。それはまあいゝ
として、○さんは其の日からやれ
講演だとか、それ宴會だとか引張
り廻され、たまつたものに非すと
奥さんから貰つて躰繰金もそのま
ゝにして、這々の體で引きあげま
した。

春の旅のナンセンス物語であり
ます。

◆二寸の話

三木一彦

○總督府の視學官高橋さんは、
立派な体格をしてゐられる。

○『アナタなぞは、歐米に行か
れても、あつちの人間に少しも遜
色はないでせう』と申し上げると
『さうですとも、堂々と大手を振
つて闊歩しましたよ』と、日本男
子のために、萬丈の御氣遣い。

○『だと致しますと、洋服など
も、無論あつちの既製品で、お問
に合ひましたネ』、視學官『ア、
鳥渡……鳥渡……そ、そのこと
ろは、よく考へて見ると、やつぱ
り二寸……ズボンの裾を、ホン
の二寸加工致しました』で、主
客大笑ひ。

○この人、子供のやうな淡泊さ
が面白い。

重役諸氏へ お願ひ

瀬戸 潔

(瀬戸 醫院)

此頃は諸學校の新卒業生の就職運動の最中である、此四五年來僕等友人で早い子持ちは子供等が學校を出て就職する様になつて來たので、僕なども我子の事を考へると、他人の事でも吾が事の様に眞剣にもならざるを得ない。

今年も相變らず二三友人の子供等の就職の事で何かと頭を悩ました。その内でも口頭試験の問題に對する答である。恐らく校長サンなどになつたら僕等の考も及ばぬ御心配もありませんが父兄になると一般就職の事情に暗いのに就職させねばならぬと云ふ眞剣な希望があるので、老母親一人の處などから頼まれると僕等は實に神經衰弱にもなりそうになる。其老母から云ふと世間の事情など顧る事が出來ぬ程セツパツマツてるのである、主觀的には絶對的なのである。そこで御願ひである批評でない怒らんで下さい。

今年の或所で中學程度の卒業生に出した問題『エロ』『テロ』『ゾロ』、次にリンゼーの友愛結婚等であつた。十八九才満で云ふと十六七才の子供等に對する問題である。リンゼーの説などは色々の意味で問題とされた事と思ふので彼此と僕等が云ふべきでない、僕の御願ひです其積りで御聞きを願ふ。吾々の時代は過ぎ去りましたでせうが吾々の子供が貴様の御世話にならね

ばならぬのだから愚痴も出る次第です皆サンの御宅ではお子様の性教育はどうなさいませう。中學四五年は青年期に達するから其知識相當完成させるべきでせうが、實際はそうは参りませんでせう、如何で御座います。特にリンゼーの友愛結婚は大人の有識階級が了解してか或は誤解してか又は理解し難いためか世間の問題になつて居る。思慮の足らざる青少年には誤解され勝なので普通の家庭では此言葉でさえ恐ろしがつてる有様でないでせうか。尤優良な青少年には無用な制度であり或意味では呪ふべきである。

然るに就職の口頭試験を受ける方は特に中等學校の卒業程度の青年は今迄はカフエーにも出入を禁ぜられてた子供である事を御考を願ひたい。若し右の様な『テロ』『エロ』等の流行語や其の由つて來る處を知らなければ就職に支障が生ずるとなると校長諸氏が大部御考にならねばなるまいが、さればとてそんな方面の勉強は世間が反對しませう。そこで御願ひとなるんです銀行、會社の重役諸氏並に其他の採用試験をする委員諸氏は子供の有る人に願ひたい、なるべく青年以上の子供のある方を試験委員にしたらと私は考へる。試験委員諸君が就職志望者を迎へる際は一應其學校長なり父兄なりの心持を願ひて頂きたい。

リンゼー問題は中學程度の二三年の生徒の頭などでは其話を聞いて不思議がつて居りました。如斯問題は學校長などからは御話しし難い事情もありませうから、私から敢て本誌上で御願ひして置く。

のでした。

僕は狐につまづかれた様な氣がし

ながら

吾々の時代は過ぎ去りましたでせう
が吾々の子供が眞様の御世話にならね

せうから、私から敢て木誌上で御願ひ
して置く。

まらりやの話

齊藤龜三郎

(東拓京城支店)

二三年前の話です。
光州から瀧陽に行く自動車の中
での話で、乗合は僕と木浦支店長
とY駐在員との三人です。

時宛も夏の眞盛りで、僕の大好
きな瓜小屋が随所に立てられて、
其の瓜小屋からは、行く人や流る
雲を見ながら、長い煙管で煙草
をふかして居る顔が、一つか二つ
見ると云ふ、頗るのんびりした
田舎の晝下りです。

自動車は、大體汽車の線路
と並行して居ましたが、時々踏切
を越して或は右に或は左に線路を
見やふと云ふ旅で、自然話は汽車
のことに落ちて行きましたが、と
ある踏切にかゝつた時Y君は
『此處ですよ、此間の晩人が驟
かれたのは』

と云つて、左もあとに面白い話
がありそふに、にやりとしました
『何だ此んな處で、そして驟か
れたのは女かね』

『いゝ多、男ですよ、然も大の
男が二人で、一人は死んで一人は
はね飛ばされて助かりました』
『ふうん何かね、線路で涼んで
居て其儘寝こむでしまつて、やら
れたと云ふんぢやないのかね』

『そこが大違ひです』
と云つて又、にやりとしながら、
『例のまらりやですよ』
と今度は支店長の顔を見ながら
云つた、支店長も
『あゝ、そうか』

と云ひながら之が亦にやりと笑つ
た、僕には兩君のにやりが何事だ
か薩張り譯が分からないので、何
つちに聞くと云ふに

『何うしたと云ふんだね』
と聞きましたら、支店長

『朝鮮には、まらりやは吃驚り
すると癒る云ふ迷信があるので、
時々變な事がありますよ』

『そりや君、いやつくりと間違
へたのぢやないか』

『いゝ多、私の知つて居る範圍
でも内地にもそう云ふ迷信があり
ます』

と云ふ譯で、Y駐在員が頗末を
話してくれましたが、

それは此瀧陽の邑内に、まらり
やに惱んで居た二人の壯年の男が
居たが、何でも吃驚するとまら
りやが癒ると云ふので、何うした
ら吃驚りするだらふかと色々相談
した揚句、丁度汽車が此地方に數
かれた當座で、何でもあの汽車の
通る前を駆けぬけたら大概吃驚り
するだらふ、そふしたら二人の病
氣も癒るに違ひない、と云ふ事に
協議一決して、或る夜二人は線路
の脇にぞんで、汽車の來るのを今
か今かと待つて居ると、その内汽
車は轆とろなりながら突進して來
た、二人はふる／＼震る／＼ながら
も、さあこゝだと云ふので、目を
つぶつて線路の中を駆けぬけやふ
としたが、先きのは轆き殺され、
後のははね飛ばされたと云ふ譯な

のでした。

僕は狐につまゝれた様な氣がし
ながら

『それで獲つた一人はまらりや
が癒つたのかね』

と聞きますとY君は

『矢張り癒らないそふですよ』
と云つて氣の毒そふな顔をした
之が切つかけで、それからまら
りやの話が色々出ましたが、矢張
りY君が慶尚南道の某所に駐在し
て居た時の話が振つて居ました。

其の某邑に、一寸した地所持の
若い親孝行の人が居たが、老母が
まらりやで苦しんで居るので、息子
は何うかして吃驚りさせて、之を
癒してやり度いと云ふので、あゝ
でもないこうでもないかと考へた末
老母の寝て居る温突の附近で鐵砲
を打つたら、其音で大概吃驚りし
て、病氣も癒るであらふと云ふ事
を考へ出したが、さて御承知の通
り此人達には銃器がない、左りと
て警官駐在所に借りに行く譯にも
行かないし、何うしたらいいだら
ふと毎日此事のみを考へて居た。
其頃Y君は狩獵許可を得て、時
々鐵砲を撥いで附近の林野をあさ
つて居たので、其姿を見た例の息
子は、之こそ天の敵ふる所と勇み
立つて、或晩親類の口利きと二人
でY君を訪れて、一仕始終を物語
つて助けると思つて一發放してく
れと、涙を流さんばかりに頼み込
んだ、Y君もそんな馬鹿な事はと
思つたが、何しろ向ふは一所懸命
で、殊に事柄が親孝行と云ふ譯で
もあるし、到頭口説き落されてし
まいました。
或夜Y君は其息子に案内されて
老母の寢室の庭に連れて行かれた
が、何でも月の無い暗らい晩であ
つたそふだ、初秋の冷氣を身に染

みながら今か今かと息子の合圖を待つて居ると、纏て老母が寝入つたと云ふ知らせがあつたので、Y君は星が二三點疎らに見える空に向つて、空砲を一發放つたが、何しろ四邊聞として離なき田舎の深夜の事であるから、自分でも吃驚りする位大きな音がしたそふで、近隣でも何事かと思つたのであら

虎狩ゴシツプ

加藤 灌 覺

(總督府學務局)

ふ、人が起き出るやふなさはめきが開えたので、Y君は其儘自分の家へ急いで歸つた。
翌朝Y君は目をさますと、ゆらべの事を考へ出して、あとは何うなつたらふと多少心配もして居ると、例の息子が盛裝をしてやつて來て、恭しく敷島の大箱を捧げて何邊も禮を云つて歸りました。

と語り終つたY君は煙草の話で思ひ出したやふに、ポケットから敷島を出して火を付ける。僕は『それで病人は何うなつた?』と聞きますとY君は莞爾として『此の方はきゝ目があつたやふです』と云つて今でも嬉しいやふな顔をしました(二・十四)

加藤清正が朝鮮へ來てゐられた頃に、幾多の猛虎を捕殺して、其勇武を示されたといふ話は、あの片鎌槍などに因んで、沿く一般に信せられてゐるかの様ではあるが、其時代に於ける確な文獻やなどを調べて見ても、どういふものか少しもそれに觸れた一談片すらも見出す事が出来ない。恐らくそれは公の勇武と其忠誠とを慕つた事に起因してゐる、何かの誤傳ではあるまいかと思はれるのである

併しながら恰も其頃に於ける色々な出来事を記した、毛利家記と呼ばれる記録の中には、ほんのつまらぬ一ナンセンスな出来事ではあるが、次のやうな加藤家の一從屬に關する、猛虎退治の一項を見出す事が出来る。

『此に可笑しき物語あり。晋州城攻の後清正の足輕某陣屋にて熟睡せし處に虎來り、くはへて山に歸りたり。某は膽太き男なれば目覺めたれども驚かず、何がなしに虎を殺さんと思へども

不意の事にて脇差もさゝず、無念に思ふ計なり。虎は某を山の峰にくわへ行き、手球に取りて遊ぶ中に夜は明けて日出たり。虎は其儘眼りぬ。足輕心に思ひけるは、日本を出てより生きて歸るべしとは期せず。されど虎の餌になるべしとは、今まで思ひもよらずと涙を流しける。やがて虎の腹、腋の下などをかきてやるに、虎は手足をのべ嬉しがる様子なり。傍を見れば藤かつら松にまどひたり。足輕善き物得つと思付きて此處を喰切り

一方の端を捻ぢやはらげて、虎のフグリのあたりをかきさすれば、虎は一人善く寝ねたり。それを窺ひすまじ、藤葛にて虎のフグりをくぐり、一方をば松に結付けてそろくど這ひ退く處に虎目をさまし、追つかけて喰留めんと飛びかゝりに、件のかつらにてフグりを締つけたれば、其儘目を廻はして死にたり。足輕は陣屋に歸り、傍輩を同道

し、其所に行き虎を取りて歸る。清正聞付けて大方ならず褒美しかの足輕には金玉といふ名をつけ侍に取立たりとぞ』
どうやら猫の習性を連想した、頗る眉唾ものゝ語らしうはあるが、非常に呑氣な三百數十年前の朝鮮の虎公には、ヒョツとしたなら或はそんな事があつたかとも思はれるふしがないでもないやうな、朝鮮側の虎物語も存在してゐる關係上、多少お加藤の資料にでもなりはしないかと思つたので、取敢へず古記其儘を御紹介申上ぐる事にしたのである。

町内風聞記

三木 一彦

○南大門通三丁目の藤木商店の御主人は、至つて寡黙の人のやうに見えるが、アレで町内隨一の人氣男!

○町内會などでは、藤木さんが出ぬと座が白けるといふ。歌が上手、踊りが上手。遊藝百般の達人だといふ。

○幹事さん曰く、『ウンとはめて下さい。何んしろ當町の國寶ですからネ』

城の後正の兵車大砲屋にて
熟睡せし處に虎來り、くはへて
山に歸りたり。某は膽太き男な
れば目覺めたれども驚かず、何
がなしに虎を殺さんと思へども

留めんと思ひかゝりしに、件の
かつらにてフグリを締つけたれ
ば、其儘目を廻して死にたり
足輕は陣屋に歸り、傍輩を同道

だといふ。
○幹事さん曰く、『ウンとはめ
て下さい。何んしろ當町の國寶で
すからネ』

吉林一瞥

安部能成
(城大法文學部)

一昨年の九月ハルビンからの歸途吉林に一寸寄つて見た。吉林は靜かな氣持のいゝ都會だといふことをかねて聞いて居たからであつた。

それは九月十六日の朝であつた。長春から吉林までの汽車は三時間ばかりだつたが、窓外の眺めはちやうど東京近處では十月半ば過ぎ位にあたり、雜木の黄葉や紅葉が緑の中に交つて、眼に映する色彩も劇に賑かであつた。それに大きくはないが山もあり、河もあり、又畑もあり、森もあり、村もあり景色に變化があつて 所謂『滿洲』といふ、言ひ換へれば『荒謬』といふ感じではない——これは安奉線でも大體さうであるが——。黒い煙をのどかに上げて瓦を焼く家もある。老若男女總出で野菜畑に働いて居る家族もある。日向のスロープをころころと歩いて居る黒い仔豚の群もある。或驛には四五軒灰色煉瓦の商家があり、入口の屋根にはやはり同じ色の瓦で透しの裝飾が施されて、その兩側にさげた聯の朱色がまぶしく目立つその前に藍色の着物をきた子供や娘達の並んで居る姿も一寸面白い汽車の窓からかうして無關心に眺める景色は、平和な牧歌的な畫となつて、私の心を和けてくれる。日本と支那とのいがみ合ひなどは念頭に上つて來ない。

私はハルビンの滿鐵公署のF氏と一緒であつた。名古屋館といふ旅館に一寸休んだが、かういふ寒い土地にボール箱の中にも入れられた様に作られた粗末な日本間の感じは實にわびしいものである。薄黄色の壁の汚れや、疊表の黒焦、骨弱な建附のわるい襖などが、さしこむ秋の日の前にはあらはなのを見ると、私の心はいささか憂鬱になつて來た。木下李太郎君の『支那南北記』を見ると、この宿はロシヤ旅館の建物であつて、松花江に臨んで景色が非常にいゝ筈だが名は同じでも家は別なのに相違あるまい。

停車場に迎へに來て居たボーイを案内にしてガタ馬車で早速市中を一覽する。このボーイは支那人だが日本語が旨い。先づ午餐をと思つて江畔の支那料理店へいつた——臨江春とかいふ名であつた——が、生憎仲秋節前後で休業して居り、使用人達は悠々閑々と兩袖をくんであちらこちらにかたまつて居た。それをボーイに話してもらつて特別に二三品作つてもらふ事になり、やつと水際の部屋の椅子に腰を落着けることが出來た。吉林の都に趣を添へるものは松花江である。奉天や北京などになりぬきは唯この河のおかげである。河幅はハルビン程廣くはないが、しかし縮緬じはを作りつつゆつくり流れて居る。そこいらの人聲や物音が河の水面に反響するのが却て靜かな感じを興へる。川下の方には畑のある小さな山が頭に林を黒く頂いて幾重にも重なつて居る上流の山は狐色の草をつけて所々に黒い岩骨を露出して居る。上流に向つて右岸に人家が近く迫り、それに接して河幅の三分一を埋めて材木の筏が透間もなく浮んで居る。上流も下流も河身の彎曲の爲に遠くまでは見えない。

仲秋節で考へたことであるが、支那人がかうして徹底的に休むといふことは愉快である。西洋でも日曜日に徹底的に休業するのは實に氣持がよい。氣紛れの旅人には一寸した品物——例へば土地の繪葉書でさへも——買へないといふ不便はありながら、私は西洋のこの風俗を讚美した。といふのは、日本人の生活に秩序がなく、それが充實した勤勞と徹底した休養とを妨げて居ることを切實に感ずるからである。我々も人に妨げられず、人を妨げもせぬ靜かな休養の日を作る様にした方がいいのである。督軍公署といふのけ恐ろしく張作相の居る役所であらう。河に臨んで建てられて居るのは防禦上の意味があるのかも知れない。大体西洋風の建築の様であつた。支那の建築に取入れられた洋風といふのも一つの研究題目にはなるであらう。支那の商家などの裝飾を見ても西洋のバロックやロココ風などの影響があるのではないかと思ふことがある。支那の文化そのものが日本に比べては昔から國際的であることから考へて見ても、こんな一見してあまり價値のない建築の上にも複雑な文化的交渉が見出されるかも知れない。同じ様なこと

は萬里長城などを見た時にも感じ
た。あのアーチ形の煉瓦作りの城
壁も歐羅巴のどこへ持つていつて
も、別によそのものだといふ感じ
は與へぬであらう。この邊の消息
大きくいへば、支那文化と西洋文
化との交渉は支那の色々なものを
見るにつけて示唆されるのである
大體としては明治になつて始めて
西洋文化を採用した日本に於ける
よりは、それが一層複雑でも大規
模で長い年月に亘つた歴史的關係
を有するから、それを解明するこ
とは中々困難な問題ではなからう
か。

或る學校で運動會をして居た。
男學生も女學生も交つてである。
女學生は皆斷髪である。繪葉書に
あつた德勝門(?)は破壊せられ
て、北山に通ふ路はアスファルト
に改められつつある。しかし市中
にはまだ古風な招牌が澤山あつて
我々の眼を喜ばせてくれる。申で
も最人目を引くのは大きな鎗の樣
な柱を立てて、その頂上の穂先に
近い所を或は花、或は龍を以て飾
つたものである。兎に角念の入つ
た彫刻と丹碧黄白金銀等様々の色
を彩つたかういふ招牌が現代文明
の大量劃一生産と兩立しないこと
は明白である。吉林が斷髪やアス
ファルトへ急ぐ如く、吉林の招牌
も亦ペンキ塗へと急ぐであらう。
現に吉林の城内には例の仁丹の俗
惡な看板が押強く闖入して居る。
案内記を見ると北山には關天廟
藥王廟、坎離宮、玉皇閣があると
あるが、玉皇閣の外はどれがどれ
だかよく判らなかつた。一々の建
築が勝れたものではないが、山に
倚つて建てられた全體の布置結構
がよく景色を生かし且景色を利用
して繪畫的効果に富んで居る。か

らいふ點では支那人の方が日本人
より一段上の様に思ふ。それは動
もすれば近醜であつても遠美たる
を失はない。日本のものは近美な
るもの必ずしも遠美でない、否往
々にして印象の稀薄なものが多い
玉皇閣には女神七八體あり、童體
の土像も一つあつた。その男根が
かき削られて居るのは、それをと
つて男子のない母親が服するのだ
さうだ。閣の入口には『天下第一
江山』と書いた額があつて眺望は
いゝが、しかしこの岡と並んだ山
の方が一層妨げのない眺望を持
つて居る。山には所々に大きな楡の
老樹の外、小松の間に落葉樹の紅
葉が點せられ、松虫草や野菊など
が咲き亂れて居た。遠くに薄青く
見えるのは長白山脈であらう、小
白山は近く河の上流にある小さな
山である。向側の山には砲台が設
けられて居るらしく、馬賊の見張
台がある。その下に人家の澤山あ
るのは多くは回教徒の住居だとい
ふ。東北の方の三角形の山の下に
松花江の上流が白く光つて見える
晴れやかな景色である。

再び市中に入る。河南街は股脈
な通りであるが、兩側の溝蓋が高
く上つて、道の真中は泥濘敷を没
する有様である。骨董屋をひやか
して青花の小器一二點をかつた。
或店の主人は耳が遠く、さういふ
ことを紙片に書いたのを客に見せ
る。然し耳は遠くても掛値は中々
いふ。
日本商埠地のある周囲の土地は
所々に水溜りがあつて、大きな樹
が陰を作つて居る。私はその近く
の文廟へいつて見た。この文廟は
すばらしく大きな文廟である。大
きいばかりでなく立派でもある。
大成殿・崇聖殿、其他が廣大な地

域の中に立つて居るが、黄瓦の屋
根には草が一ぱいに茂り、その境
内は大方白菜、瓜、茄子の畑とな
つて、渾丹の色をしたぐるりの堀
も引き立たない。これ程の建築を
かうして荒廢に委しておく支那人
の氣が知れない。尤も支那人が色
々な點で氣の知れない民族である
ことはいふまでもないが。その畑
の茄子を摘みに來たのであらう、
白髪を高い滿洲風の髻にゆつた一
寸品のある老嫗が姿を見せた。

吉林の住宅地には閑靜な住居も
あるときいたが、あまり氣持のよ
ささうな家にはぶつつからなかつ
た。唯木の都だけあつて、大きな
厚い板でこしらへた板塀は目につ
いた。それは如何にも素樸な、よ
くいへば雄大な感じもしないこと
はないが、あまり美しいとは思へ
なかつた。

その午後私は長春に引返したが
車中で二人の日本人が支那人の中
で大聲で支那人の悪口をいつて居
た。よせばいゝのにと苦々しく思
つた。

◆訪問帳から

それかし

○明治屋の支店長が更迭した。
前のを東さんといひ、今度のを江
馬さんといふ。

○江馬さんは、これまで、金澤
にあたといふ—それも七八年—
一遊藝の盛んなアノ土地だけに、
この人にも何かの隠藝のあること
だらう。

○グツと碎けた、會つての感じ
のまことにいゝ人だ。

信じて着て来た。その不愉快な
がよく景色を生かし且景色を利用
して繪畫的効果に富んで居る。か

きいばかりでなく立派でもある。
大成殿、崇聖殿、其他が廣大な地

○グツと碎けた、會つての風し
のまことにいゝ人だ。

雑想

脇

鐵

(其の二)

(京城地方法院)

よく自慢する人がある、自分の
もつてゐるものだけでは氣がひけ
るのである。

誰が見てもあんな人と思ふ人
を蔭でまことしやかにほめる人が
ある。相手の人は却つてその人を
悪く云つてゐるのに。つまりあま
り悪口を云はないでくれといふ間
接射撃だ。

あれはいい人物だと云ふことを
あれは無能だと云ふことの代りに
使つてゐる人が半分はあらう。

愛するの、敬するの、心と
心でよい。そうしてから溢れ出た
言葉は讚美歌の様に朗かである。

逆境に立つて憤しむものは多い
順境に在つて懼れるものは少い。

リンカーンは大統領當選の祝賀
會で『地から湧いた神の酒』を以
て乾杯をかけた。リンカーンは偉
いと思ふ。

新年が来たからとて、目覺しい
轉換が出来ないものではない
目覺しい轉換は目覺しくない轉換
が累積することによつてのみなさ
れる。一朝にして心眼が開けたな
ど云ふのは嘘である。

この間の寒さを一体を食はどう

して凌いだらうか、あんな時には
何處かに收容する丈の設備がほし
いものだと思つた。それ位の設備
のない社會は餘り威張れた社會で
はないと思ふ。

自分の利益や、自分の階級の利
益やらを、やかましく主張し得る
男はまだまだ大丈夫だ。余程察し
のいゝ人でもあつて何とか云つて
呉れなければ、何時迄でも石の様
に黙つてゐなければならぬ人々、
いはうといふ自覺さへない人々が
あることを考へなければならぬ。

民の聲を聴くのは仁政だ。民の
心を讀むのは一層仁政だ。

朝鮮に来て淋しく感じさせるも
のの一つは椿が咲かぬことだ。竹
藪も見たいもの、一つではあるが
椿の方により心がひかれる。暮に
花屋から一束買つて来て挿して久
し振りにいゝ氣持になつたが、蒼
が半ば開いた頃迄の花もぼたりと
落ちた。ホロ／＼と紅の一重の椿
が地に落ち敷く風情とは似てもつ
かぬ淋しさだ。

今一つどうかして呉れたらと思
ふことは夜廻りの拍子木の音だ。
夜ふけて本など讀んでゐる時にリ
ズミカルな撃拵の音が響いて来る
のはいゝものだが、朝鮮に来てか
らはつひと一度もそんなことがな

い。聞えるたびにだらしない音
が氣になる。砧を調子面白く打つ
ことの出来る朝鮮人に何うして出
來ないことだらうかと思ふ。

△
今宵も激しい寒さだ、牢屋の中
はどんなだらうと思つて見る。

易
小 唄 村 岡
石 介

◆夫人の面影

漢江漁郎

○朝鮮神宮司高松氏の夫人幸
子様がなくなられた。

○おいたわしいことである。

○夫人は、一寸風變りの趣味を
有つてゐられて、蛇——青大將な
どは、就中好物であつた。

○夏の日盛りなどにお訪ねする
と、『あたしなんぞ、斯うしてゐ
ますので、ホントにお涼しうて：
元山や仁川など、思ひ出しも致
しませぬ』、さういつて、二ノ腕
をめぐつて見せられる。と、そこ
には、氣味の悪い奴(青大將)が
キリ／＼と三ツ位巻きついてゐる
『ワッ……』

○だが、こいつは、ヒドク涼し
いさうだ。

○また夫人は、大の鮮人ビィキ
で、知人中に反對論者でもあると
何度でも押しかけて、鮮人のため
に、論辯せられた。『ハイ御免下
さい。高松でございます。昨日の
お話の、續篇をいたしに参りまし
た』——大抵な男子が旗を巻いて
『ビヤーン……それは、それは』

魔の屠場

福士末之助

(總督府學務局)

【10】

と戦争、強食弱肉、さては世界の
大戦と國際聯盟、生存權の主張と
軍備の縮少、實際と理想、遠心と
求心、正と反、是等は恐らく永遠
に不可解の問題でせう。うち見渡
した所、泰西の人々は、自己及そ
の國民の『生』と『富』との爲め
には、如何なる惨忍、如何なる無
情をも辭せざることは、日本の人
々よりも遙かにひどいやうです。
筆者はかく考へてもてゆける間に、
種々なる史上の惨跡を背景として
磔上に血を滴らす裸体の基督と、
花上に申々如たる涅槃の釋尊との
對比に於て、無限の感興を禁し得
ないでした。

◆三粹人の話

三木 一 書

○豫ねて兄弟同様にしてゐた會
議所の大村氏、日本生命の大場氏
殆ど時を同じうして隱退を聲明し
た。

○兩氏と親善な鑑業會の徳野氏
一日兩先輩を朝鮮ホテルに招待し
食事を共にしながら、『ママ寄る
年波でもないのに、チト見切りや
うが早いですよ』

○兩氏曰く、『イヤ潮時だ。マ
ダこれから見たい風景もある。こ
れから讀みたい書物もある。それ
に、のう×君、紅いものを見
て、いくらかドキンとする中に、
閑散自由の身となりたいネ。エー
君はどうぢや』、『ウン、其處ぢ
やよ〜』

○徳野さん、これを聞いて『ア
レも神の中にあるなら、ワシヤあ
したから妙心寺へ入門する』

本年は羊の年ですから、萬事は
平和であるべき筈なのに、日比谷
原頭は、亂闘の騒ぎを傳へ、世に
は不況の塵を聞くとは、何たる縁
起の悪いことぞせう。羊は果して
温順柔和の表象でせうか。成る程
基督の抱ける小羊に、深きに仁愛
の神韻を感ずるとき、之を敬し之
を信する人々の心にも、懐愴に反
する和樂、慘酷に反する慈愛のあ
るべきを念ふのですが、今回ゆく
りなくも、シカゴの魔の屠場に於
て、日毎に幾百の羊を屠る惨況を
見るに至つて、人間に所謂道心と
いふもの、或は惻隱といふものが
之ありや否や、將又至愛を高調す
る基督教の信奉者に、羊を表象と
する汎愛の情ありや否やについて
深甚の疑を起したのです。

又この血腥き室には、鮮血、黒血
斑々たる白地の作業服を著けた、
夜叉のやうな屠手が待つて居つて
羊の運ばれ来る毎に、逆手に持つ
た刃渡り一尺三四寸の魔刀を振ふ
と見るや、一閃グサトばかりにこ
の罪もなき神の使の咽喉を刺し抉
ぐる刹那、鮮血淋漓として流れ來
ると共に、羊の首は我と我が血を
浴びつゝ、グサタリとぶらさがる
といつたやうな、至慘至酷の有様
に、並ひ居し見物の男女、齶しく
顔を背けるのでした。斯くして息
をもつがゆばかりに、移り来る羊
を屠殺すること、見る間に數十頭
に及ぶのですが、鮮血ドク／＼と
流れて首のグサタリと下がれる數
十百のこの羊の屍體は、更に器械
の作用に依つて、第三の室に行く
こゝでは手を取る。その次きの室
にては屍體を縦にさいて、内臓を
むしり出す。かくて數時間の後に
は、一股づゝの羊肉となつて、一
ト先づ冷蔵庫に入れられ、やがて
自動車に積み込まれて街頭に運ば
れ行くのです。文明の作業といへ
ばそれまでの事ですが、何たる慘
酷無情の事ぞせう。賢人が『君子
遠厨房』と言つたのは、如何にも
尤至極のやうです。鬼もあれ、基
督に抱かれし羊の子、魔刀に屠ら
れて我と我が血を浴びる屠場の羊
群、このコントラストを何と解す
べきぞせう。實に妙な謎ではない
ぞせうか。トロヤの昔よりの平和

と戦争、強食弱肉、さては世界の
大戦と國際聯盟、生存權の主張と
軍備の縮少、實際と理想、遠心と
求心、正と反、是等は恐らく永遠
に不可解の問題でせう。うち見渡
した所、泰西の人々は、自己及そ
の國民の『生』と『富』との爲め
には、如何なる惨忍、如何なる無
情をも辭せざることは、日本の人
々よりも遙かにひどいやうです。
筆者はかく考へてもてゆける間に、
種々なる史上の惨跡を背景として
磔上に血を滴らす裸体の基督と、
花上に申々如たる涅槃の釋尊との
對比に於て、無限の感興を禁し得
ないでした。

ビールを語る

ため。普通瓶詰前に百日前後を
貯藏する。

とにかく各個の原料が渾然と融和

この羊の行列が、ウヨ／＼、轟きながらやがて屠殺の室、死の室に順次を送られ行くを見るとき、何人も憤憤の感に打たるゝこととせう。

れて我と我が血を浴びる屠場の羊群、このコントラストを何と解すべきとせう。實に妙な謎ではないでせうか。トロヤの昔よりの平和

やよ／＼』
○徳野さん、これを聞いて「ア、しも神の中にあるなら、ワシヤあしたから妙心寺へ入門する」

ビールを語る

丹 羽 勇

(大日本麥酒出張所)

A、眼からは……色合、光澤、泡立の良否を。

B、次に……鼻と口舌と喉

C、最後に……酔心地

第一、容器の選擇、申すまでもなし。パインツ、グラスを最上。なければスプリット、グラス又結構一點の曇りなきはもてなす人の床しさのしづかれると申すもの。

第二、適當の冷氣を保たせる事夏の涼臺の冷し麥酒も心うれしきものながら、あまりにすぎては水と異ならず。まして田圃の水を飲む眞晝の接待麥酒に至つては正に論外の沙汰。

爐邊の雑談に、さては麻雀に、ほんのり生温かい麥酒のうまさ。

第三、喉頭流入法。麥酒の中に迄米を入れねばおかぬ日本人にまこと無理からぬ事ながら益にふくむ灘五郷のお米の水のその様にチヨッピリ唇になめチュット吸込む式。これは麥酒にとつて最も通がれぬ飲み方。

兎に角コップの縁を口中に入れること略々中程迄。後は腹中にグツト流し込む事。だから寧ろ口内舌端の味覺でなく咽喉上の味覺神經の百パーセントの活動によると同時に鼻神經から來る一種不可思議の風味を嚥下する。

一寸でも外國へいらした方ならば麥酒の濁りはさまざま苦にならぬ筈。麥酒は濁るものだし濁つても無害なのだから。

英國式は濁るのが本當。この濁りが口當りよく營養價值があるから。

日本の麥酒は廣告文の通り正に獨乙式。だから濁りはない方がいい。麥酒をすかして文字が讀めれば最上。琥珀光、俗にビチ／＼生きてゐなければ。

序ながら混濁は、蛋白質、澱粉、糊精、樹脂、或はビッチ等の無生物から來るのが普通。處が所謂生ビール、これに來た混濁は最も忌むもの。是は酵母、細菌のため。悪臭もひどく酸味も多い。これは絶対に避けるべきもの。だから御承知の通り生ビールは製造工場より二日も三日もかゝる遠い處へは送れない。

忽布がすぎれば苦味、又古くても同様。

酵母の乾燥がすぎれば豆の焦し汁をのむ様、炭酸瓦斯の過ぎたもの王冠を抜けば泡が甚敷く故、昔は程を抜けば泡が天井まで飛ぶなんて云ふのが最上とせられたこともあつた。だから年寄は麥酒は泡を食べるものと思つてゐるらしい。

不足は申すまでもなく、氣拔麥酒。最も氣のきかぬ代名詞。

いつまでも炭酸瓦斯の泡が絲の縁に立上るのが最上。水の硬軟も大きな原因の一つ。所謂うれてない若かい味のするもの、これは貯藏期間の短かい

ため。普通瓶詰前に百日前後を貯藏する。

とにかく各個の原料が渾然と融和したものが最上。だから忽布、酵母、水その他が各個の個性を失つて麥酒と云ふ別個の物質を形成したものが最上と申すもの。

よつて奥様の買物帳に、

一、必らず瓶を逆さにして陽にすかしてみる。これは混濁光澤を見るため。

一、少し振つてみる。炭酸瓦斯を見るため。

次に且那樣の御召上りに、
一、悪臭、酸味強く苦味甘味の異常なるもの。酸味の異常は酢酸菌、乳酸菌の作用。

一、泡沫が粗大、永續性なく、ラムネ式の泡立はよろしからず。

一、防腐劑入りのもの。
一、飲用後頭に来るもの。

こんなのは御召上りにならぬ事先づ大体前記の通り。以て多少の御參考ともならば幸甚である。

◆筆のしづく

三 木 一 彦

○今西龍先生の御次弟は、醫博で、軍醫總監をしてゐられる。

○また御末弟は、同じく醫博で某地で、病院を開いてゐられる。

○この二人の弟さん達は、世にも珍らしい兄イさん思ひで、兄イさんの研究のためには、我々は資を惜しまぬと申される。

○ツイこの間も、博士が『滿州語の語』(自費出版)を出されるに就いて、五千圓の費が着いた。
○學界近頃の美談といふ評判。

精神家

堤 永市

(漢城銀行)

松本さん——私が昨日銀行俱樂部の午餐會に行きますと友人Aがだしぬけに『君はホントに今年から宗旨替へをしたのか』と訊きます。『僕には別段宗旨といふほどのものもないが、あるとしても替へた覚えはないが』と答へましたところ、『それでも雑筆には今年から酒を飲まないと言ひます。あるじやないか』と言ひます。そこで私はあのことばは雑筆社の水井さんと子供の話をした時に饒舌つたには違ひないが、私の日記といふあの名文は私にはとても書けないこと、又感想はあの通りであつたが、正月は飲み通して子供に遺憾なく行儀の悪い所を見せたことを率直に申しました。ところが友人Bは横合より『それで安心した、君が宗旨を替へられて懇親會の時にあの六齋に見られなかつたら同人非常な寂寞を感じるよ』と彌次ります。更にCは又『子供のことなぞよく考へるに及ばない。君が遺憾なくやつて妻君に心配をかければ、君の子供はお父さんのやうな事ではお母さんに心配かけるからと、自然に自ら戒しめて謹嚴な人間になるのだ』と教へて呉れました。Cの説も至極尤もだと考へられるし、Bの言ふが如くんば私が『精神家』となることによつて友人にも迷惑(?)をかける次第でありますから、これは私としても猶よく考慮する必要があると思ひます。私の如き者が精神家になるのは、斯様に種々の障害があるといふこと——私と『精神家』との距離がいかに絶大であるか——といふことを御承知願ふ爲めに、以上一寸御報告申上ぐる次第であります。

見分 聞分
江湖百話
千 山 房

シ屋へ行かれました。

○さて、お壽司を賞味し終つて勘定となつた時、學生は、無論自分の分まで、ブライズさんが支拂つてくれるものと——ソコは、日本流に——高を括くつて見てみるとやをら臺口を出したブライズさん、その中には、オンリー參拾錢の銀貨あるのみ。外には何一ツない。そしてブライズさんのいはるゝに、『拙者の愛妻は、毎日拙者の小遣ひとして、三十錢を呉れます。彼女は、實に理財の天才として、景仰するに餘りある婦人です。由つて私は、この三十錢で、私の劇前だけを拂ひます。ぢや、これにて私は失禮——』、謹嚴なる大英帝國の紳士は、堂々乎として、大踏歩して去られました。

○學生しばし茫然——『ウーン、新らしいワイ』

○このブライズさんは、倫敦大學の出身その夫人もまた、同期の卒業生——聞くとここに依ると、御夫婦は初め一學生として我が豫料の藤井秋夫先生の中に挟んで、聽講席に着いてゐられた。春秋いくとせ、いづしか愛慾の芽は芽ぐんで『ネ、藤井さんこのレターを、そつちのお方へどうぞ……』若きブライズさん眞ッ赤になつて——それを取次くと、今度は夫人の方から、『モン藤井様！お願ひ……これをどうぞそちらのお方様へ』、耳のつけ根まで、バラ色になつてゐられる。藤井先生まことに多忙！

○思へば、さうした甘き追憶のあるお美しい御夫婦たさうです。

ことを後知願ふ旨めに
申上ぐる次第であります。

くしい御夫婦さうです。

臺灣とごろく

帝國最南端—鶯鑿鼻岬

植村俊二

(植村病院)

二

打狗の舊名の方が親しみのある高雄市を出發したのは、まだ朝霧が町家の停仔脚を閉ぢ込めてゐる早朝のことであつた。昨夕高雄へ齋くなり出迎の人々に拉せられ自動車でトップを極め、自慢の夜景を見せられた壽山が今しも曉の夢からさめて車窓の外に浮き出して見える。今日は帝國最南端鶯鑿鼻を見物する予定で潮州迄車行し、それより自動車にて南行二十餘里即ち自動車里程のみにても往復四十餘里を突破せねばならぬ旅程である。

やがて無電の鐵塔樹立する鳳山を過ぎ、東洋一の稱ある下淡水溪の大鐵橋を渡り、製糖會社の大煙突林立する屏東(舊名阿猴)の邊に至れば滿目悉く是れ甘藷畑、風に揺く緑の葉の波は十里の此方より十里の彼方に打つゞく。其間バナナの實たわわなる芭蕉の林又は垂漣措く能はざる鳳梨の畑が介在して、一望空闊の野につゞく有様は全く島とは思はれない。

潮州驛へ下車すれば津下郡主が莞爾として出迎へて呉れた。構内に立てられた近郊名勝案内に鶯鑿鼻—帝國最南端、當驛より二十幾里—と掲げてあるので、小生『廿里の遠路も近郊へ編入せらる

るは島國どころか大陸式ですね』といへば、郡主『實は最近まで當驛は終點であつたので便宜上かう致しましたのがまだ其儘になつてゐます』と答へられた。如才ない郡主より一くさり道程の説明を聞き直に用意の自動車の人となる自動車道路は坦々として緑、色濃き街路樹のトンネルを作り兩側のサイドウォークは牛馬の往來に充つ。所謂三線道路なので自動車の疾驅は何物も妨げない。此並樹は或は相思樹、或はセンダン、或は松、或は合歡木といふ様に所々違つてゐる。流石に郡主がお自慢の道路だけのことはある。相思樹は台灣全島至る處に繁茂してゐる。

吾邦の川柳に似て幹は程よき曲線を持ち風姿楚楚として趣きがあるあのきまつて南宗畫の水郷に畫いてある楊柳に似た樹は正にこれだなどと思つた。

南進するに従ひ地勢が次第に變つてくる。台灣の中央を南北に連亘する脊梁山脈は何時の間にか左の車窓近く迫つてくる。車はそれから派出せる幾條の河川を直角に横切つて走つて行く。台灣の河は凡て之を溪と名づける。之は黄河楊子江などにめなれた支那人には河とか江とかには映じないやうなしかし其河幅は随分廣く前記の下淡水溪鐵橋の如き長さに於て東洋

一といふには驚かされる。さて之等溪の水流はいくつにも分れ、其各水流間には畑が耕されてゐる。まるで大陸的な地形である。幸に乾燥季なので水尙少く自動車は勢よく水をはね飛ばし乍ら徒渉する

もう此の邊は純南洋風景で田を耕す水牛、一種の軋音を立てて原始的姿そのまゝ荷車を牽きゆく水牛、濁水の中から頭だけ出す水牛、牧童を乗せて悠々欄歩する水牛、背に鳥を止らせて平然と野草を貪る水牛、横溢せる野趣は悉く水牛によつて代表され、台灣の風物に強い地方色を與へてゐる。枋寮といふ小都邑を過ぐ。入口には丹塗の華表が一基立つてゐる。古色蒼然として擗すべしである。此の邊婦人の頭髮は北方のそれと全然異り島田に似て遙に小さく角力取の髻を大くしたものに赤い紐を巻きつけてゐる。私共の田舎でも昔よく娘の子が男髻といふ髪を結ぶてゐたが、それに似て如何にも鄙びて古典的な情趣が波みとられる。

やがて脊梁山脈の支脈が無數に派出して海に迫り其間唯一條の道路を通ずるのみとなる。右手は一碧千里、白帆の去來もない淋しい海だ。此邊地味饒餉山程をなす丘陵の間を縫ひ、時に溪流の斷崖四十五度の勾配をなす所を上下する眺望のいゝ山麓の駐在所で一休みと自動車をとめる。所が思ひもかけぬこゝに廿人許の生鬻男女が群れてゐるのに驚かされた。霧社事件の直後で餘りいゝ心持はしない男は半裸體、例の蕃刀を背負つてゐる。中に山で射とめた大山猿を逆に吊るしてゐる者もある。實に鹽骨稜々だ。早速紀念のレンズにおさめる。警官夫人の接待を受け邊僻孤獨の生活に對し慰藉の言葉

を残して前途を急ぐ。
土地益乾燥、溪流涸渇して一滴の水もない。臺灣荒涼の間を走ること數里、この一帶の山地は彼の牡丹社蕃の蟠居する所で明治七年西郷都督により討伐せられたバイワン族の兇蕃であつたが、今は歸順して道路や並樹の出入などをしている。山麓に近い養吉が木立の間に隠見する。併し路傍に古く立

てられた漂流民の屠殺に遭ひし紀念塔は鬼哭啾々慘鼻の史實を物語る。台灣に生蕃、無い方がいゝだらうといやそれでは餘りに單調化する。只これがあるために台灣の美しい空想を幻滅に歸せしめるところがないでもないが。
帝國最南端——之を口吟むだけでも何となく全身に緊張を覺ゆる邊境墜落の尤、恒春を過ぐるこ

三里早やこれだ。南はパツシー海峡を隔て、近く比律賓群島に面し左は太平洋、右は支那海、一天曇りなき碧落の下、黒潮おどるコバルト色の大海原、白馬の鬣を振ふにも似たる波の穗から吹き送るオーゾーンの香高き潮風を滿喫し、綠色濃き多生の上に疲れた兩脚を踏み伸した心持は、とわに忘れられない臺灣旅行中隨一の紀念である。

◆夜盜徘徊記

北漢山人

○總督府の加藤灌覺氏が、長い旅からもとる。

○座敷の一隅に、布團棉が山のやうに積んである。

○思へらく、『ハハア冬が来たので、門生のK君が、ワザ／＼不在中に届けてくれたカナ。難有いことだ』、加藤さんヨ、で一つ鄭寧にお辭儀をした。

○夜に入つて、寝やうと思つて押入れを開けると、これは如何に？……布團が一枚もない。おかしなことだと思つて、近所のT君を呼んで来て、見てもらふ。

○T君一目見て、『ウフッ……先生、またやられましたネ』

○T君の説明に依ると、泥棒が侵入して、物を持って行かうとする。格好の入れモノがない。ソコで、布團を引き出して、その中味(棉)を抜き、残る布團がわに、シコタマ物を詰めて行く。『先生……だから、この布團棉に、お辭儀をなさる理由はない……』

○加藤氏半分呆れながら、『ナル程……でも、さう承はると、今

松峴吟社席題

水仙、かるた

- 水仙やらうたき尼が經机 大藤 波天
- 水仙に硝子器も賣る華商哉 同
- 水仙や木の葉つもれる庭の端 牧田 奇正
- 話つきて客尙去らず水仙花 野田 神郷
- 水仙や筆をおいたる卓の上 鈴木 芸窓
- 灯を消してふと水仙の匂ひ哉 牧 牛人
- 水仙の花白々と明けにけり 矢鍋 如是
- 水仙の芽球根を破りけり 同
- 洋装の女ありけりかるた會 同
- 椅子の間の隣の室にかるた哉 安達 綠童
- 温突に並べて反りしかるたかな 同
- 讀み終へて一つ残りしかるた哉 能登 行濼
- かるたはて、廣き座敷に札一つ 清水 三青
- 投入れの床に舞ひ來しかるた哉 堀部 蘇泉

度は泥棒の智謀に、改めて、お辭儀をしなくなりました』
○それからT君が、被害品の調査を始めやうとすると、加藤氏固く辭退する。『先生、ナゼですネ

』と訊くと、『でも、私の宅に、何々があつたか、第一主人の私が知らないんです。だからアタタには、この事業は、益々御困難と存じます』、T氏『ダーッ……』

肌合の爛

い。酒味は好みに由つて甘口、辛口の別があるが、其の孰れにしても辛味、旨味が調和し押し強

儀をなざる理由はない……』
○加藤氏半分呆れながら、『ナ
ル程……でも、さう承はると、今

○それからT君が、被毒品の調
査を始めやうとすると、加藤氏固
く辭退する。『先生、なぜですネ

知らないんです。だからアタタに
は、この事業は、益々御困難と存
じます』、T氏『ダマツ……』

肌合の燭

三木清 一

(京畿道財務部)

酒飲みには嫌な者はない、と謂ふ

具體化する必要ありはすまいか。

其の一面、酒を飲まないやうな男
は意氣地がない、とも謂ふ。孰れ
も酒飲みに対する一面觀であつて
全體觀ではあるまい。本來酒は害
になり毒にもなるが、薬になり營
養にもなる。用法及用量の程度奈
何に由つて善悪孰れともなる。酒
の性善なりとする論者あると同時
に酒の性悪なりとする論者もある
しかし酒は二元的性能を有つて居
る譯ではなく、之を悪用しやうと
善用しやうと酒其の物の知つたこ
とではない。酒は之を用ふる者の
方法と分量とに應じて其の効果を
異にし、或は確でない者となり或
は嫌な者となるに至るのであらう
然るに其の之を思はないで、單に
酒飲みなるが故に批難し又は酒を
飲まざるが故に意氣地なしと斷じ
去ることは早計であり深癪過ぎる
やうだ。

千年代の歴史的發展を遂げたもの
であつて、酒の存在は決して一日
の故ではない。勿論其の間には酒
に對する國民の考方も色々變遷が
あつて現に近代に於ける反酒思想
又は反反酒思想の如き正に其の現
はれの一つである。而して從來酒
に對しては善解あると同時に誤解
あり、禮讚あると共に批難あるを
免れなかつた。之れ畢竟酒の一面
を觀ての論であつて反酒派、反反
酒派互に反省すべき必要ありはす
まいか。

酒は働き盛りの男性の嗜好品と
して、働き盛りの女性の衣服と共に
其の國の文化を表徴するもので
あつて、一國の經濟、文明の向上
の程度は『アルコール』性飲料の
品質と嗜好とに依つて推知するこ
とが出来ると稱へられて居る。各
種の酒が創造されて斯の世に存在
するには何等かの理由がなくては
ならない。が其の理由を探究する
よりも酒の性効を善用して人人生
活を豊にし幸福ならしむることが
出来るならば、先づ其の善用策を

單り『アルコール』性飲料に限
つた譯ではない。どんな物にして
も利用法則を誤つて悪用濫用すれ
ば毒害の弊測り知るべからずであ
るが、善活用すれば利福之に伴
ふに至るは今更論を俟たない。酒
の利用法則は良酒適度に在る。故
に須らく良酒を求めて適度に用ふ
べく、其良酒とは(清酒の場合)
色澤淡麗であつて、俗に云ふ色の
淡い、照りの佳い艶のあるもので
ある。色澤の佳くて酒質の悪いと
云ふ酒は極めて趣い、酒の色がぼ
んやりして透明でないものは、佳
い酒でないとい稱するも過言ではあ
るまい。色澤淡麗なると共に若い
靨郁たる芳香を有つて居るもので
なくてはいけない。色が佳くても
不快な臭みを感じるならば、それ
は決して佳い酒の香とは云はれな

い。酒味は好みに由つて甘口、辛
口の別があるが、其の孰れにして
も辛味、旨味が調和し押し強く
且舌觸りも咽越しも『スラリ』と
して滑かな爽快味あるものを良酒
とする。苦味若くは酸味の強いも
の又は酒味の薄過ぎる物などは不
良酒であつて酒の産れが悪いが、
調合が巧みならざるものである。

花は半開、酒は微醺と云はれて
居る。微醺陶然の域を以て酒を飲
む適度の限界とすべきであらう。
若し之を超ゆることあらば利用價
値の認むべきもなく、却て毒害
伴ふに至つて家庭破壊論、亡國論
なども出づるに至る。

清酒には幾分のフーゼル油を含
んで居る。此の爲に特有の芳香を
有つて居るが其のことは酩酊二日
酔の因を作すに至る場合なきを必
しない。故に清酒は必ず肌合程度
の溫細をして飲むべきである。そ
して清酒は徐ろに飲むべきであつ
て一氣に呑むべきでないと思ふの
である。

惜まれた話

漢江漁郎

○今度京畿道警察部長になつた
上内彦策氏、學生時代からの日蓮
研究者で、上人に關する書籍を蒐
集すること何千巻。法華經の研究
に於ても、遙に専門家の壘を抜く
といはれる。

○上内さん朗々として普門品で
もやると、莊嚴の氣座人を打ち、
坊さんなどは、『あ、惜しい。あ
ゝ惜しい。あれでお寺入りをしな
いといふ法がありますか』
○頻りに憤慨するさうだ。

交通神經の話

穂積眞六郎

(總督府外事課)

交通神經なんて言葉があるかどうか知りません、然しこのスピード時代に都會と云ふ巨人の體內を血管の様に蜘蛛手なす道路。そして、道路の上を絶えず間なく流れて行く人、馬、車の往來を見つめて居ると、この道路と云ふ血管に添つて交通神經とでも云ふ神經が全市街に行渡つて居てもよき層な氣がします。

人體内の血液の運行と神經の鈍敏とどんな關係があるか、醫者でない私はよく知りませんが、交通神經が鈍いと都會の體內で交通の脈搏がシャイネストクダかなんだか變な打ち方をする事だけは誰の眼にもよく解かります。

先づ私が交通神經の御醫者さんになつたと假定します。私の幼い時分の御醫者様は皆人力車に乗つたものです。若しスピード時代の交通の御醫者になるとするならば矢張りこの十九世紀の日本發明品を選ぶ必要があるのです。なぜなら自動車は餘りにブル過ぎて巡查に交通を整理させながら自儘に飛んで歩くのですからとても有能な診察が出来る筈がありません。と云つて巡查に整理されながら歩くのではありません。診察して居ると人にぶつかつたり巡查に叱られたり自動車にブーつて云はれたりミラー探りがミラーになる様に交通の御醫者が交通の病人になつてしまつてどうもうまく行きませ

ん。そこで須らく申陰の土となつて歩きもせず走りもせず前世紀の乗物でゴト／＼とゆられながら見て廻ると京城の交通状況を客觀的に見てユル／＼と診察が出来ると云ふ譯です。

何に見とれて居るのか車道を顔を横に向けた儘ではずに歩いてく人があります。車夫がハイ／＼と云ふ聲も耳に入らないで丁度太刀先三寸と云ふ邊になつてからヒラリと身をかはして『世にも横暴な奴だ』と云ふ顔で私を睨むのはこう云ふ人です。場末で往來一パイに丸太を背負つて後らから聲をかけられて振向く拍子に丸太で車夫の顔を拂ふ。それを見て笑ひながら歩いて電柱にぶつかると云ふ様な二重奏三重奏も折々見かけます。小さい例を擧げて居ると限りがありません。光化門通りの中央に溝を掘つて、『片側往來止』なんて書いてあつたのも交通醫學上の好材料です。然し何にしても光化門通から長谷川町邊りをラツシユ、アワーに通りますと行手は蜘蛛の子を散した様、人道も車道もなく蜿々とした勤人が一パイ擴つて歩いて居るのを見かけます。これを見ると私の様な醫者はどれが靜脈でどれが動脈か解らなくなつてしまいます。兎に角京城と云ふ巨人も其中に住む吾々も少し交通神經をピリツとさせないと洋行歸りの若僧に『京城は入口の割合に

往來の危い町だネ』なんて續にさへることを云はれます。

【一六】

新築落成

一階 食堂種球場
二階 御宴會場
三階 無料開放
本町五丁目

阿波文

電本一八三七

麻雀奮戰記

漢江漁郎

○日本ビール出張所では、梅垣所長以下皆な麻雀をやる。

○片やサクラ麥酒でも、濱田支店長以下悉く麻雀をやる。

○『どつちの支店がうまいだらう』、『それアいはぬが花さ』、『オーヤ、乙なことをおツしやるネ』——とう／＼實地にわざ／＼とべをやつて見る事になつた。

○試合開始午後六時、終了翌朝午前三時半、日本ビール得點六十二、サクラ同五十九。

○非常な接戦で、一同宇頂天となり、いよく戰を終へた時は、へ／＼になつて、自分の足と他人の足とをとり違へ、ヒトの足へ自分の靴をはかせたりした。

○日本ビールの凱歌に引き換へサクラでは、『まア一度は蹶つておきます。だが、次回を見て下さい』、意氣天を衝くのおん有様であります

冬景色

ることは年中行事の一つであつて雪見の宴など、洒落れる處の騒ぎでなく眞剣になつて雪書を防ぐ方

冬 景 色

窪田次郎治

(京城 測候所)

れたり巨甕車にフーって云にわたりミラ採りがミラになる様に交通の御醫者が交通の病人になつてしまつてごうもうまく行きませ

人も其中に住む吾々も少し交通神經をピリツとさせないと洋行歸りの若僧に『京城は人口の割合に

おきます。だが、次回を見て下さい』、意氣天を衝くのおん有様であります

新年勿々から飛雪粉々として一切を淨化したが例年と違つて暖かな元旦であつた。朝鮮神宮に參詣して白皚々たる雪景色を眺めながら社頭の雪を吟詠した人もあらう

四六度 樺太落合 樺太記録
四三度 威南長津 但シ日領内
四一度 北海道旭川 内地記録
二二度 京城

屋簷機嫌か過ぎてとんだ雪達磨となつた人もあらう。其後度々雪は降つたが一向寒くならないのでお正月気分が出ぬなど、喜びの不平を訴へてゐる内に俄然嚴冬將軍は襲來した。今迄の泥濘の道は鏡の如く氷り道行く人の足取りもあぶなげで、鮮内所々には『レコード』破りの低溫が報せられ國境は零度以下四十度に降つた。西比利亞は同五十度だ。蒙古は同六十度で殺人的の酷寒だなど、新聞の記事は雪と寒さで可成り賑かだつた

多は北風が吹いて寒い、氷が張る雪が降るなどの外、色々珍らしい現象が見られる。
凍雨、雨氷、霧氷、細氷などである。

世界中で一番寒い處は何處であらう。既往の記録によれば西比利亞の『ベルコヤンスク』(北緯六十七度五十五分)を中心とする地方は一月の平均氣温が零度以下五〇度位に降り、北極圏の『グリーンランド』地方は同四〇度以下になる。之と反對に南極圏の一月は零度以下二度位に過ぎないが七月には零度以下三〇度迄降ると云ふから北極は南極よりも寒さは烈しい。各地の記録を擧げると世界にはモット寒い處があるかも知れないが記録がないから分らない。

雨が降る途中で凍つて丁度南京玉の様になつて落ちる凍雨や、降つた雨が直ちに地物に凍り付く雨氷(雨氷が降ると地上は一面鏡の如くになり草木は一本づゝ氷の衣で包まれ電線などは繩の様に太くなり往々其重さの爲に切斷する)霧が樹枝や其他の物體に氷り付きそれが段々成長して五六分の長さになる霧氷(俗に木花又は花ボロなどと云ふが偶々雪のない時に此れが出来るとなかく美觀を呈する。又微細な氷の結晶が空中に浮遊する細氷は日光に照されるときら／＼光り丁度針が空中に浮いて居る様で一寸氣味が悪い感がする。西比利亞は殊に細氷が多く時には太陽が見えない位になることもある。是等は何れも寒地特有の現象である。

近年『スキー』が盛んになるにつれて積雪の多い所が段々探し出されるが内地では裏日本や北海道の西部に積雪が多いことは有名である。中にも北越地方は排雪機關車が用を爲さず家が雪の下に埋も

消えるが北越地方や北海道では一度降つた雪が未だ解けない内に又積るので積雪丈餘に及ぶ所が多い是が町であると道と屋根と同じ高さになるから到底雪撤などは出来ない。仕方がないから家の扉を突き出し其下を通る様にしてある。向側との交通は所々に雪の壁道を明ける。時には二階の窓から出入りをすることもある。

最低氣温 地名 備考
六五度 ベルコヤン 世界記録

降雪や積雪が交通其他に及ぼす障害は大したものだが、又一方都合の好いこともある。寒地では結氷や積雪時期になると種や牛馬車を用ひて盛んに物資を運搬する。冬になつて北滿の大豆が輿地から鐵道沿線に山と運ばれ又北海道や鴨綠江の深山から木材を搬出するのも皆これ多の賜である。

北極の人は氷雪で家造つて住んでゐる。吾々が考へると到底寒さに堪へられないと思はれるが決してさうではない。外界が零度以下四五度位に降つても家の内は零下五度位にしかならないから却つて暖かい。
雪の降るときはカサ／＼又はサラ／＼と一種の音を立てるが、之は雪華が相打つ時に發するものと

人蔘と人魚

佐瀬武雄

(鐵道局)

思はれる。暖國や春の積雪を踏むとサク／＼と音するが寒國ではキエー／＼と鳴る。北海道邊では雪を踏む音がキエー／＼と云ふ晩は必ず寒いと云ひ、又戶外を通る車輪が雪に軌る音を聞けば凡そ温度の見當が付くと云ふ話である。

吾國で雪の多い處は北越地方を中心とする裏日本と東北地方、北海道、樺太等であるが、どの位積るであらう。

二丈 五寸 新潟縣中頸城郡 榑池村

一丈三尺二寸 北海道石狩國南 龍村

一丈一尺五寸 秋田縣北秋田郡 阿仁合町

一丈二尺八寸 山形縣東田川郡 大泉村

一丈一尺 富山縣西礪波郡 南礪波村(黒部峽谷は三丈に達すといふ)

一丈 五寸 石川縣能美郡白峰村

一丈 福井縣南條郡大河内村(但し敦賀邊は二尺位)

八尺 九寸 滋賀縣伊香郡中河内村

一丈 長野縣下戸井郡 豊郷村

等が内地では大關格であらう。是れは一度でなく度々降り積つた時の最深積雪である。

朝鮮には未だ其調査が出来て居ないが、大体は江原道、咸鏡南道平安南道等の山地帯が多い様である。最近では昭和二年一月北鮮に大雪が有つて新聞では元山、徳源郡地方は五六尺、元山驛構内吹溜りの所は一丈五尺の積雪と報じてゐるが、當時元山測候所の記録は約一尺七寸である。京城では八寸八分(大正九年一月十三日)仁川は一尺四寸(大正十一年三月)が二十餘年間の最深記録である。

西洋に水精あり東洋に人魚あり皆妖艶なる美女に畫けり。兩手あり乳房あり、半身魚鱗を生ず。之を啖へば千歳の齡を延ぶと謂ふ。夫れ雀化して蛤となり、山羊變じて鱧となる。蓋し人蔘は人魚の山澤に生を遷せるものか。其形態の人形に彷彿たるものを採りて愛用すれば、萬病立どころに癒え、克く延壽の源を作すと。

古來人蔘は朝鮮の特産なり。朝鮮婦人の服装が人魚の化身なる龍宮の乙姫に似たるも亦宜べなるかな。されど一は動物性にして一は

植物性なり。夫れ或は消化劑に於けるペプシンとヂヤスターゼの如きものか。茲に於てか想へらく、若し人魚に人蔘をあしらひ啖ふを得ば、ペプシンとヂヤスターゼを合せ用ゆるに似て、之は是れ補腎藥なり、起死倒回、不老の仙とならんこと明鏡を懸けて誤りなからんを。

山間の狭き畠のこゝにして高麗人蔘はしげりたるかもわれもまた死ぬるまじきぞ面のあたり人蔘の葉は戦きつゝあり

◆新世界の話

北 漢 山 人

○總督府の加藤瀧覺氏、さき頃東京に遊ぶ。

○舊友「朝鮮の田舎者は、マダ斯ういふ新世界は知るまい」とて銀座のユニオン、カフェーといふに案内する。

○室内壯麗、美人群をなし、電飾ほの暗うして、若き男女あちこちにて喃々密語す。

○加藤氏喟然として、「嗚呼、我等何をなすべきか。君、宜しく指導し給へ」

○友人と一卓を占領す。數名の美人來りて、或ひは手掌に接吻し或ひは卓下より、頻りに白脛を伸

べて、我を蠱惑せんとす。加藤氏恐怖極點に達し、「嗚呼……拙者は朝鮮が戀しうござる」

○この時、ほの暗かりし電燈、一時にパツと明るなる。加藤氏蘇生の思ひ、一美人に向つて、「君もう何時だらうネ」、スルト美人は、グット洋装の前をめくり上げて、「マダ九時二十分!、早いわヨ」、見ると、アノ練馬大根のやうな太股に、腕時計ならぬ股時計を仕掛けてある。この奇想天外の Ero 装置には、流石の加藤氏も震ひ上り、「ウワッ……寒氣がするヌヌ」

○コ、の女給の總指揮が、例の原阿佐緒女史で、禿げたる重役、セメント樽のやうな財豪に、君臨してゐる有様は、「全く恐怖の至りです」

足裏の觸感

◆畫壇風聞記

八分(大正九年一月十三日)仁川
は二尺四寸(大正十一年三月)が
二十餘年間の最深記録である。

○友人と一卓を占領す。數名の
美人來りて、或ひは手掌に接吻し
或ひは卓下より、頻りに白脛を伸

セメント樽のやうな財源に
してゐる有様は、『全く恐怖の至
りです』

足裏の觸感

松岡久子

(吉野町一丁目)

◆畫壇風聞記

紫 水 生

○洋畫壇の新進花形山田新一畫
伯も、そのかみ美校學生時代には
相當のお茶目さんでした。

○當時体操の先生に、『山あら
し』とて、とても喧ましいお方が
居られて、生徒一同まことに難澁
に及びました。

○或る日例によつて体操の時間
山田氏のクラス一同上衣を着たま
ゝ整列して居ます。と、さあ大變
！日頃きびしい先生のこと、怒髪
天を衝いて長々と御説教です。そ
れが炎天下で無慮一時間。

○それから二三日後、又いやな
体操の時間に、之れは又何うした
事！、山田氏のクラスメートは全
部上衣を脱いで整列して居ます。

○さあ先生喜ぶまい事か、さす
がはわしが説教しただけはあると
得意満面。そしてスラスラと出席
簿の呼び上げ。

○『山田』『ハイ』『田代』、
『X.Y.Z』『ハイ』『ハイ』『ハイ』
やおら出席簿をポケットへ収めた
先生『集れッ』、パタ／＼『氣
を着けッ』と順よく出来るものと
あたりを見まわせば、コハそも如
何……。

○學生の影も形もあらばこそ、
ハテ不思議なと探して見れば、先
日の説教にフンガイした學生連中
出席簿に先生の目が吸ひついでる
瞬間、點呼の順に返事しながら、
サツサと脱衣場へ引揚げてしまつ
たと判つて、流石の『山あらし』
開いた口がふさがらず。晴れ渡つ
た大空を打眺めながら、『ウーン
やつたナ』

暖房の火を焚く音に目をさまし
ます。常よりけ窓が明るんで見え
る。雪だなど思つてとび起る。果
して満目白皚々、遠く漢江のあた
りまで、ぼーつと雪霧に包まれた
市街は、さながらの繪です。

凍てついた路の上へ／＼と降り
つもつた、まだ足跡もすくない雪
を、さつ／＼と踏みながら甬山
へ登ります。一足々と廣くなつ
てゆく展望、遙に見る北岳、仁王

山は壁ふかく積つた雪のために鋭
角いやが上にも鮮やかに澄み切つ
た曉の空にくつきりと浮び出て居
る姿は、曾て見たシラネバダの高
峰を思はせます。

雪に明け、まだすつかりと醒め
切らない街からは常ほどの雑音も
おこらず、只わが踏む雪の音はか
りが聞える静寂さです。

雪の下の氷の上にとふと乗りかけ
て、滑るまいぞと思はずも固く
みしめる足裏の觸感。靴を隔て、
掻くといつた、こそはゆさです。

風はなくとも頬を刺す寒氣は冷
さを超していたいやうです。よし
スキーやスケートの快は知らなく
とも、雪中の散歩は冬の中の一
番の楽しみ、自動車に乗るのが惜し
いと云へば或人が、それは下駄で
歩く者の苦勞を知らないからと云
はれました。

寒中の雨でした。今まで大地の
表を堅くはりつめて居た雪も氷も

一時に解けはじめました。歩道車
道の出来て居ない道路は、まるで
地殻がゆるんだやうに、泥濘！泥
濘です。

つ／＼ぬら／＼と泥濘にふみ
こむ足裏の觸感、靴を隔てゝ居て
も不潔です、不快です。

す／＼前を、眞新しい足駄に、道
をさへ汚すまいとするかの様に。
いかにも潔癖な日本人の姿でし
た。どろ／＼な泥濘を近々と足裏
に感じさせるゴム靴といふものは
清潔な習癖に富む日本人の好みで
はなさうに思へます。

明治の詩人は足裏の觸感を一人
ならず歌つて居ます。好もしい歌
ですが、あの感じを下駄から得た
らうか、靴から得たらうか、はた
草鞋からか、この冬の雪と雨とは
私にとけない謎を残しました。

都鳥
鳥割 水
烹 焚
旭町一丁目
電本三三六六

税關通過

菊山嘉男

(總督府會計課)

1101

先年私が歐米を騙けづり廻つた時は随分多くの國境を通過したが恰も浪人で貧乏の最中而も爲替相場が一番割の悪い時であつた爲に荷物は全く身の廻りだけで餘計なものは何にも持たず従つて何處の税關でも何のこたはりもなしに通過した。

それでも多少厄介だつたと思ひ出されるのはウキーンからブタバストを廻つてヘニスへ出た旅であつた。文字通りの一人旅に言葉の通じない位は元より十分覺悟の前であつたが、時間の都合か運悪く國境通過の時に限つて夜中とか夜のあけがたとかで、その上に御承知の通りやれハンガリーだチエッコだユーゴスラブだ伊太利だとなむい目をこすり、成る程歐羅巴は狭い窮屈な處だと思つた位のことであつたが、愈々遍歴の旅も終つて最後に倫敦を立つときは洗石にお土産の二三種も買ひ込み途中の税關が面倒だから同じ納める税金なら母國の政府に納めてやれと問題になりそうなのは皆豫約したる汽船に積み込み置き、自分分は手提籠一つだけを持つて大陸に渡りマルセーユから歸りの船に乗り込まうといふ譯で悠々とやつてゐると、出發間際のきわどい時國の父から手紙が届いて倫敦でカーペットのよいのをお土産に買って來いとの注文である。早速方々の店を物色して恰好のやつを買つては來たものゝ乗り込むべき船は

もうたつてしまつた後である。イヤでもマルセーユまでは自分で携帶しなければならぬ。外ならぬ父の注文だから後生大事に手にさげて成規の手續をしゃうとオステンドの税關の前に立つた。處が税關吏が君は大陸をどういふ風に旅行する積りかと質問するから、正直に巴里で一泊次の日の夜遅くマルセーユをたつ船で日本に歸るのだと答へた處、それでは船の切符を持つてゐるかとの事に所持の切符を提示すると、それならそれで宜しい税は拂ふ必要なしと無税放免された一件が總計十三ヶ國を出たり入つたりする中關税の事で物いひのついた唯一のものであつた。

歸朝の後再び仕官した私は其の後一年程經過して平安北道内務部長として新義州に勤務して居つた頃のある日である。以前歐羅巴旅行の際あちらで世話になつたある内務省の高等官が折柄總督府で開催せられた會議に参列の序を以て國境視察にやつて來られた。

(久方ぶりのつかしとばかり會談を遂げたが次の汽車で亦京城へ引返へすのであるが三時間程の間に各方面見物がしたいとの注文、處が折悪しく自分の方にも會議があつてどうしても手離すことが出来ず已むなく別に案内人を附せず道廳の自動車で鴨綠江の鐵橋を渡つて對岸安東の御視察を願つたのであつた。

處がその中二時間も経つたと覺

し頃突如橋側の税關出張所より電話がかゝつて來て其お客の聲で税關で携帶の寫眞機がひつかまつて困つてゐる、ぐづぐづして歸りの汽車に乗り遅れると弱るから後の始末は君に任して自分だけは豫定の汽車に乗れる様に談判して呉れとのこと、早速かけつけて事情を聽いて見ると洵に双方共無理のない話。友人の曰く、ネー君の知つてゐる通りこの寫眞機は僕が永年使ひ古して先年來歐米各國を持ち歩いてゐるものだから問題にならんぢやないか、その處を證明してくれとのこと。税關のいひ分はそれはそうかも知れない、然し若し果して然りとせば何故最初安東に渡らるゝとき其の證明をとつて置かれなかつたかといふわけ。段々聽いて見ると安東に渡るときは總督府の御客として道廳の自動車でプーッへ行つたものだから携帶寫眞機の證明なんて忘れてしまつて居つたのが、この御客さん頗る凡帳面な性格の持主として安東の領事館へ行つた後は役所の自動車は氣の毒とはかり車をかへして別に荷物はなし時間はあるし、ゆるゆる國境の風物を賞せんとブラリ〜と橋をてくつて新義州の方へ歸つて來られた處を橋側の税關出張所で物言ひがついたといふ譯。双方の事情は洵に御尤。接待役たる小生の不注意といふことで電話で時の税關長に釋明し事済みとなつたことがある。

税關吏諸君の職務に忠實なるは洵に可然處と當時痛く感心し、其の事務の取扱振りは成る程中々むつかしく微妙なものであると大に御同情申上ぐると共に先年歐羅巴での出來事を回想して些少なことながら感慨の深いものがあつた。

車窓

(承前)

まは誠に心地よい眺めです。丁度私の隣の坐席に、石町あたりの大旦那が従者兩名と、愛妻とを召

國の多かりし給を居て、
ペットのよいのを土産に買
て来いとの注文である。早速方々
の店を物色して恰好のやつを買つ
ては来たもの、乗り込むべき船は

應の自動車で鴨緑江の鐵橋を渡つ
て對岸安東の御視察を願つたので
あつた。
處がその中二時間も経つたと覺

つかしく微妙なものであると大に
御同情申上ぐると共に先年歐羅巴
での出来事を回想して些少なこと
ながら感慨の深いものがあつた。

車窓

(承前)

長谷井市松

(朝鮮 銀行)

丁度三十日前に通り返きた時
大阪以東はとも激しい濃霧でし
たが、今日も亦あの時と同じ様な
深い霧です。あゝ又トンネルに這
入つてしまつた。太陽はまるで月
光の様な、かすかなヘル、レモ
ンに見へて居たが、ソレも段々薄
れて、殆ど灰色の霧の世界に掻き
消されてしまつた様です。斯うし
た陰惨な自然を前に、私共は今京
都に著いたのです。丁度九時十五
分前です。

京都に著くと人々はざはくへと
下りてゆきました。私もしばし驛
頭に下り立つて斯る光景を眺めま
した。私は端なくも大正十四年の
夏の一週日と、ソレから十五年の
六月終りに、保津の清瀬を下つて
此處にをり立つた當時のことを、
まのあたり追想せずには居られま
せんでした。追想は尊い詩である
——私はそうした考へを持ち得る
男です。

あゝ今池が見えて居ます。水の
涸れた川があります。池には柳の
古木が静かな影を落して居ます。
車窓寸觀の眺めにも、斯うした立
派な繪があり詩があることを私は
嬉しく思ひます。

大阪以西、湊川を渡つて神戸に
入る時——河堤老松の堰塞たるさ

◆醫界風聞記

北 漢 山 人

○今は故人となつた吉野町の木
村病院長は、生前相撲が何よりの
好物であつた。

○同家へ出入する按摩も、同じ
く相撲狂の一人であつた。

○『へー旦那！、その時太刀が
ドーンと、鐵砲をアツ放しました
か』、『アーン、そうぢや、斯う
やつてのう、一流の鐵砲を、ドド
ーン……』、院長覺えず力を入れ
ると、按摩と同體にバツタリ。そ
して目の見へぬ相撲狂は、アツと
いふ間に火鉢の中に、両手をつい
た。『アツ……ッ、ッ、ッ』

只今『楠公父子袂別の里』——
櫻井町の古驛を遠く望んで、車中
私は私の祖先の靈に合掌致した事
であります。私の先祖は河内富田
林の出、楠正忠公であり、代々私
の家紋は丸に菊水を用ひて居ます
此邊一帶は田圃が遠く展けて廣茫
たる平野の姿です。此前通つた時
には親友エヌ氏から様々な歴史上
の懐古に就て話されたのであつた
が、私は今田や、畑や、楡林や、

まは誠に心地よい眺めです。丁度
私の隣りの坐席に、石町あたりの
大旦那が従者兩名と、愛妻とを召
伴れて乗込んで居ます。九時五分
——神戸附近で始めて目覺めて、
さて衣物を著せるにも、顔を洗は
せるにも、すべてお伴つき、先づ
愛妻はタオルを持つて洗面所に行
き、次に一名の従者羽ブラシを携
行し、残る一名が案内に起つと云
ふ、蓋しその豪奢振りと言はんか
物々しき恐るべきものであります
併し乍ら私共一個の平民にとつて
は、斯る非現代的な舊時代の行動
は、何としても受取れない不可思
議な存在であると思へません
でした。

空が急に陰鬱になつて又霧が深
くなつた。一筋帯の様に現はれて
居た青空の影もいっしか隠れてし
まつた。雨にならねばいゝが、や
がて神戸の驛に入ることだろうと
思はれます(十時八分音屋にて)

○院長『オイ、どうした？』按
摩『旦那！、夏相撲だけに、今日
の勝負は 馬鹿に手先があつてい
で……アツ、アツ、何んテあつて
ことか』

○長谷川町の岩田院長も、ツイ
この頃物故した。

○平生子女には、活動を嚴禁し
てゐたが、夫御自身は、『コレ
拙者は、ちよいと友人を訪問して
来る』、『ヌーツとお出懸けになつ
たと思へば、大抵喜樂館か、中央
館！。ぬくぬくと一人でお樂みに
なる。抱へ車夫見つけて、『エヘ
ッ旦那お樂みで』といふと、『ユ
レ、馬鹿を申すな。ワシの見るの
は世相を見るのぢや。天下のため
ぢや。これでなかく肩が張る』

朗らかな告別式

飯泉幹太

(不二興業會社)

一世の樂天家飯泉翁が本日第十時百二十五才の天壽を以て金剛山別荘で安らかに永眠されました。遺志によつて一切の弔問を受けられません、又通夜も致されません。明三日第十八時同別荘で告別晚餐會を開き故翁最後挨拶を致されます。

と昭和七十一年三月二日第十五時 J. O. Y. K (金剛山放送局) から放送されました。

此の放送通知で世界各國に散在してゐる翁の子孫五百餘名は其の日に電波飛行機で到着しました。會孫中には歐米及東洋各國の混血孫も澤山ありました。

飯泉家の大家族が斯く多數會合したのは初めての事として其の夜は翁の長孫が盛んなる歓迎舞踏會を同別荘で催しました。

翁の舊知數千名も亦各國から飛行機で告別當日に來着しました。式場に充てられた大廣間の正面には翁の立像が安置され、其の前には清楚な野百合が二輪供へられてあるばかりで、山サチ海サチの供物も線香も、十字架もありませんでした。又式場の卓上は特種の裝飾なく、只高山栴物の可愛らしい花と世界で著名な料理、飲物、食器等の名を刻んだボタンが隨所に配置されてあるばかりで、一人の給仕も居りませんでした。定刻になると天女の奏する劉曉たる『春の曲』が金剛山の頂から

響いて参りました。之を合圖に家族も來會者も入り交つて着席しました。何れも故翁の逸事や追懷談に耽りながら各好きなもの名を刻んであるボタンを押して自由に樂しげに飲食しました。席上誰一人悔みがない言葉を取替はすものもありませんでした。

デザートコースと云ふ時分になりますと何處からとなく天女の拍手が聴こえて参りました。之と同じ時に何んだか立像の前に薄い霧が降ろされたと思つた間に何時も若々しい翁が少し屈み勝で、ニコ／＼しながら現はれました。満場は嚴肅なる拍手を以て迎へました。翁は例の底力のある元氣な聲でエスベラント語で下の挨拶をされました。

『内外の淑女並に紳士諸君、本日は實に麗らかなお節句日和で皆さんは定めて南極にピクニックや南亞の獅子狩に御出懸けの處を私の最後を飾る爲め托けて御來會下さいまして誠に身に餘る光榮と厚く御禮を申し上げます。』

私は明治大帝御即位第六年三月三日桃の節句に生れ丁度昨日の臨終までで満百二十五才の天壽を保ちました。此の間の世の變遷其の他自分の公私の經歷を申し上げます。いろいろ面白い事も相當ありますが、告別會の長講は恐縮ですが遠慮します。

私が在世申よく長壽の秘法など

【三】

と尋ねられましたが別段之と云ふて大した事はありません。性來私は形式張つた事が大嫌ひで、誰方様の前でも自分勝手な事を仕盡くして参りました。又自分が最善の努力を拂つても出来ない事は天命と諦めて心配を致しません。況んや心配を翌日に持越すと云ふ愚かな事を致しませんでした。私は無一物で學校から活世界に飛出し、く間に十數人の子女を擧げ、その教養婚嫁等には随分人知れず貧乏の苦酸を嘗めました。然し之れが爲め別に人様に御迷惑を懸けた覚えがありません。金儲けなどにあせつた事はありませんから大した成功も失敗もありません。居常に次しく思つた事がありますので、何日でも晴々しい心持で暮らす事が出来ました。夫れで何時何處でも吾氣に假眠も熟睡も出来ました。若し長壽の法など申せば之れが唯一の秘法でせうと存じます。然し之は自分の修養の結果などど自惚れる事は出来ません。全く皆さんの直接間接御指導の賜物で死して猶此の御高誼を忘れる事が出来ません。

昨日死期を豫感致しました時、臨終の御挨拶を放送しやうかと存じましたが告別場で爲す方が世間並で敢て奇を衒ふなどの謗も避けれられ穩當だらうと存じ旁々此機會に是非金剛山の絶景を探勝していただき其の雄大さを世界に御紹介して貰い度き希望で昨日放送通知をして貰つた次第でした。

私の遺骸は息を引取ると直ぐ長孫發明の消体液で蒸散して仕舞ひました。跡には骨も灰も何物も残りません。御陰で遺骸は骨拾ひや埋骨式、墓参り、寺参詣、墓碑建設等の無駄が省けて助かつたと大

變喜んで居ります。現世に御世話になつてゐた永い間には随分いろいろの告別式に參列致しました。而して長たらしい

人蔘脚では一も二もなく


の給仕も居りませんでした。
定刻になると天女の奏する鸞鏡
たる『春の曲』が金剛山の頂から

變喜んで居ります。

現世に御世話になつてゐた永い
間には随分いろいろの告別式に参
列致しました。而して長たらしい
弔辭の多いのに當てられた苦き體
験に鑑み、本日は一切の弔辭を御
斷り申上げ、亡者の私から在世中
の御厚誼を感謝したい希望で茲に
御挨拶を申上げる次第であります
死は何物をも浄化しますが齒の浮
く様な讀美の弔辭を聞かされては
亡者として實に憐れたい氣持だ
らうと同情に堪へません。亡者た
る私の挨拶に對しては娑婆に流行
る僧越ながら的の答辭は要りませ
ん。然し私の過去に對し非難し將
來に對し御訓戒下さる御希望の方
がありましたら謹んで拜聴致しま
せう。

甚だ恐縮ですが此の機會に暫く
の間私に世界的大發明の御紹介を
述べさしていただきたいと存じま
す。勿論私自身の功名談ではあり
ません。私の外孫に當ります二宮
尊徳翁の後裔で應用化學を専攻し
た長壽保と云ふ青年（本年六十
才）が今度長壽靈茶と云ふものを
發明致しました。之を常用すると
誰れでも一切の病氣に罹る事なく
百二十五才まで若々しく愉快に元
氣に働らく事を唯一の樂しみとす
ると云ふ靈茶であります。本茶常
用者は自己の死期を豫知しながら
人間としての最善の努力を拂つた
後の當然の歸結と諦め自暴を起さ
ず泰然自若として永眠し得ると云
ふ妙茶であります。而かも本茶の
原料が日本特産の米糠で而かも其
製法が何人にも出来ると云ふに至
つては實にエヂソン翁以上の大發
明として喜びに堪へない次第であ
ります。本日御來會の諸君に對し
ては御土産として用意さして置き

すが、告別會の長講は恐縮ですか
ら遠慮します。
私が在世中よく長壽の秘法など



人參劑では
一も二もなく

總督府 專賣局

精製の參精
に限りませう

發賣元
貴生堂藥品店

京城本町二丁目
(電本一三八番)
(振替七六一番)

ました、死者に偽りなしと御信用
の上是非御試飲の程を願ひ上げま
す。

長壽保は故大隈侯の日本人百二
十五才説に興味を持ち之れが研究
に没頭致しました。時々私の長壽
に對する食養などを尋ねました。
私が六十才前後農事會社に關係し
食用化學特に米に關する多少の智
識經驗がありました處から其の方
面の話を致しました。保は之に暗
示を得て發明されたのが長壽靈茶
であります。若し春秋の筆法を以
てすれば私も亦本發明に貢獻助成
したものと云ふ事が出来ませう。
在世中は鐵道王とか金融王とか何
々王とか申すスコトク黨（オダテ
に乗つて自己陶醉に陥り自分だけ
頗る得意の輩）から君は何にか世
の爲めになる大事業をしたかなど
と輕蔑されたものでした。私は此
の場合宇宙の大を知らぬ大馬鹿野
郎と默笑してゐましたが今度の發
明で死花を咲かした喜びをつぐつ
く味ふ事が出来ました。

りません。御蔭で遺骸は骨拾ひや
埋骨式、墓参り、寺参詣、墓碑建
設等の無駄が省けて助かつたと大

爲め極めて低廉で且つ其製法も頗
る簡単なのでドンナ家庭でも常用
する事が出来ると云ふのが特長で
す。發明者に對して世の拜金宗
者連が切りに各國の特許を得て一
獲巨萬の富を擁すべしなどウルサ
イ程勧誘して参りますが、長壽は
何日も濟世の志から苦心の結果
發明したもので而かも指導者たる
祖父は此かる穢なき考に賛同しな
いと嘯いてトウ／＼其の製法を公
開致しました。

本茶の發明は將來いろいろ面白
い現象を來たすでせう、本茶常用
者は前にも述べた通り一切の病魔
に襲はるゝ恐れがないので、近來
雨後の筍の如く簇生した醫學博士
などは眞先きに門前雀籠を張り何
れも農村又は工場に奔り生産事業
に従事するに至りませう。

本茶が番茶の様に普及すると目
然人口が増産し其結果生活必需品
の需要が激増し、此等生産事業に
無限に人を要しますので、世の中
に失業者の跡を絶つに至りませう
又他方には富の分配も漸次平均し
昔最も恐れられた階級闘争、左傾

主義などは影を潜め工場争議、小作争議は勿論、共産主義などを唱ふる馬鹿者は無くなるでせう。従て警察とか刑務所なども自然廢滅するに至るでせう。

本茶常用者は元氣に働らく事を唯一の樂みとし人間本來の性善に復歸し自然闘争などを致しませんから、内にあつては三百代言、裁判所の如きものは無用となり、國際關係に於ては各國其の軍備を撤廢し、ワシントン會議、ロンドン會議などの類も無くなり、差詰め日本の議會などで首相代理の御批淮失言などから血を見る醜態はなくなるでせう。政黨員などの遊食階級は何れも農村に復歸して鉄を執るに至るでせう。

本茶常用者は無病息災で百二十五歳迄長生し其の間私の様には十數人の子供を生むと人口は馬鹿に増殖し世界中住むに家なく殊に食糧は第一に欠乏するでせうと誰でも杞憂するでせうが、それが調節には發明者も非常に苦心し昔の様に夫婦間に子のないと云ふ不公平を取り除いた代りに總ての夫婦は必ず二人乃至三人の男女の子を擧げると云ふ靈力を持たしめました。夫婦の二人が二人の子供を生んだのでは人口は少しも殖へない譯であります。ソコで千夫婦申十夫婦内外のものが三人の子女を生む様に調製したのであります。實に妙茶靈茶ではありませんか。又子供は若い間に出来なくつて百歳以上に至つて生むと云ふ實に微妙の力があります。必意老後無邪氣の子供を與へて覺撫慰安させようとの發明者の苦心です。夫れで優生學上から又生活難などから來た昔の産兒制限などは影も形もなくなりトツカピンなどの廣告は新聞に敢

見し得ぬ様になりませう。

右の様に産兒制限の靈効がありましても兎に角百二十五才までは長生するので自然人口は増殖し衣食住中食糧問題は世界の大問題で農業、漁業等は取りわけ隆盛となり昭和五六年頃の農産物過剰から來る農村疲弊の聲などは夢想する者がなくなるでせう。別けて本茶の原料が日本米の糠と云ふので其の需要はますます増加し米價も漸騰し日本の農村は世界中の極樂となるでせう。六七十年前日本の議會で藏相が世界共通の農産物の過剰から來た不景氣など駄答をする必要がなくなるでせう。

斯くして日本の農耕法は非常の發達を來たし土地狭少の爲め數十階の耕土を空中に作り電光陽光等各種の應用によつて平均一段歩から米千石位收穫し得るに至りませう。

本茶常用者は常に晴々しい氣持で働く事を唯一の樂みとするので昔の様に酒によつて鬱憤不平を晴

【二四】

らし又は酒の麻痺で心配を忘れる必要がありません。醸造家も酒樓なども自然消滅し昔の様に禁酒法などと騒ぐ必要もなくなるでせう誠に長たらしい挨拶で恐縮致しました。然し生きてる者の長談議は以ての外でありますから私のホントウに最後のものですから此點悪しからず御寛恕を願ひたいと存じます。

折角御出で下さいましたが何等の風情もありませんで慚愧に堪へません。式後御エツクリ靈茶を御召し上りながら金剛山名物の天女羽衣の舞でも御覧を願ひます。

茲に重ねて在世中の御懇情を感謝し皆さんの御幸福を祈り上げます。ホントウにサヨナラ。

右挨拶が了ると翁の姿は雲の如く消え元の立像が現はれました豪壯なる歌曲に連れて楚々たる天女の羽衣の舞が初まりました來會者も其の調子に連れて夫婦相擁して愉快に舞ひ初めました(六、二紀元節稿)

◆目出たい話

なにかし

○土地信託の末森さんのお嬢さんも、ツイこの程盛大な結婚式を擧げられた。

○末森さんのお妹御は、かの滿洲重大事件につき、一身に全責任を負ひ、關東軍々司令官の要職を一擲せられた、村岡陸軍中將に嫁いてゐられる。

○ところで、その村岡氏は、キヨ子嬢(末森氏令嬢)を、目に入れても痛くない程の可愛がりやう

『キヨ子の聲は、ワシが選定するウム、將來日本の陸軍を背負つて立つやうな男を……』

○そして有望な銀行員、會社社員文官などから申込があつても『イヤ々々、男の中の男は、やつぱり軍人ぢやワイ』

○熱心に陸軍部内の若手を物色される中、天壽を假さず。昨年とらうく物故された。

○申將が物故されると、『さアもういゝぞ』と諸方からの申込み今度の縁談も、斯うして殆ど一氣にまとまつたが、仲人役の成松廣江の諸氏は、『だが、冥土からの將軍の、一喝が聞へるやうだ』

末森家の令嬢

る。李桐公の御實子にして李王家の實家なり。現に陸軍士

李王家の系統

朴 榮 喆

(朝鮮商業銀行)

昨今よく内鮮人の青年から李王家の御系統を尋ねられることがあ
るが中には相當の年輩の者ですら
之れを知られない向きもある様で
あるから甚だ畏れ多きことである
が簡単に記して見たい。

李王家

故李[●]太[●]王 李朝第二十五代王哲
宗大王無嗣なるが故に大院君
の御次男李太王を迎へ王位に
即かせられ、日清戦争の結果
韓國獨立せるを以て初代の皇
帝となり給ふ。明治四十年海
牙密使事件が因となり讓位せ
られ、日韓併合當時李太王に
冊封せられ薨去、後高宗皇帝
に追贈せられ金谷御陵に遷封
せられた。王妃閔氏は王妃事
件の御當人なり。

發明者の苦心です。夫れで優生學
上から又生活難などから來た昔の
産兒制限などは影も形もなくなり
トツカピンなどの廣告は新聞に散

いてゐられる。
○ところで、その村岡氏は、キ
ヨ子嬢(末森氏令嬢)を、目に入
れても痛くない程の可愛がりやう

令民の警備、
にまともだったが、仲人役の成松廣
江の諸氏は、「だが、冥土からの
將軍の、一喝が聞へるやうだ」

故李[●]王[●]拓[●]殿[●]下 李太王の御長男

にして李太王より讓位せられ
韓國皇帝となり日韓併合と共
に李王に冊封せられ大正十五
年薨去せられ金谷に奉葬し純
宗皇帝と追贈す。王妃は候爵
尹澤榮の女にして現在昌德宮
に御在せらるる大妃殿下なり
李[●]王[●]現[●]殿[●]下 李太王の御三男に
して李王拓殿下並に李[●]弼[●]公[●]殿[●]
下の御弟に當らせらる。李王
拓殿下無嗣なるが故に王嗣に
續かせられた。元韓國の皇太
子英親王なり。王妃方子殿下
は守正王殿下の女なり、御年
三十五にあらせらる。

李[●]鍋[●]公[●]家 (元雲峴宮)

李[●]鍋[●]公[●] は大院君の曾孫、李喜公
の御孫、李峻公の御養子に當

る。李[●]弼[●]公[●]の御實子にして李
王家の實家なり。現に陸軍士
官學校御在學中、御年二十二
にあらせらる。

李[●]鍵[●]公[●]家 (元義和宮)

李[●]鍵[●]公[●] は李[●]弼[●]公[●]の御嗣子なり
李[●]弼[●]公[●]は李太王の御次男にし
て李王殿下の御兄に當る。昨
年李[●]弼[●]公[●]御隱退と同時に家督
を御相續せらる。現に陸軍少
尉にして御年二十三にあらせ
られ。

德 姫

德[●]姫[●] は李王殿下の御妹にして李
太王殿下の御末女なり。對島
宗伯爵と御婚談の由拜承す。
御年二十にあらせらる。

飛行機禮讚

それかし

○田中丸病院長は、最近郷里へ
行かれる折、飛行機を利用して
以來、大の飛行機讀者となられた
○「君、機上支海の空高く、悠
々と航進する氣持は、何ともいへ
ないよ。乗つたことがあるかね。
何、ないと……それアいかん。君
も存外舊人だね。一度内地まで行
つて來給へ」

○それは、御熱心なものだ。
○「だが先生！、うつかり乗つ
て、墜落したらどうします」、院
長テツとも睡がす。「何、同じ死
ぬなら、人間飛行機から墜落した
いネ。瞬間の壯烈味は、何ともい
へないよ。君は、そりした趣味は
ない男かね」、小生敵々の體たら
く……。

本場銘仙
毛糸各種

ち、ぶや

本町二丁目
(電話五〇五番)

歌かたり (四)

足立丈次郎

(大日本人造肥料)

【三六】
○私は青年の頃東京に於て、故加部殿夫先生に和歌の添削を乞ふて居つた。そのころ「春雨ふる日柳のかけを行く」と云ふ題にて私が「數え來し岸の柳を見かへれば半はかすみて春雨のふる」とよみ秀逸に當選したことがある。そのときの賞品に同師から贈られた短冊が残つて居る。

春雨ふる日 殿夫

雨かすむ堤の柳むすひおきて 後れし子等かしをりにはせん

○明治四十年の頃、私は大阪に在りて、故藤村製運師の歌の會に加入して居つたが、扇と云ふ題にて私が「ひとさしの舞しひられて乙女子かおほつかなくもとる扇かな」とよみ秀逸に選ばれ、その賞品として同師より

述懐 観運

人によりわか歌よしと思ひしは はたとせあまり音なりけり

と書いた短冊を贈られたことがあ

○和歌など詠みそふにもない人の和歌二三を私は珍藏して居る。其一は故法學博士種積陳重氏の

寄花述懐 陳重

外國の花を皇國に移し植えて のとき春を見むよしもかな

である。其二は貴族院議員たりし故男爵青山元氏の

農 元

小山田の稻穂おもけに枝たれて 青ひと草も笑ふ秋かな

である。青山男爵は私の同窓の先輩であり、屢々相會ふの機會があつたり、和歌など詠まれようとは思ひもよらず。同窓生間の話題にも上らなかつた。それに立派な和

◆銀座徘徊記

漢江漁郎

○京城の紳士Hさんは、ツイ先年歐米各國を視て來たといふホケの立つやうな新知識であります。

○去年の暮、東京へ行つた。友人に連れられて、銀ブラをやつた誘はるゝまゝに、某カフェーに入つた。洋装の女給が、『宮女如花滿春殿』といふ有様、Hさん先づホーツといつて感心した。

○一卓に就くと、三名の美人が下にも置かず歡待。なかんづくHさんと向ひ合つた女給は、丸顔の色白の、黒耀石のやうな瞳をした

可憐でノブルな風姿！、Hさんチヨイと心を引かれた。

○する中、Hさんの足を、Hさんの爪先を、チヨイ／＼つつくものがある。始めは無意識と思つたが、どうもさうではないらしい。

その中、キニツと二つの足の間に、Hさんの爪先を、拗み込んでしまつた。愛撫してくれるんだ。況んやそれが、例の黒耀石のわざらしいに至つては、善良の紳士Hさんたるもの、明けて四十三歳なれども、思はず恍惚たらざるを得ぬ。『ヘン、どんなもんダイ。ウフツ』

○明くる晩、Hさんが、單騎御遠征になつたのは、ことわるまで

成宗王の醫學的識見

此事件は上述の如く、王の賢明なる醫學的根據ある裁決で、無事に済んだ。

○一卓に就くと、三名の美人が下にも置かず歡待。なかんづくHさんと向ひ合つた女給は、丸顔の色白の、黒耀石のやうな瞳をした

ぬ。ヨヘン、どんなもんだい。ワッ」
○明くる晩、Hさんが、單騎御遠征になつたのは、ことわるまで

て旦那のお顔は、見る／＼中にラレ／＼。
○Hさん思はず飛び上つて「入事ぢやアねえや……俺ア歸る」

成宗王の醫學的識見

今村 鞞

(南米 倉町)

李朝八代の王成宗は、中々に頭腦が明晰で、且つ人情に通じた王さんであつた。

某る日近侍に命じて、女醫を呼べと言つた、而して其女醫は若年の者ではいけぬ、成るべく年を取つた老女醫で、而も技術に精通した者でなくてはならぬ、と付け加へた。

宮中には内醫院と云ふ司さがあり、其處には男醫女醫も勤務して居るのであるから、近侍は早速一人の老女醫を召運れた。

成宗王は、女醫に對して、汝は是れより其家に行かねばならぬ、而して其家には新婚三日目の年少の女が居る、汝は其女に對して誤り無き檢診を行はねばならぬ、と命じた。

其診察なるものが、中々大變な仕事である、と言ふのは夫れが、今日婦人科ドクトルがやつて居られる様な部分的仕事であるからである。

其大變な仕事を受ける方も王命であるから、否み難くて容易に行はれた。

事の起りは、某る兩班が後妻を娶つたが、新婚三日目にして、王さんに上書して「處女失行あり、請ふ之れを去らん」と申請したによるものである。

上書の意味は、處女たるの要件を完全に具備して居なかつたと言ふのである。文學的に言へば、薄

紅ひのイバラの花ひらへ、蜂が這入つた跡があると云ふのである。讀者諸君は夫れは餘りにナンセンスだ、マサカそんな事態までを王さんに申上げる筈が無い、と一笑に付し去るかも知れぬが、全く事實であるから面白いのである。

此の時代には、儒教的道徳が中々にやかましく、今日で言へば委任以上と云ふべき地位の兩班は、若しも素行不良の女を妻にしたり或は又故なく妻を離縁する如き行爲あれば、風紀維持の官廳たる司憲府から彈劾せられたり、士林の問題となつたりして、其地位家聲に影響を及ぼすのであるから、右の如き上書を呈した譯であつて、當時の社會事情から見ても、不思議な事では無かつた。

女醫は王命を果して復命した、其復命の文章が中々詩的だ。曰く「裸して其何を見れば、金絲未だ斷たず、雞眼猶新たり、他に疑無きを保す」と。

金絲も雞眼も、希臘の女神ロイロの形容詞である事は無論だ。王は深く以て然りとし、厚く醫に賜ひて、且つ其の兩班に命じ、夫婦の縁を完ふして永く居らなければならぬ、と指令した。

此の文獻の終りに……其然る所以のものは、處女年少、夫酔つて其如何を省みず、誤つて之れと爲す、女家之れを以て惡名を免かる……とある。

此事件は上述の如く、王の賢明なる醫學的根據ある裁決で、無事に済んだ。

其後又同一の事件が起きた。某る朝士が、前項同様に後妻を娶つたが、又前同様の事を王さんに申請したのである。

今度は王さんは前のよふに、女醫には命じなかつた、夫れは女が前の如く年少で無かつたからで、此所に王さんの性的智能の凡ならざる、ひらめきが見られる。

王は近侍の者に命じて、彼の女の家の圖面を詳細に寫し來れと云つた。

近侍が寫して歸つた圖面の上に王の眼光は注がれて……此處が女の寢室だと言ふのだネと指さして此處に階段がある、此の階段を小さい時分からしよつ中あがりおりにして居たのだネ……と分つた様な、判らぬ様なことを言はれて、さて、早速其朝士に書を賜ふて曰く。

……譬へば秋栗の如し、時至らば自づから折く、率ひて之れと終身すべき也……と。

今度は醫者なしに常識的推理から其の *junfrauhkeit* を認定したのである。

此の文獻の終りに……聖慮衆人の及ぶ所に非ざる也……云々と王さんを褒めて書いてある。

今より約八百年前に於て、疑多かるべき此等案件に對して、優れた智能と判斷により、誤らざる明快な裁決を下し得たる、成宗王の頭の働きの非凡さは、稱揚三嘆に價するものがある。

而して此文獻は、當時の男女性道徳の觀念や處女性を尊重した思想や又醫學の程度を卜し得る重要資料の片鱗でなくてはならぬ。

財政的援助條約

泉 哲

(城大法文學部)

一九三〇年十月二日ジュネーブに於いて財政的援助條約なるものが二十八ヶ國間に調印された。其目的は國際義務を無視して締約國に對し戰爭行為に出でたる國に對抗する爲めに公債保證の形で援助

するにある。かゝる援助を受けるには攻撃を受けたる國より聯盟に援助を要求するを要する。理事會は平和的手段によつて問題の解決不可能なるを認めたる時は直ちに財政的援助を與へるのである。尤もかゝる場合援助を受ける國はあらゆる紛争を仲裁若しくは司法解決に求めるか、又は理事會の勸告する予備手段に従はねばならぬ。

るものであつて保證國の數に制限を設けて居る。第 常任理事國政府は特殊保證者となる。其他特殊保證國全部の勸誘を受けたる國も又此種保證國となるのである。

特殊保證の目的は普通保證に併せて特定國家を二重に保證して公債募集を容易にし且安固ならしむるにある。而して特殊保證の額は普通保證の額と同程度に達せしむるを得る。従つて特殊保證國の年々の保證額は普通保證額に特殊保證額を加へたるものを以て責任額と看做すのである。

右條約の効力發生と共に聯盟理事會は五名の公債監理委員を任命せねばならぬ。監理委員は瑞西國民及び瑞西に住所を有するものに限られて居る。委員の任期は五ヶ年であつて三月前に理事會に通告して辭職し得る。同時に理事會は何時にも委員を免職することが出来る。此の委員會は公債借受國のために公債の募集、利子の支拂其他の任務に當るのである。而して委員會の要する凡ての費用は借受國の負擔となつて居るが、一時聯盟より借受ける事が出来る。委員會はあく迄理事會に責任を有し公債監理に關する報告を年々理事會に提出しななければならない。

て居る。而してかゝる場合に用ひる聯盟の武力は理事會より各聯盟國に割當てるのである。かゝる規定あるに不拘、何故に上叙の如き財政的援助條約が締結されたのであるかと云ふに、聯盟が違反國に對して制裁を加ふる迄には違反國は既に戰爭行為に出で、聯盟の一國を攻撃するに至るのである。若し被攻撃國にして防戦の準備なき時は不測の損害を蒙る事は明である。そこで紛争解決の見込なき時は財政的援助を與へて防戦の準備をなし得る事とし、同時に攻撃國を反省せしむるの機會を與へた。かくして防禦の地位に立ちたる國を保護し違法國の行動を抑制若しくは抑止せんとしたのである。そしてかゝる援助ある時は小國と雖も大國のために威壓、脅迫せらるゝ恐れがなくなる譯である。惜むらくは此條約に調印したる國は聯盟國の漸く半數以上に達して居ない爲めに其效果は局限せられてゐる。

【二八】

一九三〇年一月一日に定めた聯盟費分擔額に比例することゝした。特殊保證は領土内の政府のために特殊保證をなすことであつて英國はカナダ、濠州、南阿等の特殊保證者となる場合を指すのである。此種の保證は普通保證に追加され

て居る。而して其の割當額は一九三〇年一月一日に定めた聯盟費分擔額に比例することゝした。特殊保證は領土内の政府のために特殊保證をなすことであつて英國はカナダ、濠州、南阿等の特殊保證者となる場合を指すのである。此種の保證は普通保證に追加され

信託預金
上以半一開上以昭〇一
張屋一方八半率益配近最
託信券証債有・託信理管産動不

念佛三昧

に行けるのが佛であります。故に袖の振り合せも多少の縁。京城雜筆を縁として若しも佛教はどんな



特殊保証は領土内の政府のため
に特殊保証をなすことであつて英
國はカナダ、豫州、南阿等の特殊
保証者となる場合を指すのである
此種の保証は普通保証に追加され

聯盟規約によれば規約に違反し
て聯盟國を攻撃する國があれば聯
盟全體の敵と看做し聯盟の武力を
用ひて其の國を封鎖し、全く全世
界との交通を遮断することになつ

念佛三昧

禿堂 清谷 惠眼
(本願寺派別院)

昨年七月本誌に我家の栖心樓
を記せし際、同誌に總督府學務局
の神尾先生が遊戯三昧をものせら
れて

三清洞に遊ぶ、清流に白衣を洗
ふ女の群の何と多いことだらふ
漫歩半里羊腸の山徑辛ふして登
るを得る邊にも依然としてこの
女群を視る。濯ぐもの、打つ者
乾かす者、煮る者、果ては林間
に飯を炊く者、營々たる如くに
して啼々。我々倦まざるもの樂
み自らその裡にある様だ。まさ
にこれ好箇の遊戯三昧!

之の文を思ひ出して、羊腸の山徑
此年は羊末の羊でもあり、自分の
職務に關係深き三昧を思ひ浮べ
て半年振りに禿筆を揮つて手前味噌
の念佛三昧の一文を草して京城雜
筆愛讀者諸賢の高賢に供するも、
是れ亦宿世の因縁淺からざる關係
と思ふて、御一讀の榮を賜はらば
禿堂の本懐之れに過ぎませぬ。

三昧とは母國にては屍を埋葬す
る所を三昧といふことは近畿地方
の方は御承知と存す。所謂三昧は
印度語にて、支那語に釋すれば禪
定の意味であります。基督教なれば
永眠とでも申しますか、兎に角寂
定の意味であります。寂定とは靜
かなる意味あると共に心を一處に
止むる意で、佛教の専門語で申せ
ば息慮凝心不作諸法と申して、他
に餘念を雜へず専心一意他に心を
散せず、我眞宗に申す一心一向に

阿彌陀佛をたのみ參らせて餘の心
を觸れざる状態を申すのでありま
す。念佛とは口に南無阿彌陀佛を
稱へるも念佛、又心に坐禪觀念し
て佛を念ふのをも念佛と申します。
南無阿彌陀佛とは印度語でありま
して、漢譯しては『無量壽』と
申します。この世にて鶴は千年龜
は萬年と申して目出度きことには
必ず鶴龜が出来ます。然し千年も萬
年もと言へば夫れで限度がつけら
れます。所が一般の人が元日にで
も南無阿彌陀佛と念佛でも申せば
縁起でもない、けがらはしい。例の

一休和尚が體體を捧けて『元日や
目出度もあり目出度もなし』と京
洛中にあるかれた。其の事が習慣
となつて商店は必ず戸をたて、を
きます。然し一面晦日に集金に
活動のつかれで戸をしめてをくの
も又理由の一つではあるが、兎に
角元日でも念佛唱へはけがらはし
いと、いふ習慣が形造られたのです
然し實質を尋ねれば無量壽、萬歳
どころか、千萬億々歳無量の壽で
あることではほとんど目出度いこと
はないのです。南無阿彌陀佛の説
明を釋迦は一代の仕事として説明
されたのが、今日の八千有餘卷の
大藏經であります。覺とはさとり
といふ事で佛教でいへば自覺と覺
他、覺行窮滿之が佛であります。
火のあつても、水のつめたいても是
れがさとり。自分もさとり人をも
さとります。其事が自他ともに圓滿

に行けるのが佛であります。故に
袖の振り合せも多少の縁。京城雜
筆を縁として若しも佛教はどんな
ものか、食はず嫌ひの御方もあつ
たら、我が日本文化の最初の開拓
者たる聖德太子が『日域大乘相應
地』とも仰せられしことあれば、
二千有餘年の日本文化と至密至緊
の關係にある我佛教を徐ろに御研
鑽くだされんことを切に御勧め申
します。

元朝口占
元日や何はなくともなむあみだ

◆脱俗振の話

北漢山人

○某氏の夫人が、バセット病と
いふのに罹つた。

○大學の岩井博士を訪ふて、診
察をお願いした。

○夫人の診察券に、千葉縣××
郡……といふ原籍地を書いてあつ
た。

博士『ハハア、奥さんも千葉縣
ですネ』

『左様でございます。先生は？
……』

『あゝ……私も千葉ですよ』

『それは……で、千葉は、
どちらでゐらっしゃいます』

『インバ沼を知つてゐますか。』

私は、あのインバ沼のそばの百
姓ですよ』

○『百姓？』には、奥さんも參
つてしまつた。

○『アレ位の大家になると、ホ
ントに世間放れがしてゐますネ。

私……御返事のしやうがなくて、
こまツちまつたワ……』

人情と義理

高橋 濱吉

(總督府學務局)

【三〇】

切りに大將の心事を察し哀愁婉情の情を述ぶるに對し「保典は不束なる子息乍ら、皇國の御役にたちたるを嬉しく思ふ」と答へ毫も哀傷の色を現はさなかつたと云ふ。

人情のために義理を忘れたる富樫、義理のために人情を抑へたる乃木將軍の心根を察するに、何れも胸もはりさげんばかりの悶があつたに相違ない。富樫は義理を固く守る武士なればこそ彼はよく辨慶の心情を察知し得たのである。

彼は義理に生くる武士なればこそ眞の人情を解し得たのであらう。乃木將軍は最愛の二人の息を戰場の露と喪ひ人一倍の悶々の情あればこそ嚴然たる義理の姿に更つたのである。この將軍にして旅順の露と消えはた幾十萬の我精銳と其親心を直に讀み得るのである。

人々義理に生くること誠に望まじき事ながら冷酷が之に伴ひやすく、人情に生きんこと誠に希はしきも、情實にほだされ易し。義理と人情とは相反せる二つの道行きなるが如きも義理の鏡にうつした人情、人情のうるほひをつけた義理こそ眞の義理であり、眞の人情ではあるまいか。

義理とか人情とかと言ふ事は日と共にうすらぎつゝある、昔の話を開いたり讀んだりすると、義理と人情とが社會生活の間に固くピツタリと織り込まれてゐた様だ。近頃では權利と義務といった様なものが之れに代りつゝある。義理は無言の道徳律、不文の約束である。人情は人の心を心とする超打算の人間性である。

確かに義理にも情ならず人情にも乖かずといふ境地は我等が祖先の拓きたる境地にて、是こそ世界独自のユートピアであつた。

昔から我が國の小説や戯曲には義理と人情とを中心として取扱つたのが可なり多い。義理と人情との間にさし挟まれて苦悶したり、人情としては誠にほだし難きも萬斛の涙をのんで義理をたてたり、人情忍びがたく遂に身をすてゝ義理を果さないといつた様な何れもひし／＼と胸をえぐる資材が中々に多く取扱はれてゐる。

勸進帳で知られてゐる安宅の關で富樫左衛門が義經を吟味するといふ一くさりも全く千古の美談として語り傳へられてゐる。富樫は鎌倉將軍に仕へて居る武士なれば義經の顔を充分見知つて居るので安宅の關の關守に据えられたのであつた。義經が強力姿に身をやつして辨慶等の山伏の中にあつて、かの關所を通りぬけんとした。炯眼富樫は之を看破し、

『いかにこれなる強力とまれとこそ』
と大喝一聲。辨慶もさるもの杖をふりあげて散々に強力姿を打つた富樫は此の有様を見て、主従の心情を察し

『通れとこそ』
と、武士の情で關所破りを見逃したのであつた。いかにも武骨一片の武士にはあらで人情味のゆたかさを示してゐる。と鳥もおとすと云ふ頼朝に對し義理をも忘れた措置をとつてゐる。

これは一つの傳説ではあらうけ

れども、千古の美談として今日も謳歌する所以のものも、辨慶の心もちや富樫の態度に少からず共鳴するからであらう。

乃木將軍が、第三軍司令官に補せられ滿洲に出陣するに際し、用品に至り軍の整備を待つ間に、先きに第二軍に従つて出征せる大將の長子勝典中尉が金州南山の戦に戦死したとの電報を受取つた。大將はしばし此の飛電を凝視してゐたが、やがて自ら「カツスケ、メイヨノセンシ、マンゾクス」との電報を靜子夫人に打つた。出陣の首途に最愛の長子を失ひたるに對し、満足の意を表したる將軍の心中や如何である。將軍は鹽太澳に上陸し金州方面より南下せんとする敵に備へつゝ、主力を旅順攻圍の準備に注いだ。其頃であらう將軍は長子勝典中尉の陣歿したる南山の激戦地をよきり一詩を賦け。

山川草木轉荒涼。十里風腥新戰場。征馬不前人不語。金州城外立斜陽。

人馬蕭々將士慘として騎らず。過ぎにし矢叫びの音、劍戟の迹を偲べば愛兒を失つた將軍の感慨無量なるものがあらう。

後旅順總攻撃中後備第一旅團長長友少將の副官たりし乃木將軍第二子保典少尉が傳令指揮の任務に當つてゐる遂に戦死したのであつたが、將軍は之を聞き「ちむ、さうか」と只だ二語、良ありて人々

朝寝坊の辯

度でぼつり／＼話すところには、矢張り何處かに『ね坊』の名にふさはしい味があつた。話のまぐらが馬鹿に長くて、ねとほけたや

朝寝坊の辯

高木市之助

(城大法文學部)

さを示してゐる尸とぶ鳥もおとすと云ふ頼朝に對し義理をも忘れた措置をとつてゐる。
これは一つの傳説ではあらうけ

二子保典少尉が傳令指揮の任務に當つてゐる遂に戦死したのであつたが、將軍は之を聞き『らむ、さうか』と只だ一語、良ありて人々

確かに義理にも忤らず人情にも乖かずといふ境地は我等が祖先の拓きたる境地にて、是こそ世界獨自のユートピアであつた。

△『北漢山人』とは世をしのぶかりの名、實は、と申しても、その實の又實はどなたか知らないが近頃本誌によく私の噂が出る。人形の鼻が落ちたり、ピンポンのボールがころがる位は平氣だが、寢坊の『なき名』を負はされては少々いたい。最初は取消の一文を草するつもりであつたが、今更取消したところで誰も私を早起組に入れてくれさうでもなし、まよよ、このところぐつと悪人になりけまし

もはたつきはしない。かるが故にアーベント先生はつい夜遅くまで勉強をし、つい朝遅くまでねる事になる。別にぶしやうのわけでもなく心がけが悪いせいでもない』尤も此心理の先生も實はあんまり朝起きの方ではなかつた。

△まづ第一に、寢坊といはれて外聞悪がる『寢坊』に、ないしよで、心理學上の(と云つても筆者別に心理學に造詣が深い譯ではないが、其昔學生時代?)に心理の先生からきいた處の)堂々たる稱號を御傳授申上げる。曰くアーベントアルバイター。當時其先生はこんな風に説明してくれたやうに覺えてゐる。『人間には二つの型がある。それは丁度、あらゆる人間が結核性と卒中性とに二分されるやうなものだ。一はモルゲンアルバイター(朝の勉強家)で、他はアーベントアルバイター(夜の勉強家)だ。これは習慣性といふよりも先天性のもので、假りにモルゲン性の男が夜遅くまで讀書をし

△但し私自身の場合を白狀すれば、少しちがふ。寢込みを襲はれた訪問客などに寢坊のいひわけをする時、『だつて、夜分おやすみが遅いからでせう』と云つてくれることがあるが、實は逆だ。あんまり寢坊をする。いくらなんでも良心にとがめる。でまあ、その罪亡ぼしのつもりで、夜少し本でも読んで見る、處がね坊がしてあるから一向ねむくならない、随つて夜更しをする事になるのだ。つまり夜更しをするから寢坊をするのではなくつて、ね坊をするから夜更しをするんだ。原因結果はどうせ循環するもの、大した違ひもなからうから、これもアーベントの類に入れて貰つてもいい。尤も、近世の皮肉屋秋成は學者得意のからいふ『類』を『祇園町のむすめ分の分の字にひとしくいとまぎらほしとなん』いつてはゐる。

△『ね坊』といはれるとよく『朝寝坊むらく』の事を思ひ出す。彼は私の學生時分、東京の寄席に出てゐた落語家だ。が彼の話振りは、落語の傳統を破つて一風變つたもので、あの、人を喰つたやうな態

△『ね坊』といふ言葉から、私は今ゆくりなくも、幼少の頃の母の呼びかけ『X坊』を思出した。今年十七回忌を營んだ母の母は、いつも私をさう呼んでゐたやうだ。寫眞の顔でない、ほんとうの母の顔がよく思ひ出せなくなつた今でも、この呼び聲だけははつきりと

△『ね坊』といはれるとよく『朝寝坊むらく』の事を思ひ出す。彼は私の學生時分、東京の寄席に出てゐた落語家だ。が彼の話振りは、落語の傳統を破つて一風變つたもので、あの、人を喰つたやうな態

△『ね坊』といはれるとよく『朝寝坊むらく』の事を思ひ出す。彼は私の學生時分、東京の寄席に出てゐた落語家だ。が彼の話振りは、落語の傳統を破つて一風變つたもので、あの、人を喰つたやうな態

聞える。近所の子供と夢中になつて遊んでゐても『おうち』の方から頻りに聞えて来る母のこの聲には勝てなかつた。遊び足りない未練を多分に残して、歸つて来るときまつてそこには好物のお菜と父と母とが私を待つてゐたものだ。

考へて見ると、あの時分には何坊と呼ぶのが男の子に對する一般に母の呼び方らしかつた。といふのは詩人川路柳虹(名は誠)はその時分の幼友達だつたが、彼のお母さんも頻りに『まあ坊』と呼んだからだ。親心に昔も今も變りのあるらう筈はないが、何だか何坊で呼ばれたあの時分の子供の方が、ハイカラな刈込みなどにして貰つてお母さん好みの、それとも三越好

みりの手締のジャケツか何かを着せられて、『まことさん』などと呼ばれてゐるよりもよつほど幸福だつたやうな気がする。

△三四五月の短夜に枕かけんのよき頃は朝寢こそまたをかしけれ、かならず目のさめぬにもあらねどうつら／＼ゆめみゆめみず、花に朝日にほひたるも、松に有明の残りたらむも、聞ながら思へるは起きて見るにもまさるべけれ云々、これは近世の俳人也有のことばである。

△がらりと障子をあけて出た縁側には、午前十時の日光がさんさんと降り颯いでゐる。大空は今日も亦朝鮮らしく見事に澄み徹つてゐる。睡眠を満喫した幸福感は

霧の太陽

徳野 鶴子

(櫻井町一丁目)

朝戸出の眼にしたしくも透しみるきりににじめる
大きな太陽

七彩の光りをもちて黎明の霧に生れたる今日の太陽

きもちよくけふを生きむと霧ににじむ太陽にむかひ深き息する

空はれてけふはあたゝかし片屋根の日かげの雪も消えそめにつゝ

早春の夜をときしらにむつみあふ友どちのおもわほがらなりける
X
今日の日はみじかしと思ふ久々に友と相よりかたりつきぬに

【三一】

がらかにも爽かな、頭とからだの申分のないコンデイション。

△これは實は私の今日の経験である(昭和六、一、二十五)

◆頭が下る話

北 漢 山 人

○岡村介石氏は、昨年の夏頃から、著述にとり懸つてゐる。何んでも畢生の大著らしい。

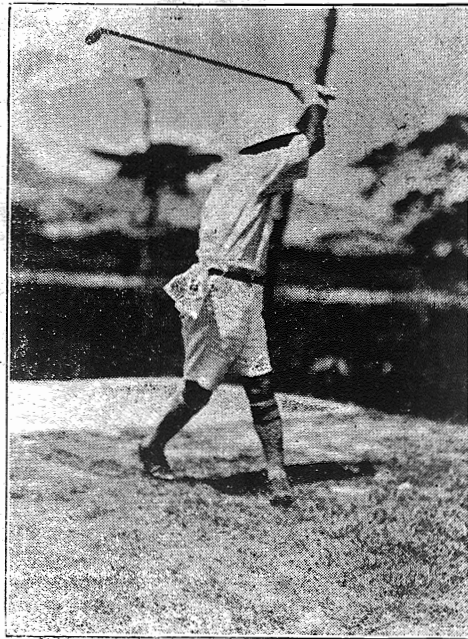
○そのため、一日の中客に接するのは、僅々三四時間、あとは、晝夜の別なく、執筆に忙殺されてゐる。

○尤も、少々の易断なら同氏の令嬢が、結構やつてのけらるゝさうな。『ハア、あなたは、戀愛問題ですな。相手の御婦人は、これアどうも何處かの女給さんらしい當りましたか。さうでせう。チャンと此處に出てゐます。氣象の烈しい御婦人ですネ。表面はやさしく見へても、性格は傍若無人ですよ。一生下馬になつて、ニヤ／＼笑つてゐられるつもりなら、この御縁もいゝでせう。ですが、日本には何千萬といふ御婦人があります。貴郎も御男子なら、一度は高い視野から、大きい眼を放ち、しっかりと御選擇をなさいまし』
○換一重を隔て、黙然と聴き入つてゐた介石氏、この時覺えずかめきを發し、『ナント、ナントうまいもんぢやのう。ウーン、ワシヤひとりでに頭がさがる』
○ところで、そのあとがいけなしい。』のう……同じ生まれるならお前何んで男に生まれて来ない……アーン』

京 城 雑 筆



寫眞は若き日の飯泉さん
——もこれ水戸ッぽうで
鼻ッ張り強く、我儘氣儘な
ること、例の黃門様に彷彿
たり。口も八丁、手も八丁
蓋し京城の一名物——



西洋の百姓田を耕すにあ
らず、これは飯泉さんお得
意のゴルフスタイルです。
京城のゴルフアの元祖たる
こと、そして實は——餘り
お上手でないこと、共に名
聲噴々——



このニョク姿はどうで
す——多分若き日のあまぎ
御追想に浸るゝところか
何んしろ七きおん奥様と富
士山のテッ邊で御婚約なさ
れたといふ、三十年前の新
人——

りつきぬた
い。『のう……同じ生まれるなら
お前何んで男に生まれて来ない……
……アーン』

最尖端を行く
明るく静かな
カフエー
アルプス
京城本町二丁目
(山本旅館前)

外科 皮膚科
瀬戸醫院
院長 瀬戸 潔
京城本町二丁目
電話 南一四九六番

茶いろく
茶器いろく
青々園茶舗
京城本町二丁目
(電話本局二二二番)

近一六二つの保養地
はげれる森も保養地は二八保養
業の二八分給ですむ
東洋生命京城支店
一區圖約六千五百
圓の現金を預けるの外、不承保額
に保額を上げます

M式巻上日機
ホロ形日機
各種テント
非露車用雨具
フットン袋
其他帆布製品
製作販賣

京 城 前
中 四 丁 本
會 商 ト ン
電 八 四 八 二

京城永樂町二

金物類

京城永樂町二
酒井婦人病院
 院長 酒井 二郎
 (電話本局一八八)

內科
 小兒科
占部醫院
 院長 占部 寛海
 京城黃金町三丁目
 (電話本局三四六四番)

京城本町三丁目
一番瀨醫院
 院長 一番瀨 慶次郎
 (電話本局四〇〇五番)

金物類
近藤商店
 京城本町三ノ三三
 電話本局 三五六一番
 三六一二番

明治町二ノ七五
利根川齒科
 院長 利根川 清治郎
 (電話本局三八六七番)

台灣の話

(補遺)

松井 權平

(大學病院外科)

【三六】
ツト」族があるそうである。
北投は蕃語から出た地名で此北投温泉のある地から世にも不思議な石が出て大學の斯道の權威者にも何と云ふ石か鑑定がつかず。珍しい石として學界に紹介された放射能のある石だそうである。後露西亜からと日本内地からも發見され、北投石と云ふ名をつけられた。それで正に蕃語源の學名も出來た譯である。

◆薄情の元祖

三木 一彦

○西鮮の一商港鎮南浦といふ町から巢立ちして、今は京城で、所謂朝鮮的な人物になつて人が相應に多い。

○ツイこの間も、森野銀頭取のところへ、齊藤久太郎、川添種一郎、後藤榮藏などいふ人が落合つた。

○ところで、齊藤氏のいふには『どうも鎮南浦の長老は、土地を見捨てるといふ風があつて、甚だよろしくない。現にコ、にゐる後藤氏は、既に見棄てた人、また川添君に至つては、將に見棄てんとする人。それが甚だ不心得……』
○その時、森さん『あ、待つた〜』、齊藤氏を押しとどめ『ぢやが、拙者の記憶では、その薄情の本家本元は、誰でもない。そういふ齊藤さん御自身だと思ふがどうだ……』に二十年前イの一番にトツプを切つた齊藤氏、俄かに目を白黒……『諸君々々、どうも朝鮮の冬が、だん〜暖かになる。その理由如何……アーン』

「バイワン」族の一番社を見物した時、公醫さんの話によると、死者は「スレート」小屋の床下に埋めるそうである。蕃丁で曾て巡查とか警手とかをしたと云ふ樽田君(本名タルサルモ、テフサ)の説明によると、腐敗した屍から臭氣の出ない様に埋める、餘り深くはないらしい。死にかゝつた者は魔がついたとて脈のあるのを埋葬するとか云ふ事である。尊敬される戦死者は入口に近く埋められる大方勇武を他に誇るとも云ふ譯であらう。産で死んだものは甚不名誉で野山に乗てる形式でいけられる。頭目の神聖なる土器は可なり大きなもので之は蕃丁は手を觸れられない。流石の樽田君も手をつけなかつた。「スレート」小屋の床下が死者を埋める餘地がなくなると、その家には禍津日のついたものとして棄て他に移轉する、從て部落も二百年位で變るそうである。その蕃社も百年位しか経過しないもので頭目は谷の川の龍から出たもの蕃丁は河原の石から化生したものだといひ傳へて居るさうである。穀庫は日當りのよい所で木と竹と茅で出来、誠に風の通りもよく住宅より快適さうに見える。之は穀物が變質しない爲めだそうである。米と粟と別に庫が出来て居る。樽田君の家など粟は二ヶ年位の分量だそうである。大きな庫であつた。壁は粟殻で構が見える。鼠を

防ぐ仕掛が中々振つて居る。二三尺の材の上に直徑三尺もある丸い「スレート」板の中心に孔のあるのを乗せ、それを土臺として上に蕪茸き小屋を作る。材料は竹が主である。地上から鼠が材を上つて來ても「スレート」板を上る事が出來ない。近くの竹に仙人掌をつけて鼠の上るを防いだのもあつたこの丸い石板は生番中に一般に擴がつて居るものらしく、丁度「ヤツブ」島の石の貨幣が似た形をして居るので、初め之が放置してあつたのを見た先生方は貨幣と早合點して人夫を雇つて山から運んで來た所が後鼠除けの庫の二次的の土臺石なのが判明して大笑したさうである。

宮原君の説によると生番も山部と海部とあつたので現在高山に住んで居るは山部で決して閩粵人が海を渡つて來てからそれに壓迫されて山地に入つたのではないさうだ。海部も昔は首狩をし竹に首を挿して置いたとか云ふ話で、之は「オランダ」が占領して居た頃「キリスト」教に教化され後年平浦蕃熟蕃と呼ばれた者で蕃の性を有し耶穌教を奉じて今見る影もなくなつて居るので之も今の内何とかならないと全く判らなくなるさうだ。此一部には正に新しく渡來した文明な民族に壓迫され山地に入り元來山部である「タイヤル」の風習を模倣して駆逐して居る「サイセ

お玉さんと梅忠

大向ふからきの字屋アツてなお壁がかゝりのする處であるが——
一体芝居小屋(劇場と云ふか)には特有の空氣が漂つてゐて、その

居る。樽田君の家など粟は二ヶ年位の分量だそうで大きな庫であつた。壁は粟殻で穂が見える。鼠を

明な民族に壓迫され山地に入り元來山部である『タイヤル』の風習を模倣して搬送して居る『サイセ

を白黒……」諸君々々、どうも朝鮮の多が、だん／＼寝かになる。その理由如何……アーン』

お玉さんと梅忠

柳 京太郎
(洋 畫 家)

一

幕末から明治初年にかけて、外國より招聘せられて來た異人の、枕席に待した女性、つまり『洋妾』は可成りの數に上つたであらう。早い話しが、長崎のお菊さんはマダム、パタフライと名を變えてあまりにも有名である。

それに『唐人お吉』は、色々の形で昨年から世に、華々しく現はれて、梅村蓉子の扮するお吉は、津田青楓氏に依つて描かれ、二科會に迄姿を現はしへした。

無論吾々の知る唐人お吉——ハリスの枕席に待したと云ふ——がどの程度迄、史的實事に依るものであるか別として、一篇の小説としては確かに面白いものではあつた、併し昭和六年の初頭より斷然出現した『ラゲザお玉』——木村毅氏執筆中の——は、色々の意味に於て、萬腔の悦びであると思ふ、明治の初年、工部省が設けられ、そこに美術學校が作られた時、彫刻の教授として招聘せられて來たラゲザ氏に彼女は嫁し、七年の任期を終へ、再び故國伊太利へ歸るの日、氏に伴はれ伊太利へと旅立つたお玉夫人が、現在シリール嶋に、七十一歳の高齡を迎へたと云ふ——お玉さん——であるが、此れは單なる花屋の娘として文久元年六月十日に呱呱の聲を上げたお玉——日本最初のモデル

女として——洋妾として——又本朝女流畫人として伊太利に名を

はせた唯一の關秀として——彼女のデビユウを物語つてゐるのみではなく、正に木村氏の此一篇は、一面明治文化史の貴きと文獻として、得がたき收穫であると私は思つてゐる。

あえて木村氏の提燈を持つ譯ではないが、近來稀な快著として、感嘆に耐えないものゝ尤なる一として再讀してゐる譯である。

二

『好色人子枕』に依ると、寶永七年極月五日、忠兵衛は千目でお仕置きになり、梅川は尼になつて終生伏見に庵堂を結び、忠兵衛の亡き跡を弔つたと云ふ——龜屋忠兵衛と榎屋梅川——戀飛脚大和往來の外題で、人の知る梅川忠兵衛の、井筒屋の一場は世話物として誠に濃艶な舞臺の明るさに比して息づまる様な一脈の寂しさを含んだ一幕である。

私は劇には暗い乍らも、歌舞伎の舞臺を好む心は、ひとしをではない、去る日——申村芝三郎、嵐菊香の女優歌舞伎がかかつてゐるのを幸ひ、はんばな時間ではあつたが、氣まぐれにも入つてみた。

量らずも梅川忠兵衛を演つてゐた、いなせな忠兵衛が、今花道へさしかかつた處である。

大向ふからきの字屋アツてなお聲がかゝりのする處であるが——一体芝居小屋(劇場と云ふか)には特有の空氣が漂つてゐて、その情緒的なものに、息づまる様な魅惑を感じるものであるが——此處は至つて靜穩、わるく云へば死の様な冷たさであつた。

私はかつて、東西顔合興業として歌舞伎座に、左團次、雁次郎連の芝居をみた、その折、雁次郎の出し物として、梅忠を見たのを覚えてゐる、配役は雁次郎の忠兵衛に福助の梅川、八右衛門は、確かに中車が扮したと記憶する——前にも云つためざめる様な井筒屋の舞臺に秘められた、耐え得ざる寂寥の氣は、刻々と迫つて來るのであつた——

扱てこんどの梅忠は、嵐菊香の忠兵衛だが、地が相當別嬪であるだけ、色男役にはまりはして居たが、ただそれだけのもの、梅川に至つては風格も色氣もあつたものではなく、仲居のおえんに至つては、井筒屋の一場はよくよく喜劇である。

併し、之はわかり過ぎる程、當然の事であらう、今更雁次郎や福助と比べるのが、むしろお笑ひものである、が併し同じ梅忠の封印切りの一場である、それとこれとであまりにも其處に、藝の隔たりの多いのを、私は淋しくも眺めるのである、天下の名人を以つて自任するもの、ある場合は好からふし恥も外聞も無く己れのつたない藝をさらけ出すのも好きが、吾々と名人との間に隔たる藝の距離は雁次郎と嵐菊香の、それ以上のものがありはしないか——

子供とカルタ

津田常男

(遞信局)

六歳と五歳との二人の子供に、イロハ歌留多を買つて與へると、よく取れるやうになつた。『犬も歩けば棒にあたる』『論より證據』などといふ古くからのイロハ歌留多で、今に廢らぬ所が妙である。子供は假名を知らないけれども、繪で覺えて了ふのである。文句も覺え易い。だけは宙に覺えて、カルタを持たないときでもよく口にして居ることがある。言ふまでもなく子供は文句の意味など一向しらない。

或るとき、呉服屋の來て居る傍らで、頻りに『安物買ひの饒失ひ』を繰り返して居る。子供は無心であるが、横で聽いて居ると嘖き出したくなる。尤もイロハ歌留多の四十八文字全部について、完全に説明して見よといふたら、大概の大人でも多少間違つてに相違ない。自分の子供時代にもこのカルタを弄んだ事はあるが、相當の物心がついても、全部が全部解釋が出来たとは思はれなかつたのである。この點でこのイロハ歌留多は斷じて子供の遊戯物ではないやうにも思はれる。

もつと子供に適したイロハ歌留多がないのかといふことになるが、それは全然ないこともない。例へば、鐵道カルタとか軍人カルタとかいふのが店にある。之に對して『犬も歩けば』のカルタを大棒カルタと稱して居るのである。

そこで軍人カルタは一度買つて與へたことがあるが、『勇ましい進軍喇叭』『露營の暗に歩哨立つ』『馬上ゆたかに司令官』などといった調子であるから之では五六歳の子供には薩張珍ブソ漢である。文句に含意はないが、かういふ漢語なり術語なりを理解するには小学校も多少上級にならなければ無理と思はれる。それにどの繪も軍人であるから、類型に墮し易い。よいといふことになる、結局、軍人カルタは幼い子供には興味が續かなかつたのである。

犬棒カルタは、子供にはその俚言の意味は全然通じない。けれど言葉そのものは六ヶ敷い漢語な感じがしないから覺え易い。眞意に觸れなくとも、子供身でどうにか解釋をつけて行ける場合が多い。例へば『花より團子』といへば、花と團子とを理解出来るのである。それに、繪の方からいつても、取材の範圍が廣いから、色々變つたものが出て來て、子供にとつては何となくグロテスクな興味が起るのである。

所が又このカルタの繪なるものが頗る六ヶ敷い。何分値段の廉いカルタのことであるから、十分の推敲が加へられてないと思はれる點もあるが、中には已むを得ないものもある。今四十八文字について一々對照して見れば、一寸面白

い研究が出来さうであるが、簡単な所で二三の例を擧げて見ると、『花より團子』は花と團子、『鬼に金棒』は鬼と金棒、『目の上の楯』はその儘に、何れも繪として表現する外はない。之は子供に取つては都合がよいのである。所が『論より證據』などになると論と證據とを繪では表はせない。勢ひ内容から來たものが繪になる。最初に買つたカルタでは、白装束の女が薬人形を持つて呪ひの姿をして居る。次に買つたカルタでは、裁判官が兇器を取上げて居る繪である。何れにしても子供では理解が出来ない。不明の儘に記憶するだけである。同じやうな種類でも『油斷大敵』に對して鬼と龜との繪では、事柄が餘りにポピュラーであるだけに、子供への説明も非常に容易であり、表現された繪も上品になつて、萬事が旨く行つて居る。しかしこんな例は他に殆どない。『良薬は口に苦し』といふのに、藥瓶を書いたのでは少しく物足りぬし、棒をつけた父らしい人が子供に意見をして居るのでは是亦子供には解らなくなつて了ふ。子供の側からいへば、五六歳の所ではまた繪の表現に疑問は持たない。子供は繪の意味が解らないことには煩悶しないで、文句と繪との間の聯絡にのみ苦心するのであるから、花といつて花のある方は、どうしても都合がよいのである。さうでなければ、うんと變つた物で表はされて居る方が記憶の爲に便利なのである。この點で類型的な繪を多くすることは禁物なのである。現在店で賣つて居る大棒カルタはもう少し値段が高くなつてもよいから、その苦心を拂つてほしいと思ふ。

飛脚旅行

次にいよいよ僕に挑戦された、勿論初手合であるから平手で願つたのだが、甲者に對しては二回共に勝を占め、乙者に對しては二番

飛脚旅行

橋本豊太郎

(鮮瀨開拓株式會社)

例へば、鐵道カルタとか軍人カルタとかいふのが店にある。之に對して『犬も歩けば』のカルタを犬棒カルタと稱して居るのである。

推蔵が加へられてないと思はれる點もあるが、中には己むを得ないものもある。今四十八文字について一々對照して見れば、一寸面白

のである。現在店で賣つて居る犬棒カルタはもう少し値段が高くなつてもよいから、その苦心を拂つてほしいと思ふ。

先月十三日の夜汽車で東京へ急行し、同十九日の夕刻歸宅しました。九六日に三時間半足りないといふ短時日の往復には敢て飛行機を利用したではありません。此の旅行を極めて短簡に敘するのもスピード時代にふさわしくはないでしやうか。

東京の親戚に不幸があつて、其の跡始末には非來て呉れといふ電報が來た。相續問題やら財産管理法の打合せに二日間諸方を飛び廻つて親族會議も無事に済んだ。一寸外務省に要事が有つて序に幣原外相に遇つて見たかつたが昨今非常に忙しいといふことで岸秘書官に面會した。そして談は支那に及んだが同氏の言に『あれは氣狂たから困る』とこぼされた。併し如何に氣狂ひでも隣交の好がある以上は其儘放任する譯にも行くまいと相顧みて呵々大笑した。

遇ひたい二三の友人もあつたが何分暇の無い爲めに電話で互の消息を傳へ置だけ聞いて共に無事を祝した。其内一名の親友には指定時に東京驛三等待合室で會合を約し相携えて銀坐を散歩し、新築の三越支店や、流行のカフエーなど一寸覗いて見たが、落ち付く先はおなじみの銀座三丁目横町に在るバー(舊繩駮)に腰を下ろし、先づ罇チリを命じて酌み始め、次から次へと佳肴數品を注文し、徳利五本を傾けて其の勘定が大枚貳

圓參拾銭!(嗤ひ給ふな)こんな處でも遠慮のない話の交換には差支がなかつた。

十七日夜八時二十五分の急行で東京出發、車中は僕の安眠所である。翌朝七時頃大阪で夢が覺めた盟歌して食事をすませ自席に戻つて見れば海軍將校らしい數名の客が隣席に座を占め、頻りに將葉の話がはづんで居た。其の様子では相當の技術がありそふでもあつたが、待つた車中で茶を談ずる程の人に大した名人の有る筈はないと思ふた。其の行先は江田島の海軍兵學校らしい。廣島までは未だ相當の時間がある。其處で僕は突飛に叫び出した。『私も將葉を嗜みますので、時間つぶしに一ツ將葉盤の急造を企てゝは如何です』との提案は幸に賛成を得たので、偶々傍に捨てゝあつた『サンドウキツチ』の空箱を材料に提供し、一名の士官は鋏を取り出して巧みに駒を作り、他の一名は稍々長方形の紙製盤を調製せられた。

兩將校は先づ對局を試みられた。觀戰武官たる余は好奇心を以て之を凝視した。其角道を開け次で飛車先の歩兵を進める邊は一寸定石通りであつたが、やがて十手程を指す内に首肯し得ない手がソッポ口出て來た。愈々進行するに従ひ終に例の助言がして見たくなつた然し待てよ、之は御無禮であるぞ——對局三回で勝負が付いた。

次にいよいよ僕に挑戦された。勿論初手合であるから平手で願つたのだが、甲者に對しては二回共に勝を占め、乙者に對しては二番の内一面の勝を特に譲つた。然し對手はスツカリ余の技術に敬服せられたものゝ如くで、別に臨み名刺交換を行ふたが、共に兵學校教官で佐官以上の人達であつた。聞く所によれば其の稽古は木村義雄著將葉大觀に就て研究せらるゝ由であるから、碁風は固より邪道に陥らず、所謂人前で指せる將葉であつたのを喜ぶと同時に、余も恩師辻六段に對し密かに感謝の意を表する次第である。

茶目讚美論

三木 一彦

○中央電話局の岡島局長は、先づ變り種の一人だらう。

○大邊世話好きで、同氏の保證で、遞信系統へ就職してゐるものが、何十人といふ數に上る。

○ところで、その若者等は、大抵腕白乃至茶目と來てゐる。

○『どうも不思議だネ、岡島君の世話したのに、普通の人間は、一人もゐないやうだ』

○岡島局長……エヘッ……と笑つて『勿論ですとも……そもく茶目や腕白は、健康の餘剰に依つて、發現するんです。つまり、それ自身體力旺盛、血氣充溢の證なんです。人間壯年にしてそれがなくてどうします。斯うした健康人が、ほどよく鍊達して、始めて大事を託する立派な成人が出来るんです。私は、若朽者——老ひたる若者は、大嫌ひでネ』

輸入したき事

(承前)

兼安麟太郎

(京城高商)

[四〇]

本の辨寸を費す事は濫費を考へられたのである。

唯に家庭ばかりではない。レストランでも、カフェーでも、灰皿はあるが辨寸の具へてあるのは極めて稀である。給仕に命ずると、彼はポケットからブリツケを持ち出して点火してくれるし、辨寸をとり出した場合でも、用事を足せば直ぐ自分のポケットに納めてしまふ。

之は單なる一例に過ぎないのであるが、要するに目下正金が四十九億餘つて居る佛蘭西人の消費經濟はわたしの知れる限りに於ては——それは不幸にして留學生を家庭に置く程度の生活者に止るのであるが——まこと約ましいものである。わたしには斯様な約ましいさをば其儘無條件に禮讓するほどの勇氣も無いが、事實上奢越の金を必要とする現今の日本に於ては或は他山の二石となり得ないものであらうか。

◆高知男の話

三木一彦

○今總督府圖書館にある奥田直毅君は、高知縣の人で、三菱の大番頭木村久壽彌太氏とは、従兄弟同士に當る。

○「どうだい、ワシも歳をとつて、だんく身内のものが、戀しくなる。お前も一ツ東京へ歸らんか」、奥田君ワンといへば、本店秘書役位にはスグなれる。ところが、先生大の利かぬ氣だ。「お前は、年をとつても、ワシやまだ歳をとらぬ。金持の威張り散らす東京へ、へん誰が歸るもんかい」

葬式

朝鮮の葬式に初めて出會つた内地人は、必ずや驚駭の眼を瞪り好奇の心を踊らすであらう。巴里の街で初めて葬式を眺めた私も亦、

若干は魂のゆらめきを感じた。だがそれは、葬列そのものが私に珍らしい故ではなかつた。寧ろ之は極めて平凡で、問題は葬列が過ぎ行く街路に在る人々により提供されたのであつた。それは、葬列の如何なる種類たるかを問はず、苟も之に出會ひ又之を行き過ぎるほどの人々は凡て脱帽する事である。疾走するタキシートの運轉手もバスの車掌も、馬車曳きも乞食もそして大臣も、人間である限り、そして女子でない限り、一切合財が脱帽禮を忘れないと云ふ現象である。何かにつけ禮式に拘泥する極東君子國の私であるだけに、

そして稍もすれば西歐人の儀禮的粗野を口に上すだけに、此の自然的なる市民の儀禮に直面しては、何としても頭を下げるを得なかつたのである。『頭右!!』の號令を待たないで、唄ひ又は踊ると同一の安易さをもつて示す晴朗なる儀禮。わたしは之も亦輸入してみたいと思つたことである。

消費經濟

この頃本町の何丁目かで『節約は臺所から』と記されたポスター

をみた事である。

この頃某新聞には某歸朝客の話として『佛蘭西銀行の地下室には四十九億の正金が貯り、二十人の兵士が交代で番をして居る』と記されてあつた。

所で、その佛蘭西の巴里のわたしの居た家庭の臺所には、辨寸といふものがなかつた。單に臺所と限らなくともよいので、つまりその家庭には辨寸の存在を許さなかつた。マダムは、辨寸の代りに巨大なるブリツケ一個を用意し、點火に關する一切の必要をば之により辨じた。わたしの歸國に際してのマダムよりわたしの妻への土産物は、瓦斯點火器で、つまり辨寸の代用品であつた。その點火器は現在なほわたしの宅の臺所の一隅に、煤に包まれ乍ら吊り下げられて居る。

辨寸に就ての貨幣價値をばやもすると忘却して居たわたしは、此のマダムにより幾度か注意せられたものである。『若し汝が煙突の如く煙草を吹かすならば、須らくブリツケを買ふべし。汝はかくする事により汝の一生涯を通して多大なる節約をなし得ん』と。ブリツケを持つ事がハイカラでなくシイタでなく、節約の表徴だと天下に公言すると、或は急にブリツケを隠匿する不了見者があるかも知れないが、事實此のマダムの場合に於ては、一本の煙草に

れほどの妙手はあらじとて、その地に行き、諸方を旅藝人のやうに流し歩いた。

マセドニヤの王エーロフスは、

うだ……』と、滔々と説き始める自尊と他尊とは、時々思ひも懸けぬ喰ひ違ひをする一例である。

ニエートンが老年に及んで、毫

ひとり言

消費經濟

この頃本町の何丁目かで『節約は塵所から』と記されたポスター

と天下に公言すると、或は急にブリツケを隠匿する不了見者があるかも知れないが、事實此のママの場合に於ては、一本の煙草に

が、先生大の利かぬ氣だ。『お前は、年をとつても、ワシヤまだ歳をとらぬ。金持の威張り散らす東京へ、へん誰か歸るもんかい』

ひとり言

永樂町人

ソロモン曰く、『愚人は、聲を揚げて大笑し、賢者は、辛うじて苦笑す——』

李白の笑ふたるを見たる男あり形相如何と問へば、『さうだね。泣いたとも、笑つたとも、エタイが知れざりし——』

ジョンモーリーの夫人は、その夫と相添ふ四十年、遂に一度もその笑顔を見たることなかりしと。大久保甲東が、年中苦り切つた男なりしは、有名の事實なり。

人は皆な賢者たるを願ふ。我等もまた、賢者たらんを欲す。しかし賢者とは、斯くも苦痛多しとすれば、我等は寧ろ愚人の安易を願ふ。五十年の生涯、何の屈托もなく、エヘラ〜と笑ふて送すを得ば、またこれ一ツの大幸運にあらずや。

エメルソンは、平生『旅行は愚人の楽しみです』と語つてゐた。賢者は、足一步門を出でずとも未知の世界を理解し得といふのであらう。尤も彼は、生涯の中二度まで、歐洲遊覽旅行をしてゐる。賢者は時々、愚人の眞似がして見たくなるものと見へる。

羅馬の皇帝ネロは、提琴を善くし、音楽の淵叢希臘にも、よも我れほどの妙手はあらじとて、その地に行き、諸方を旅藝人のやうに流し歩いた。マセドニアの王エーロフスは、提燈を作ることに妙を得、會心の作成る毎に、臣下を集めて長講一席、そしてこれを彼等に與へた。パーヂイアの王ハアカチユスは土中のモグラを捕ることに巧みに日に侍臣を従へて、郊外田圃の間を彷徨した。

これらの國人は、いづれもあざみ笑うて、『身は、帝王の尊貴にあらずや。而してなすところ斯くの如し。實に阿呆の骨頂なり』としかし彼等をして、いはしめば、『だが、まア諸君！、たつた一度でも帝王になつて見給へ。それア實に退屈なものだヨ……』といふたかも知れない。

唐の李善は、讀書萬卷、今古の事通曉せざるなしといはれた。しかし一朝事起つて、これが對案を求められる時、涙として成竹あることなし。

英のヘンリー七世も、學問該博記性強大、群臣の恐るゝところなり。しかし一たび事端發して、これが決を求むる時、未だ曾て茫然として自失せざるなし。世には往々、單に『書庫』たるに過ぎない人間もある。

晋の王羲之は、經濟學を以つて本領としてゐた。千載の下、草書の聖として尊崇せらるゝが如きは彼にとつて、意外のことかも知れない。ゲーテは、訪客が彼の詩について禮禮し始めると、『あゝ待つた〜……あなたはマダ、私の色彩論を知らないと思へる。それは斯

うだ……』と、滔々と説き始める自尊と他尊とは、時々思ひも懸けぬ喰ひ違ひをする一例である。ニートンが老年に及んで、垂したのには、いたましい限りである彼は、或るところで、微分法の説明を聴き、『あゝ何たる大發見であらう。私は、研究者に深き敬意を表します』——彼はあれほど自己の腦漿を滴濁したる大發見さへ、誰のものか殆んど記憶がなかつた。

加藤清正は、朱筆をとつて、論語に註しつゝあつた。暫時間に立つて、もどつて來ると、書物は滅茶〜によこされてゐた。それは、彼の手飼の小猿が、主人をマネて、散々に朱筆を揮ふたのである。臣下は恐れ入つて、どうなることかと思つてゐると、『オー、オー、それも聖人の書が讀みたいと申すか』

常の如く小猿の頭を撫する朗らかな鬼將軍であつた。東坂に小妾あり。春娘といふ。黄州に謫せらるゝ時、藤某の白馬と、この妾とを交換す。妾喜ばずしていふ。『昔、孔子の厩焼けぬ。夫子人を問ふて、馬を問はざりし。今や公は、人を以つて馬に代へんとす。妾は從ふ能はず』と一詩を賦していふ。

人生莫作婦人身。百年苦樂由他人。今日始知人賤畜。此生苟活怨誰贖。遂に階を下つて、棟樹にくびれぬ但しこれは、支那の昔の巷説である。眞偽は判らぬ。

父を送る

徳野眞士

(朝鮮鑛業會)

(四三)

何處にゆくも反對黨員に誹問されると、瘦せた大養總裁のやうな父は、何處に行かうと俺の勝手だと薬として云ひ放つ。流石に暴力は加へぬので悠々と通過する。こんなことを痛快がつて居たらしい、無邪氣な父であつた。

今朝見れば青桐の葉は一枚も枝にはあらず落ちて霜をく

うら淋しい晩秋の朝、父の病ひ篤しとの電報が來た。續いて豫期した悲報が續らされた。十月、妻と共に病床に見舞つた私は、まだ二十日もたぬに、十一月十日、再び故郷に歸らねばならぬこととなつた。

父の死にあはたどしくも歸りゆくわれに笑みつゝ人等話しかく

父は故郷に、私は朝鮮に、別れ別れの生活が既に二十年も續いて居る。朝鮮に於ける私の知人にとりては、私の父の存在は全く關係がない。私にとりては、天地間にたゞ一人の肉親である。母もなく兄弟も姉妹もない私に、私の血族としては父一人が儼として存在して居た。私は父に出来るだけの孝養を盡したい、との考はあつたが自分自身の生活に追はれて、思ふ半分のこととして居ない。けれど、父にとりては私の心づくしが十倍にも二十倍にもうれしかつたに違ひない。

ふる里を遠くさかりていく年か父に足らぬくらしさせたり貪しくも思ふがまゝにふるまひて父の心は足らひたるらし

父は六十八であつた。そうして

何にも自ら進んで公職を得やうとはしなかつたが、小さな村では目の上の瘤として存在を認められて居た。一寒村の農家の主人である父は、十年以來百姓仕事には全然手を出さなかつた。附近の川に、溜池に、又は町の海に、季節々々の魚釣りを仕事にして居た。

『この村にも金持は澤山ある、だが俺くらい豊澤の出来る人は一人もない』

と威張つて居たらしい。曾しい生活は、折り／＼小使ひの不足を感じては私に無心を言つて來た。それも随分氣兼ねをして居たらしい生前妻と共に病床でいろ／＼と慰めたり、父は初めて朗らかに言つたらしい。私は假令嘘にせよ眞實にせよ、父を安心せしめ、朗らかにして死なしたのは幸福であると思ふ。

村にコンクリートの橋を架けたその橋樑に村會議員の姓名を銅板に彫刻して嵌め込んだ。議員連が寄附金の募集に來た時、父は言下に費用全部は議員で負擔せよ、然らずんば銅板を割けと云つた。議員連中は仕方なしに、折角の銅板を割き取つて、新しくセメントを塗つた。

衆議院議員の選挙にはいつも活躍した。蔭ながら拙漢に身を護らせて敵陣に潜入した。橋の袂で、

かへり来ておろがみまつる父上のみ顔やすらかに眠りたること

みまもれば今にもものを云ふとき父のおん顔は、笑みて見ゆ粟草履ぬかるみにはきて烟道を父のみ棺にそひて歩む

みはふりの錦の旗のむら立に時雨やみ間の風流れ吹く父をはふる穴ふかければ御棺を繩につるしておとしまゐらす穴の底に向ひ正しく棺すえてわれ先づ土をつかみ入れけりばら／＼と御棺の上になをちかゝる土の音より悲しきはなし

とに角私は子として父を送つたしかも病中とは云へ、息のある内に父の身邊から不安と心配とを一掃してやつた。父は喜んで病氣の保養をした。町から醫者を呼んで一週間許り枕邊を去らしめなかつた。田舎の曾農としては全く異例な死にやうであつた。

父のみの父故郷にままがりてわが天地はとみにひろしむ葬式の日には寒むかつた。反對黨の人々も澤山會葬した。私は何彼と後仕末をしてほつとした。長い間負はされて居た責任を果して天地が急に廣ろくなつたやうに思つた。と同時に限りなき淋しさがひし／＼と私の身を包んで來る。私はそれを突き破つて昭和六年から更生せねばならぬ。(二月十日父の命日)

僕

僕の衣食住

静閑なる鮮銀前に出で、蒼穹一點の月を仰いだ時人は小さき蘇生感に撃たるゝ。沈黙は涼しいもんだ

僕

ふる里を遠くさかりていく年か
父に足らはぬくらしさせたり
貧しくも思ふがまゝにふるまひ
て父の心は足らひたるらし

を創り取つて、新らしくセメント
を塗つた。
衆議院議員の選挙にはいつも活
躍した。蔭ながら壯漢に身を護ら
せて敵陣に潜入した。橋の袂で、

た。と同時に雨はなき淋しきか
し。と私の身を包んで来る。私
はそれを突き破つて昭和六年から
更生せねばならぬ。(二月十日父
の命日)

池部義雄

(李 王 職 醫 寮)

僕の運命

生前に父に死なれ呱聲の二日月
に又母を喪つた僕は、全く天下の
孤兒として運命づけられて居る。

世の弱者は孤獨の寂寥ナンテ活き
乍ら半葬された様な窮鳥的悲鳴を
あげて居るが、僕は僕の周囲が空
虚であるといふことを感動的に祝
福して居る。親とか兄弟とか方便
的に作られた連鎖名稱を尊重して
骨肉間の紛糾に喘ぎつゝあるもの
を見れば、生來其責任を解除され
て居るといふ事だけでも極めて尖
端的に恵まれて居ると思ふ。ナゼ
なら來るべき遙かの時代に於いて
は、人生の全量は科學のみにより
て充填せられ、一人一人は器械の
部分品となり人間と人間を結合す
る『愛』ナンテいふものは、利益
から生まるゝ副産現象位で、アラ
ユル人類は當然孤獨生活の様式と
なるからだ。して見ると本來孤兒
たる僕は百年後の生活状態に偶然
先覺づけられて居るわけで、かゝ
る尖端的運命に直面し得たる僕は
これを祝福し歡喜しても、孤獨を
悲嘆するやふな運命の反逆者では
ない。デ僕は永久を通じて知己と
か友人とか疑似的縁者を斷じて作
らぬ。それは折角の天恵を冒瀆す
る憂があるからだ。僕は此孤獨觀
を終生の信条として群盲の頭上に
獨創の一燈を點じて行く。其明滅
は問ふ所でない。只自分自身の運

命生活は變態のやふだが哲理があ
つたと感ずればイ、ナンと云つ
ても生存の第一義は自尊の培養か
らである。

僕の天性

僕は次で天性を尊重することを
忘れてはならぬ。僕は生來石の如
き沈黙のタチで其節約は極めて徹
底して居る。彼の辯舌を藝術化す
る職業者は別として、人類はアマ
リに多辯ではないか。他の動物は
大なり小なり感念に衝動をうけた
時だけ啼いたり吼へたりするのみ
であるのに人間は三人以上となれ
ば必ず口舌を弄して居る。又さふ
する事を一種の義務と心得て居る
愚劣？虚偽？の感情表示を交替し
て貴重なる一日の大部分を空費し
て居る。加之マ、不用意の裡に自
繩的談片を漏らし案外の結果に自
縛する輩もある。『賢にして愚』
なる適語は偶まこれを饒舌家に發
見する。僕は天性を奉じて終生耳
目は監視しても口舌は可及的封鎖
して雑音は決して漏さぬ。僕は此
意味に則して向ふ三軒兩隣りの人
に對しても『お早ふ』とか『今日
は』とかの瞬間的挨拶語でさへ未
だ曾つて口にした事はない。生涯
をあげて自畫自賛で押し通ふさふ
とする一人者は、一切の出來事は
自問自答で鬼づけるまで、好言令
色更に要なした。かの騒音の交錯
曲に眩暈する本プラを了へてやゝ

僕の衣食住

生命は人間の所有する最後の一
つである。で康度の保全は希望の
充實である。僕の衣食住は此見地
から成立する。僕の本城は二カン
一室の温突で天井と三方は硝子張
り北面だけが一間半の押入である
だから生物發育の素たる太陽は、
東海を登り西山に落つる迄光と熱
とを浴びせてくれる。殊に東南西
は海に瀕して細漣は磯石に嘯き、
北方は三畝の地を距て、奇岩疎林
の溪谷である。漁すべく獵すべく
而して耕すべくすべては咫尺の間
である。一度室内を覗へば食卓兼
用の机上にはラヂオと電話がツツ
立ち、其脚下にペンとインクと算
盤が伍して居る。押入は上下左右
に四割され右側の上段には米鹽と
食器、同じく下段にはガスと水道
が首を出して居る。左側の上段に
は破行李と毛布三枚、同じく下段
には雑品が雜然と入れられて居る
僕は寒暑を通じて衣類としては
只一着のアイの詰襟を有し、別に
体温を調節する爲め五枚の襪衣を
用意するのみである。一歳の半は
多くは猿又一つで可及的冷熱に鍛
つて居る。友なく縁者なき僕には
重苦しい儀禮もなければ自己を欺
く虚飾の要もない。
僕は一日三回一碗宛の玄米食に
土を洗つたまゝの菜類を刻みこれ
にいさゝかの香味料を添加して副
食に供し、尚ほ且つ飢饉感あると
きは果實の間食又は生水の飲用に
よりて補足して居る。僕の康度は
以上の食糧にて完全に保有されて
居る。現代の醫藥界では八釜しく榮

養價を云々して居るが僕自身の考
察する所では、一切の養素は空
から放射されて大地に芽含むもの
で彼の菜食類こそ至純至滋のもの
であると思ふのである。吾人は朝
令暮改する科學を過信するよりは
『自然』が大示する千古の鐵則を
守りて衣食住は律すべきである。
ア、僕の血け鮮かである。僕の皮
はかゞやいて居る。僕の心身には
純眞の生氣が溢れて、人間の修理
劑たる醫藥や宗教の入る間隙はな
い。技工は『自然』と人間との障
壁である。

僕の職業

人間の職業は千差萬別であるが
イツでも世辭と手管は共通しての
収入補助器である。然るに暑い寒
いの單的交替語も口にせず、臣民
として奉仕する敬意以外他の人間
同士に向つては何人にも脱帽せぬ
といふ……即ち保有する運命と天
性とを完全に個性化して生活の軌
道を構成し而かも巨象の如き足跡
を世紀に残さふといふ、僕のこの
理想に照すと、天下廣しと雖も申
分なく合致した職業はない。只辛
ふじて接近したものとして熟慮斷
行的に撰定したるものは驚く勿れ
鑛山師である。人間同士が各自の
懷中をアテに算盤をハチき合ふて
醜い取引を弄するよりは幾百千年
間地下に死藏せられつゝある有價
物を、ツル嘴のさきから人生に運
んでアラユル資源に提供すること
は最も深甚に生存を意義づける作
業である。これなら口舌的にも贈
賄の要もなく僕が要求する素質に
頗る合致して居る。鑛山師なる文
字は一種の恐怖語となつて居るが
此スピード萬能時代に、病牛の如
く世路を練つて居つては冥府ゆき

の發車までにチリ程の烙印も殘せ
ない。墜つればそれまでとして飛
行性の職業こそ時代も要求すれば
吾人も歸依する。ナンと云つても
人生は一回ゲームだ。花も月もあ
つたものでなく、況してチーとか
ボンとかは沙汰の限りだ。嶮難は
男子の美容術である。ドコかそこ
らに土の蒲團をきて名鑽は癡て居
らぬもの。

僕の目的

勇敢に處世術を暴露したる自分
は結論に其目的を告白して『僕』
なるものを完結せねばならぬ。抑
も人間の窮極的使命と云へば『大
自然』が包藏する機能の全量を、
速かに人生に介達して誤算なき正
しき文化、透徹したる社界相、を
形成することである。が、かゝる極

無駄はなし

なにかし

○不二興業の澤村さんは、晩食
後京城神社へ参拜するのを、一ツ
の健康法としてゐる。
○雨が降つても、雪が降つても
實行する。
○來客があると、そのために妨
げられることがある。それでも十
二時前(夜中の)ならば、必ず強
行する。
○時々途中で、怪しき者と間違
へられて、コラツと腕をつかまれ
ることもある。
○今日では、大抵の查公が心得
て、『御苦勞様でございます』
○だが宴會、來客その他で、十
二時を過ぎると、それでもやると
いふ譯には行かん。ソコで、自宅

【四四】

機に參與すべく資格つけられたる
者は、イの一番にこれを天才者に
見出さるゝ。併し彼等も俗情や誘
惑の障礙に因りて或者は消磨し、
或者は脱線して肝甚の天恵を天折
するものが多い。コハ人類の最大
不幸である。ソコで自分が若しも
豫定の財を得たならばこれを弊廢
の如く擲つて、球上一品の天才學
校を建設して彼等の才量を一粟の
餘瀝なきまで大地に注がせて見た
い。而して僕は生まれたまゝの素
裸体に無形の王冠をかざして生線
をグットバイする。これが『僕』
に對する僕の念願である。ナント
云つても天才は文化の長男である
孤獨、沈黙、仙居、ヤマ師、而
して天才培養！僕の調子は整つて
居る。

の廊下を利用し、豫ねて敷へてあ
る神社までの歩數を、廊下でやる
ことになる。シカモこの時は、驅
ケ足で、短い間隔を、凄まじい驚
進力で、ドタン、バタン、ドダン
……それこそ屋鳴り震動いたしま
す。御令息達まどかな夢を破られ
て、『あゝ、またか。どうも古代
の人間は、困るナー』

○本町ちよぶの御主人公堀内
さん、近頃『箸』道樂を始め、
アイヌの手細工の木箸、久留米の
竹箸、それに諸國の神社佛閣で賣
る箸等々、大分集めてゐられる。
○『一体どういふ動機で、お始
めになりました』、堀内さん『さ
ア……』といつて、唯ニコ。
○だが、ヨッポドお楽しみなも
のと見へ、毎朝御點檢『何んしろ
早く大展覽會を開きたいナー』

宮津節

徳山新

人は親切鬼はない
丹後の宮津でびんと出した
位は甚だ無難で何人の口にするも
敢て害はなからうがピント出した
をおかしい意味に解譯され易い、

頗る合致して居る。鑛山師なる文字は一種の恐怖語となつて居るが此スピード萬能時代に、病牛の如く世路を練つて居つては冥府ゆき

て、『御苦勞様でございます』
○だが宴會、來客その他で、十二時を過ぎると、それでもやるといふ譯には行かん。ソコで、自宅

ア……』といつて、唯ニコニコ。
○だが、ヨッポドお楽しみなものを見へ、毎朝御點檢『何んしろ早く大展覽會を開きたいナ』

宮津節

徳山 新

(朝鮮商業銀行)

『所變れば品變る』と云はれて居る様に其の地方地方のローカルカラーを最も良く表はしたものが俗語であらう。そしてそれに依つて其の地方の地理人情風俗がよく窺はれるところに何とも云へぬなつかしさがある。昭和の時代となつて郷土藝術が高唱せられ民謡の研究が進んで來たことは頗る喜ぶべき現象で國民性の涵養向上に資するところ多く尖鋭化した思想問題の緩和等にも尠からざる好影響を及ぼすものと云ふべきであらう俗語に就て思ひ出さるゝものゝ一つに天の橋立で有名な宮津節がある。

二度と行くまい丹後の宮津
縞の財布が空となる

丹後の宮津でびんと出した宮津の新濱あたり紅燈絃歌のさんざめきは遊蕩氣分をるに十分であつて縞の財布が空となるも尤もだと思はれる。此の宮津節の終りにつく『丹後の宮津でびんと出した』と云ふ言葉の意味であるが、一説には長州再征の砲宮津藩主本莊秀宗が總督として廣島へ出征しようとする時に長州の使者勤王の志士穴戸備後介、小田村素太郎の兩名小笠原閑老の爲に拘禁せられそれを預つて居た秀宗公は思ふところあつて一應此の二人を召して意を含めて放還してしまつた。ところが翌日になつてこのことが發覺して直ちに同公は罷免せられ、

大阪の稻葉邸に贅居を申付けられた。丹後の宮津で備後出したと云ふのがびんと出したと誤傳した。否備後と云ふのを面白くびんと出したと云ふ様になつて來たものであらうと。又縞の財布は牢屋の格子の意味であるさへ云ふ人もあるが、之れは少々こじつた理屈のやうにも思はれる。右の歌が代表的のものであり又本元ではあらうが、どの宮津節にも縞の財布がくつついて居ると云ふ譯でもなし此意味はとも吾々の頭にはびんと來ぬ。寧ろ景色が良いのと紅燈の巷が盛んであるのでつい知らずくの間大きな氣分になつて縞の財布をばんと投げ出したとなつたものと解する方が何となく宮津情緒に馴染な氣がする。更にそれを宮津の歴史的事實に關聯せしめて歌と同時に昔の史實を思ひ出させることゝしたものと見るのが當つて居る様に思はれる。俗語もこうなれば一層捨て難い價值あるものと云ふべきであらう。

縞の財布が思ひの種よ

二度と行くまいとて三度來た丹後の宮津でびんと出したあたりは誠によく人を引つける宮津の遊蕩氣分が表はれて居る。思ひ出しては又やつて來て、一杯氣嫌となつては元の覺悟は何處へやら、引き締めた縞の財布を勢ひよく投げ出す様か思ひ浮べられ、又もお越し上丹後の宮津

人は親切鬼はない

丹後の宮津でびんと出した位は甚だ無難で何人の口にするも敢て害はなからうがピント出したをおかしい意味に解釋され易い様なものもないではない。

天の橋立股から見れば

ほんに浮世の苦がとれる

丹後の宮津でびんと出したと云ふのや

成相山から橋立見れば

宮津女郎衆が出てまねく

丹後の宮津でびんと出したの如きは些かどうかとも思はれる

◆廊下すゝめ

北 漢 山 人

○大學病院院長の廣田博士は、寒夜の禪堂(妙心寺)に枯座して、ちーつと提唱に、心耳を澄まして居られることが多い。

○壯年期に句を作つて、一代の俳壇を驚倒したこともある。

○短歌は、餘技だが、それさへ心境の澄徹さが、人の心を打たすには置かない。

○『文は即ち人なり』博士の私的生活の、どんなに質素なことか枯淡なことか。

○院長専用の自動車がある。しかしこの人は、斷じて私用に使はない。私用のみか、公用にさへ使はない。いつもテグだ。平然として陸栗毛だ。運轉手君月給袋を押し載いて、『だが會計さん、ちよいとテレ臭うござんすぜ』

○青年期に、苦學した人らしいひそかに學生に、資を給してゐられるといふ噂がある。

山陽の百年祭に當り

森 哲 朗

(京城齒科醫專)

今年山陽發後丁度百年に相當するので、郷里廣島に於ては盛大なる百年祭が執行される筈である。彼の大手筆により一躍天下の名勝となつた耶馬溪のために、中津市では陽春の頃を期して、溪中に於て、これ又紀念祭が催されるとの事である。又一方に於ては、今年の百年祭を記念する爲めに、廣島縣に於ける頼山陽先生遺蹟顯影會により、山陽全傳を始め、詩文集等が刊行され、併せて同會主催のもとに去る二月七日から十一日まで、大阪の三越に於て彼の遺蹟展覽會が開催された。出品者は殆んど全國から、何れも門外不出の秘藏の品のみで、遺墨はもとより、遺品参考品に至るまで實に多數の陳列に、參觀者の好評を博し、中でも東本願寺の『涉成園記』、嚴島神社の『觀宮島神庫詩』をはじめ、『咏史樂府の詩卷』、『五十餘川詩』、『泊天草洋』等の屏風や書幅の名作の前には實に文字通りの黒山の人を築いたと云ふことである。此の本願寺『涉成園記』は園の由來を書き別に園内十三景詩を詠んだもので、普通枳殼殿と呼ばれてゐる庭である。其の周圍に垣を環らすに枳殼を植ゑたるがため世人これを枳殼殿と呼ぶに至つたが、本統の名は涉成園と云ふべきで、陶淵明の詩に由來するものである。先年、前法主句佛上人をめぐつて、此の所謂枳殼殿が

餘り香はしくもない問題の渦中に投ぜられてゐたが、數百年來の立派な由來を持つ此の園を徒らに手に渡したくないのは單に本願寺當局者のみではあるまい。

山陽發後百年の今日、彼位多量の資料を遺した人も少ない。同時に山陽位尚問題の人として残されてゐる人も珍らしい。青年時代の素行に就いて彼是非難されたり、又藝譜を脱藩した事により、主君に對して不忠不義の臣たる汚名をきせられ、父母に對しては不孝の子として忌躰された許りでなく、猶彼の學問の程度如何と云ふ事なども常に問題とされてゐる。が然し是等のよつて來る材料はいづれも彼の眞價を左右し得るもので無いのみか寧ろこれと對照考察してこそ本來の面目が表明せられるのではあるまいか。

凡そ人間の本來の面目を解決すべき鍵の一として役立つものは平素の手紙である。現在山陽の手紙で其の存在の分明せられたもの約三千通に達してゐるが、其の他不明のものを合すと幾千通なるかを知らない。人間一代の秘密的文書たる手紙が、死後百年の今日斯くばかり遺されてゐることは一の奇蹟と云つてもよい。恐らく彼山陽のすべての功罪はこの文殺の上に批判し得らるゝであらうし、彼の正鵠をつかむことも困難ではあるまい。

【四六】

私は此の機會に山陽の爲めに一つ正して置きたい事は、彼の死に臨み妻裂影に對する遺言に彼の面目を甚だしく失墜して三樹三郎の教育を川上東山(儀左衛門)に托せしめたと云ふ虚説である。此の講談のいくさりに曰く、元來川上東山は山陽の門人であつたが、或る時友人の浦上春琴が來訪して山紫水明處に主客酒盃をくみ交した際たま／＼春琴が弟子の東山に酒の爛を直して來いと命じた事から喧嘩となり、山陽も川上東山の無禮を怒つて遂に破門したと云ふ書出であるが、これは明治卅六年に出た『頼山陽の家庭』と云ふ書物に三樹門人と名のる薄井龍之といふ老人が頼家一門の間違ひだらけを興味本位に談話したもので、事實は大なる妄説に過ぎない。山陽の歿するや、東山は外宿門人として其の葬儀に列して居り、それまで門人兒玉旗山の塾に學んでゐた三樹三郎を直ちに東山の塾に入らしめる筈がない。會つて伊藤蘭遊も事實講談として『山陽の死と川上東山』の一席を得意の長講としてゐたと云ふことであるが私は先年廣島頼家に於て父山陽の發後まもなく當時八才の三樹三郎が其自宅に居て、母裂影の命によりある書物を懸命で寫してゐたといふ事實を森秋山の跋文で讀んだことがある。

旗幟店
 宗 城 第 金 町 五 丁 目
 龜 屋 旗 店
 本 局 一 五 八
 水 局 一 四 三
 電 話 香 港
 電 報 滬 港

前と後の味

『當家の聲さんちやになつた』から『何ちやになられた』と問ひつめられたが、梅公また考へ出せず『ウツ……』とやうに居る。

至つたが、本統の名は涉成園と云ふべきで、陶淵明の詩に由来するものである。先年、前法主句佛上人をめぐつて、此の所謂釈教殿が



前と後の味

高橋昇

(三菱載寧鐵山)

學生々活を終へて〇〇〇〇山に赴任して間も無い頃、ある席で何か話せと言ふので、始めが悪く後が良くなつた話三題をした事がある。

○蜀山人が入口の襖に

わが庵に客の来るこそうるさけれど、
と書いて置いた。友人が訪ねて行き、是を見て不快に感じたが、折角来たのだから入らうとそれを開けると、モ一ツの方に

とは言ふもののお前では無しと下の句があり大に顔色を直したと言ふ。

○私が此鑛山に赴任して後、妻の母が妻を連れて来て呉れた。元來鑛山は鑛夫など荒くれ男の集りだから——殊に此鑛山の名からして〇〇〇と言ひ、人間三分猿七分の所だらうと思つて居た所へ、汽車から下りて寂しい山の中をゴツトリ／＼馬車に引かれて行つた後、鑛山に着いて、此下の谷に社宅があると見られても家が見えるで無し、下つて行く途中に鑛夫長屋の直ぐ下を通ると、人相の良く無い男女が見下して居ると言ふ有様で、飛んだ所へ娘を……と少なからず氣をもんだが、サテ社宅に来て見ると、社宅丈が拾數戸もあり外に部落もあるのを見て、先づ安心したと、母が歸る時に話したことであつた。

○次は落語

のすべての功罪はこの文藝の上に批判し得らるゝであらうし、彼の正鶴をつかむことも困難ではあるまい。

棟梁が大屋の娘さんの結婚祝に招待された。兼ねての恩顧に報いる爲め何とか一つ賑はさなくてはならぬが良い工夫が無い。町内の物議隠居に事情を打明け智恵を借りる事になる。棟梁には松公竹公梅公の三人の弟子が居たので、

棟「なつた／＼ぢやになつた」
松「當家御さんぢやになつた」
竹「何ぢやになつた」
梅「長者になつた」

と言つて、集つて居る一同を煙に巻く計畫。行く道々四人で積古したりして行つた。何分最後の梅公が一番年若でもあり、良くやるかどうか氣がかりであつたが、懸座敷で始まつた。

棟梁が「なつた／＼ぢやになつた」松「當家の御さんぢやになつた」迄行くと大家の連中は、怪しからぬ事を言ひ出した。棟梁などと言ふものは兼ねては大きな事ばかり言つて居るが、無學文盲の連中だ、此目出度い席で……と案じて居る内に、竹「何ぢやになつた」と問はれ、梅公「長者になつた」と言ふ大事な文句を忘れてしまつた。「シマツタ」と思つたが追つ附かない。

梅「サム……」

と考へ込む。さあさうなると棟梁が氣が氣で無い。スツカリ間が抜けるので不取敢始めから、又「なつた／＼ぢやになつた」と始めたものだ。

「當家の御さんぢやになつた」から「何ぢやになつた」と問ひつめられたが、梅公まだ考へ出せず「サム……」とやつて居る。仕方が無いからまた「なつたなつた」を繰返すといふ有様で、棟梁が益あはて、又しては繰り返す竹公が梅公の袂を引いて注意する見て居る連中は、大家のものも相客も此結果が如何なる事かと心配して居る。當の棟梁は汗を流して幾回と知れず、なつた／＼とやつて居る内に

竹「何ぢやになつた」
梅「亡者になつた」

と言つたので、棟梁はたまらず逃げ出してしまつた。○是等に似た様な話がある。矢張落語に

此家を七福神が取りまいてで喜ばせたが、貧乏神は外へ出られずスツカリ不吉になつてしまつた。是を反對にして應用も出来る。○今度は實話で、昨年暮の事、聲音機屋が来て

「此頃針の形の變つたのが出来て、いろ／＼音聲を調節する様に工夫して居ります」

と先づ効能を述べて「歸りましたら、それをお送りし様と思ひますから使つて見て頂き度い」

ツイ數日前、針を大分澤山他から買込んだから、此上買はされてはと思ひ

「針なら先日澤山内地からとつたで先づ良からう」と斷ると

「まあ……毎度御鼻負に預つて居りますので……暮でもありませんから、お届けします」
貰ふのならば、別に遠慮すること

も無かつた譯で、全くクスグツタ
イ次第であつた。

○有名な東伯虎、向ふ町に住ん
て居る一富翁があり、兼ねて懇意
にして居た。其翁の母が七十七歳
になつたで祝をするから、其席に
かける爲に伯虎に詩を求めた。容
易く承諾して早速大筆を揮つて

對門老婦不是人

富翁は是を見て吃驚した。祝の席
にかけ様と言ふに……

好是南山觀世音

是で富翁は安心の體であつたが、
更に

兩個兒子都是賊

翁は再び顔色を失つてしまつた。

偷得蟠桃獻母親

大喜びで持ち去つたと云ふ。

◆のこかな話

それかし

○市山盛雄氏の短歌雜誌『眞人』の同人に、道久良といふ人があ
る。同じく寄稿家に、河野トモ子
といふ人がある。前者は、營林廠
のお役人、後者は、第一高女の國
語の先生……歌の上で知り合つて
互に尊敬し始めた。粹人市山氏こ
れを見て、月下氷人となつて丸く
おさめる。

○ところが、同じく同誌愛讀者
に、湖南線鶴橋の大地主鈴木久子
さんあり。歳老ひて身は寡婦であ
る。話を聞いて、ついでに、ウチ
の夫婦養子になつてくれといふ。
市山氏これも仲に立つて、いよいよ
よ夫婦親子のかためをする。

○市山氏をどうに上機嫌『エツ
ヘン、日本の政治家に、この腕前
が欲しいですよ』

赤き旗

角田不案

【四八】

◇ 三越の屋上にたつ赤き旗に二月の風のなまめきに
けり

きさらぎの店舗の明るき店頭は雛人形は飾られに
つゝ

三越の雛人形の賣出しの赤地の布はたれて高しも
雛人形の賣出しの看板のきわやかに二月の街頭に
浮びいでぬる

四階より垂れし赤布に白き文字は雛人形と筆太に
書く

人妻のあはれそのかみ雛人形に振分け髪の君なり
しならむ(六、二、一八)

◇ うつそみの病さびしき人妻は菜の花を買ひて歸り
きにけり

頭やみて日ならべこもるきさらぎの莖立ち菜花瓶
にさしつゝ

莖たちの菜花一本空びんに水みてしめてささせた
りけり

瓶にさす菜花に夕日さすころを頭の痛みまして來
にけり

菜の花をさしたる瓶に並びるる水薬瓶はわびしと
や言はむ

酒のみば頭のいたみ癒えもせんとのみてしけるを
ましていたみく

瓶にさすくくたち菜花この菜花多咲く國を忘れか
ねつゝ

この菜花はだらに残る雪まへに咲ける國へを住み
かねて去にし(六、二、一四)

辛未漫録(二)

ひせ、一度の費用が中人十家の産
にも達するといふ始末、殊に士族
の貧乏で婚費のない者は、敵本で
大族と婚約して資粧の費用を私し

よ夫婦親子のかためをする。
○市山氏をどうに上機嫌「エツ
ヘン、日本の政治家に、この腕前
が欲しいですヨ」

かねて去にし(六、二、四)

辛未漫録(二)

中村榮孝

(朝鮮史編修會)

燕山君時代

李朝始まつて以來凡そ九代百餘年を経過し、この間には、歴代苦心の治績はあがり、太平無事の日が多く、半島には、はじめて完全に統一的一國家が結成せられ、立國の大方針も定まり、基礎あり統制ある組織的の王政が布かれることになつた。従つて社會各般の事象はすべて進展を見、文運は興隆して半島の黄金時代ともいふべき一時期を現したのである。

この後を承けたのが第十代の燕山君であつた。王は即位のはじめ父祖の盛世を繼いで、而もその後繼者としてはつかしからぬ名君として、めざましい活動ぶりを見せたが、文化進歩の極致として現れた頽廢の雰囲気の中毒して、これに冷然として超越するためには、餘りに多血質であつた王は、終に地歩を誤つて廢君なつてしまつたしかもその後半生の桁外れた逸樂蕩解——いはば時代の尖端を行つた豪遊は、儒教主義の權化たる後世の朝臣からは極端に擯斥されて復位の議さへも出なかつた。

この燕山君が背景として王位に在つた、當時の社會相は、文運隆昌の後をついで、どんな體貌を備へてゐたらうか。それは頗る興味深い事である。所謂燕山君の暴虐の漸く萌し初めようとしてゐた即位の六年秋、議政府が時弊を條陳

して王の猛畜を促した。その時の上疏文には、よくその頃の社會の一斷面を描き出してゐる。こゝにその數條を摘出して見よう。敢へて現代に對する頂門の一針としようなどとも思はないが、蓋し何等かの暗示を受けずには濟まないであらう。

婚禮の冗費

燕山君は、その王子女を降嫁させるのに、明や日本の珍貨調度を用ひ善美を盡して婚禮を行ひ、度々のことに内帑も窮乏を告げるといふ有様であつた。のみならず、上下みなその風を受けて贅をつくして子女の婚嫁を飾るやうになつてゐた。中産以下になると、財産は人に及ばなくとも、儀式調度だけは他に負けぬやうに盛大にしよと力め、費用は足らず、おまげに何人もの子女があるにも拘らず他日の事を考へる暇もなく、土田藏獲(田地及び奴婢)のありだけを出し盡くして一禮を盛んに行ひやがて次々の子女には何としてやりやうもなくなり、兄弟姉妹の間で、一は富み一は貧、肥瘠隔絶するといふ悲運を招く者さへある。一體婚禮に關しては、各々その分限に應じて制限されてゐるのは勿論であるが、それはほんの制度の上だけ、勢家大族になると財力餘りあるの結果、婚家に制限以上のものを送つて儀式の準備費に充て

させ、一度の費用が中人十家の産にも達するといふ始末、殊に士族の貧乏で婚資のない者は、敵本で大族と婚約して資粧の費用を私し遂には最愛の子女の婚期を失しさせるといふやうな情態。婚禮の夕になると、兩家とも酒饌を備へ、華麗を極め、賓客を招いて榮耀をつくし、従つて娼妓・女醫といふやうなものは、大繁昌で、醫は讀書に暇あらず、妓は樂を習ふ暇がないといふほどである。

婚禮は人倫の本、子孫萬世の始であるといふので、これを重んずることは、内外東西を問はないところであるが、太平爛熟の世となると、これ亦た軌を一にして奢侈に流れ、冗費を投じて吝しまないもの、随一は婚禮であらう。實に當時に於いて調度衣粧の支度から披露の宴まで、どんな仰山な騒ぎが演ぜられてゐたかは、こゝに數へあげただけからでも推すことが出来るし、またその半面に中産以下の人々が、どんなに心痛の種子にしてゐたかも想像に難くないではないか。

送往迎來の弊

王命を受けて各司の官人が出張出發の際、即ち使命の行に登る時には、必ず郊外に供帳を設けてその官廳の全員擧げて赴き饒するといふ風が盛んである。送往迎來といふことは、近親舊知の間の美風であつて、由来久しいことはいふまでもないが、これは要するに閑人の爲すべき事である。殊に主粟決事(略は會計・裁判の意に解して宜しい)の官の如きに至つては暫らくも任所を離れてはならぬのに、一日官廳を空あきにするやうな不都合なことになる。且つ酒饌

の用意や召使の費用などを考へると申々小さいことではない。それほどばかりではなくてこれに伴つて、この頃は官府で酒を用ひる弊も甚だしくなつてゐるのは、是非禁せねばなるまい。

これらは皆な開國の初め以來、折に觸れて禁令を出したのであるが、當時に至つて益々甚しい弊害を生み出してゐたものであらう。

新屬人の侵虐

新屬人の侵虐といふのは、新任者の虐待を意味するのであるが、これについては夙に禁令が出てゐることで、高麗時代からの弊風であつた。この頃特にその風が甚だしくなつた。例へば、内禁衛は、王宮を宿衛するから、その選抜は特に重んぜられてゐた。ところが新しく入る時に、上司や先任者を響應せねばならないから、貧家の子弟は、卓異の才があつても入屬することが出来なかつた。一體、新しい官に任命されると、まだその足門に至らぬのに『徵求』と名づけて既にその家からは酒肴を取り、多い時は十餘度にも及ぶ。それはばかりではなく、『初度』と名づけて、無理に宿直させ、長い時には、續けて十日も一月にも達しさせる。また『免新』といつて、先任者を招いて大振舞をさせ、意の如くにこれをやらせ、爪弾きをする、仕方がないから財力を傾けて禮をつくす。従つて貧乏な者は、出世の望みなく、一生を終へねばならない。かういふことは成家官（蒙古のアイマツクの制度を受けついで、高麗以來置かれた應募宿衛の軍隊）は、皆なこの内禁衛と同じであつた。一體、この新任者を侵虐する風は、どこから

ために選ばれて京城に駐在した郷吏から借りてその費へを補ふ。恐らくその新任の地の吏からであらう。そして月利を拂ひ、任地で

昌慶苑

○ 新田如水

スケートや枯木の中の伏せ小舟
スケートや向ふ丘なる半仙戯
枯蒿をかぶる驪の天空洞
數々の中に寐釋迦はなかりけり
漏刻の水涸れてあり青龍筒

○ 新田時子

多障子骨もあらはに虫ばめる
額の字もわかず蔦巻き盡しけり
日時計や左右の牡丹のかそけき芽
漏刻の双龍鏝し牡丹かな
凍て鶴の一撃高く鳴きにけり

贈遺の弊

新たに守令（府尹郡守縣監などの地方官）・察訪（驛路を掌る官）萬戸（邊境の軍官）などに任命されると、六曹をはじめ中央の官廳の役人から『堂參』とか『問安』とかいふ名義で布物（當時布が貨幣の代用をなし、物價の基準をなしてゐたから、金品といふのと同じ意味になる）を徵收するのが例になつてゐる。また地方官が中央へ來ると、必ず『問安』といふ名で、それから物貨を求めて、皆な燕飲の費用に充てゝしまふ。従つて新たに任官された者は、自力で辨することが出来ないで、京邸吏（各地方から、地方事情顧問の

起つたかといへば、六曹の郎官、四館などからである。六曹の中でも、文武官の任免を掌つてゐる吏曹と兵曹とが一番甚だしい。四館の中でも、記録を掌つてゐる藝文館が甚だしい。また監察は、目付けの役であるのに、而も近來益々その風が甚しくなつて來る。新しく任官されるのを嫌ふ者さへ出るやうになる。これは綱紀の弛廢したために外ならない。

とかく素平が續き、人心を緊張さす事件もなくなつて、官吏も單調を破りたくなくなり、送迎を機會に盛宴を張つたり、新任者を虐待して興味を感じたりするやうになつた。それが吏兵曹に最も目立つてゐるなどは皮肉である。

一つであつた。吏胥の汎濫と稱するの、即ち之である。都城（京城）内は、五部坊里の制が布かれてゐた。何か事があれば、五部に

布物を持ち寄つてこれに贈り、面皮とする。さうしないと後日の報いが恐ろしいから、已むを得ず徵發されてしまふ。貧乏な者も、人

を受けついで、首領に承服させた。應募宿衛の軍隊は、皆なこの内禁衛と同じであった。一體、この新任者を辱辱する風は、どこから

盛衰を感したり、新任者を辱辱して興味を感じたりするやうになつた。それが吏兵曹に最も目立つてゐるなどは皮肉である。

て新たに任官された者は、自力で辨することが出来ないで、京邸吏(各地方から、地方事情顧問の

ために選ばれて京城に駐在した郷吏)から借りてその費(を)を補ふ。恐らくその新任の地の吏からであらう。そして月利を拂ひ、任地で民衆の膏血を搾取して償還するといふ始末に立至るのである。

當時、地方民の困苦、想像するに難くないではないか。また吏胥の地位、地方官の境遇、地方行政の痛弊と色々考へさせられることが潜んでゐるではないか。

吏胥の跋扈

實務に携つた下級官吏、屬吏の跋扈跋扈は、當時甚だしい弊害の

一つであつた。吏胥の汎濫と稱するの、即ち之である。都城(京城)内は、五部坊里の制が布かれてゐた。何か事があれば、五部に令し、五部は各坊の管領(わが江戸時代の五人組頭、名主、庄屋のやうなもの)に命じて、その統轄してゐる民戸に傳へさせるのであるが、もし一寸でも人民が命令をきいて緩々してゐると、早速家僮(召使)を囚へたり、管領を鞭答する。そこで管領は、これを利用して、或は「招群」といつたり或は「神祀」といつたりして、門外に酒宴を設ける。管内の人民は、

布物を持ち寄つてこれに贈り、面皮とする。さうしないと後日の報いが恐ろしいから、己むを得ず徴發されてしまふ。貧乏な者も、人に後れじと競うて布物を投ずる。貧民の益々窮乏するのは、全くこの事に由る。それも根元を尋ねれば、漢城府の吏胥が横暴を極め、假借するところなく加罪するからである。禁衛の衛門の吏胥も皆な管領と同じやうなことをする。司憲府は百官の目付けであるから、權力が他よりも重く、都の富豪などは、力めてこれと親しく交際し休戚慶弔あることに、酒肴を贈り布物を呈して門前に集まるといふ

普茶料理

山村 翠

(府内樓上洞)

今村軈氏著

朝鮮漫談

(一冊三六〇錢)

お取次致し候

氷雨降る或る日私は白金の三光坂を歩めて居た、それは黄蘗宗の某寺で普茶料理を賞しなから歌會を催はすべく往く途中なのである最早三十年昔のこと。

歌會には黒田清綱大人と大口鯛二氏が出席せらるゝ筈であつたが大口氏は障ることあつて來會されず、黒田氏のみ老軀を此邊僻まで運ばれた。尾上八郎氏にも案内状を出した筈であるが出席されたか否かは今記憶にない。

膳に上されたのは總じて七品程何れも精進料理で粗野な裡に饒かな雅味を存し、其の味は勿論淡泊を極め、一同箸をとりつゝ、これ

は何物、あれは何物と互に評し合ひながら給仕の稚僧に絶えず微笑を催はさしめた。

般若湯には制限ありて上戸は其の不満を吟懐に洩らし、下戸は片手桶に盛られた飯に舌鼓打つて終に隣家の糧にまで及び、隔てなき人々の集りは盡きぬ興趣に日の暮るゝを忘れしめた。

當時會合の人々、今は既に老類に迫り、若くは幽明境を隔てて再び斯る興趣を呼び難いが普茶料理の味覺に昔を偲はんとするには現在事を叙かぬ、それは江東墨堤のほとり雲水が此料理を整えて客を待つて居るから。

有様であるから、到底公正は期し難い。

かういふ幾多の弊害の結果は、各地方の人民は、賦役や租税を脱れようとして多數の浮浪民が出来た。残された者へは過重の負擔がふりかゝる。貧富の懸隔は愈々甚だしく、開國以來の權門勢家やその亞流をくむ下級官吏や、泰平の夢に豪奢の樂しみをむさぼつてゐる際に、この行詰つた社會相を背景として、燕山君の暴政が展開されて行つたのである。そこに數度の士禍が現れ、閔族の没落、富の分散が行はれ、中宗の反正となり次第に時代は轉回してゆくのである(昭和六年二月十五日)

住宅の亂作

長郷 衛 二

(總督府内務局)

【五二】

私共夫婦は、内地に在勤中から自分の家即ち自分の力で自分の好みに應じた住宅を、持ちたい希望を持つて居た。衣食足りて禮節を知ると同様に、現今のサラリーマンは衣食足りて住宅の必要を感じる程左様に、借家の苦痛が身に染みて居る。

借家から借家を轉々して、高い家賃の代償に、不自由な間取、無趣味な造作の家をあてがはれる度に、一層深く自分の家が欲しくなつて行つた。來鮮以來は、官舎を頂くので、金程恵まれては來たがどうも満足が出来ない。

私共には、私共の個性と趣味があるので、誰にでも向く様に建てられた官舎の様式には、贅澤な言分ではあるが、何となしにあきたらない。而しながら、貧乏と且つは辭令一本で、何處、如何なる土地に飛ばされるか知れない私達には、自分達の家を建てる事はホント不可能の事でもあり、又然るべき筋合のものでも無いので、プツプツ言ひながらも、我慢するの已むを得ぬ境遇にある。

そこで考へ着いたのは、土地も金もなしに、自分の腕一本で、好きな住宅を建てて楽しむ方法である。それは、セクシヨンペーパーの上に、鉛筆と定規でやる、圖上建築の方法である。空中の樓閣にも等しい仕方ではあるが、軍人の熱中される、圖上藝術にも等しい

熱心と興趣が伴つて來て、一度始めたら、なかなか止まない。もう八年位もつづけておる。山の神も、今では一通り建築技師になりすまして盛んに造り上げる。そして、時には二人が間取りの事、臺處の位置などに就いて大激論を始めて、終日物も言はずに各々鉛筆で勝手な設計をやりはじめる事さえある。昨今は病膏盲に入つて、書物は買込雜誌は取るさては住宅に關するものは、何にやら切り抜いて スクラップに貼り付ける様な始末になつた。そして、此豊富な智識でもつて、自分達の嗜好に、適した住宅の亂作をやる、一二萬圓の家なれば、日曜一日で四、五軒位は出來上る。氣に喰はねば早速壊す、又建てるに云ふあんばいで、誠に安上りな道樂である。

かくして造り上げたものが、三十坪位から二百坪位まで、和風洋風取り混ぜ、ざつと二百種位になる。年月にして八年間、一年平均二十五軒の割である。

此住宅圖の繰込帳をヒツクリ返して見ると、私共の生活、趣味、嗜好の變化がハッキリ現はれて居る。大正十二年頃のものは、所謂文化住宅式洋風一點張りの、ハイカラなものばかりで、明かに三十年代のモダンな私の趣味其物の現れである。大正十五年頃のものは、應接室、寢室、書齋は洋風に

居間茶の間は和風にしたのばかりで、之は妻帯したので女の好みが多分に混つたものである。處か昨今私共の趣味嗜好が、尖端より後端へ、西洋かぶれから古典的日本趣味萬能に移つたので、昭和二年頃から現在までに書き上げたものは、洋室が全く影を消して仕舞ひ其代り佛間、茶室、床、障子の配置が設計の中心になつて居る。

借而、私共の此道樂は今後も續くであろうが、自分の家が——此私共の夢が實現するのはいつの事になる事か、誠に心細い次第である(二月十四日記)

◆張紙を見る

なにかし

○城大醫學部の今村先生のお部屋へ原稿を頂きに行く。

○ドアに一枚の西洋紙を、ピンでとめてある。近寄つて、よく見ると、何んと……『京城雜筆原稿は、隣室の後藤君に預けてあります。今村』

○ソコで、隣室をノックして、這入ると、お若い研究員の方『チャ、雜筆社のお方ですか。原稿を預かつてみます。さア、どうぞお持ち下さい』

○要務は、スラ／＼と運んだが、もどりにモ一度張紙を見て、何となく朗らかな、愉快な氣持になる。そして記念のために、それを頂戴してとる。

○原稿は、巻頭の『舊師』と題するもの、アノ謹嚴な近藤秘書官のお父さう様が、さうした愉快な方だつたかと、電車の中でまた獨笑。

品川雜記

もある。千客萬來は多々益々歓迎すべしであるが、此の頃のやうに險惡な問題で物議なお客ばかりでは此の番公全く以て辭退の外はな

建築の方法である。空中の機關にも等しい仕方ではあるが、軍人の熱中される、岡上戦術にも等しい

才前のモダンな私の趣味其物の現れである。大正十五年頃のものは、應接室、寢室、書齋は洋風に

するもの、アノ謹嚴な近藤秘書官のお父う様が、さうした愉快な方だつかと、電車の中でまた獨笑。

品川雜記

中島 司

(中央朝鮮協會)

人世春遲々

淡雪がシトシトと降つて居る。昨日が立春、寒いといつても最早や餘寒だ。一寸ほど積もつた雪の下には露のたうが青い。南縁に置かれた籠の小鳥の囀つりもさすがに春めかしい。

春は自づから回り来りつつあるだが、人の世の春は何として訪づること遅々たるぞ。丸ビルの五階の窓の日は暖かに、ステームの熱はあらずもがなの此の日頃、朝鮮からのお客は、吳越同舟押すな押すなの盛況だ。お蔭で此の私は應接に遅なく天手古舞の有様だ。お客の多いのは多々益々結構であるが、凡そ此の頃朝鮮からのお客は、物騒な問題に關聯して神經の尖鋭化した人々ならざるはない。手つ取り早く言へば喧嘩腰の人ならぬはない。迂つかり下手な口をすべらさうものなら、此のあたりに拳骨の一つや二つは飛んで来まゝいものでもない。桑原々々、一言一句苟しくもすべからず、春ながらまことに窮屈で肩が凝ること夥ましい。

春ならばのんびりとありたいものだ。中央朝鮮協會の談話室のソファにうづまつて居離りでもしてくるやうな悠閑なお客が欲しいものだ。時事論も結構、不平談もオーライではあるが、偶まには成生ののろけぐらい聞かせてくれる

人があつたらさぞのんびりと嬉しからう。

此の節の朝鮮は諸事面倒になつて来たやうだ。何かと云ふといろんな問題が東京に持ち運ばれ、兎角理屈が多くなつて来た。朝鮮から發せられる決議や陳情の同文電報のうち一通は大抵私共の所へ來る。陳情のため東京の人々は大抵私達の所へ訪ねて來られる。私共はそれらの朝鮮からの電報や上京の人達に對して充分深切な取扱や應對をするのを義務として居る。いろいろな問題の中には我等の立場上から言議を挟み贅否を表することのできないものもあるが、併しその陳述に對しては叮嚀に懇切に之を聴き、虚心坦懐、以て出来るだけ便宜も計り、忠言も呈するといふことにして、誤まりなきを期して居る。但だ相反對する兩派の人達がやつて来て、甲は乙の議論を間違ひだと言ひ、乙は甲の主張を誤まりだと言ひ、互に相排斥するやうな場合には私共實に應對に困る。どちらにも理由はあるだらうから下手に軍配はあげられない。一步誤まつたらこちらが責任を負はねばならぬ。責任は辭する所でないが、若しも不公平の排りを受けては中央朝鮮協會ののれんに傷がつく。そこに番頭としての私の苦心がある。

朝に吳の客を迎へ夕に越の客を送る。時に吳越兩客並び來る場合

もある。千客萬來は多々益々歡迎すべしであるが、此の頃のやうに險惡な問題で物騒なお客ばかりでは此の番公全く以て辟易の外はない。二十四番花信の風よ、少しは朝鮮から運朝やゆすらの香を傳へ來れ。人の世は、あまりに苛立たしい。(二月六日記)

モヒ患者と犯罪

東京地方裁判所の検事局に勤めて居る朝鮮生れのK君が此のほどやつて來ての話によると、此頃罪を犯した廉で検事局へ引つ張られて來る朝鮮人は日に平均十五人位あるさうだ。そして犯罪者の中にはモルヒネ中毒者が可なり多いさうだ。東京方面に朝鮮人のモヒ患者が千人から居る。彼等は高價な注射のために、勞働では出来ないから、つい盗みをする者が出來てくる。自分で盗みの出來ない者の中には、少年にモヒ注射をして之を中毒者になし、之に盗みをさせて自分の注射薬の資を得る者がある。若し是等のモヒ患者を何とかしなければ、東京の朝鮮人の犯罪は益々深刻になり、犯罪の動機が動機だけに、犯罪者も可哀さうだとはK君が眉をひそめての話してある。若し果してさうだとすれば之は識者の等閑視す可らざる社會問題だ。記して心ある人々の胸懷に訴へたい。(二月十日記)

本町二丁目

龜屋喫茶店

(電話本四二四五)

銀座回想

古田廉三郎

(朝 鮮 銀 行)

久しく東京の空気を吸はない、
總ての點で大阪に呼應して尖端を
進んでゆく東都の空氣は暫く接し
ない内に随分變つた事と思ふ。か
の大震災以來長足に復興の一路に
邁進した東京の街も完備迄にはま
だ大分間もあろうが、あの焦土の
中に速に聳えた大層やビルディン
グを思ふ時、人の技の進歩に今更
の様に一驚を喫する。

あの震災を一區劃として東都の
街は昔日の情緒とかけ放れてしま
つた様に思へる。又實際かけ放れ
て居る。

古風な造りで自慢の料理に白麴
の純味を味はした新橋の江戸銀も
バラック造りの突込みではとんと
その板前の值うちを下げてしまふ
銀座街頭の誇りであり、その散策
の好い目標であつた天金も大提燈
が影を消しガヤガヤの騒音の中
は落付いて味覺を樂します事も出
來ない。白木屋横町の食道樂も一
片の名残を止むるにすぎない。

要するに古風な氣分、落付いた
心持は銀座界隈から姿をひそめて
慌たしい所謂三十一一年型とも言
ひつべきスピード氣分が横溢して
居る。テンポの速やかさをもつて
次から次へと進んでゆく様に。例
へライオン、タイガーが時代の禮
儀をうけ、美給の數十人を擁して
銀座街頭の進出著しきものあるに
せよ、その言ふ場所に關係のない
私等には『嘉六』の芳醇な菊止の

香りの方がより多き誘惑である。
例へ安テーブルに酒盃を傾けると
も。

帝劇も遂に松竹の手に歸し歌舞
技界は今や大松竹により左右され
統一される様になつた。之は統一
の方面から見れば實すべきことか
も知れないが、他方面から見れば
あなたが祝すべき事でない様に思
へる。時代と共に退嬰的に向ひつ
ゝある我が古典的歌舞技劇が唯一
つの手中に收められる時、其處に
は競争がなくなり、熱がなくなり
はしないか。明治を通じて一代の
名優團、菊、左の藝術も次第に衰
微するのではないかと思ふと三十
一年型なるものに或る嫌惡を感ず
ると同時に彼等につゞ名優の少い
と共に時代の潮流に餘儀なくも沮
まれる現代俳優の一種の心的レ
ンヤに同情せざるを得ない。

私は芝居があまり好きでなし又
暇もなかつた故多く見て居ない、
が俳優の中では高島屋を好む。彼
が努力の男であるが故である。大
根々々の悪罵をうけながらもよく
名優の成に達成したからである。
彼の芝居を見て居ると何んとなく
惹きつけられ、その臺詞を聞くに
透徹な快心が浮ぶ。綺堂氏が彼に
書き下した脚本は如何にも彼の藝
風にピッタリはまつてゐる。松延
十種を繙く時あの濁つた臺詞が浮
んで來る。特に修善寺物語の面造
師夜叉王の臺詞「左に鑿を持ち右

【五四】

に鑿を持てば面は容易く出來ると
思召すか、家を建て塔を組む番匠
などとは事變り、之は性なき粗
木を削り、男、女、天人、夜叉、
羅刹、ありとあらゆる善惡邪正を
形造る面造師、我精力が双の腕に
溢るゝ時、我魂は流るゝ如く彼に
通ひて即ち面は造られます。但
し出來る期日は半月の後か、一月
の後か、一年十年の後か、我れな
がら確とは分りませぬ』は源氏の
將軍頼家卿の使者を前にして斷言
する彼名匠を彷彿させる。最後に
至つて自らの削りし面の何れもが
死相を現はし源家の將軍の死を聞
くに及んでむべなるかなと覺り、
『技神に入るとは、この事か、我な
がら天晴れ天下一ぢやなあ』と揚
言するあたり、實に眞に迫るもの
が感じられる。

吾人の日常生活から娛樂を除き
得ないと共にかゝる古典的歌舞技
劇が次第に末期に近づきジャズ的
狂燥の跳梁する銀座街頭を思ふ時
時代の流れとはいへ一抹の寂寥を
感ぜざるを得ない。

◆聞くがまゝ

漢 江 漁 郎

○金剛山電氣の新事務岡本桂次
郎氏——以前逓信局にもめて、朝
鮮とは因縁淺からざる人である。

○文雅の嗜み深く、書畫の蘊鑑
に達し、殊に將棋の力量に至つて
は、入段の棋品と稱される。

○本間徳雄氏とは、親族の間柄
だ。そして双方棋道に達し、談
コに及ぶと、兩方で、『何、あれ
が……』と一段高く居るところ、
頗るもつて愛嬌があるといふ。

財界無題録

してゐるのが銀行家の集まりであ
る。新春以來金融界に一種の波動
があるやうに見える。その一端は
既に出てゐるらしくもある。筆者

銀座街頭の進出著しきものあるにせよ、その言ふ場所に関係のない私等には「嘉六」の考醇な端正の

十種を纏う時あの濁つた臺詞が浮んで来る。特に修善寺物語の面造師夜叉王の臺詞「左に鑿を持ち右

コに及ぶと、兩方で、「何、あれが……」と一段高く居るところ、頗るもつて愛嬌があるといふ。

財界無題録

別府八百吉

(京城日日新聞社)

金融界名物男

多勢に無勢といふ、世間並みにいふと、相手が優勢になり、頭数が殖へると、少數の方は氣まげがして尻細りするものだ、所が鮮銀支配人の古田君は、可なりその普通人と違ふ性格をもつてゐるらしい。對者が殖へ、對者が強くなれば、夫れに應じて馬力を加へる男である。その巨軀を一層大きく見せ、その白頭を更に光らせ、又その豊富無限の聲量と鬪辯を多々益々發する男である。普通人は思ふ事の半分しかいはぬ、又八分目にししか語らぬ、然し古田君は十二分に云ひ、又十五分にははめと腹がふくれて飯がまづいと云ふ男である。鬪志満幅の男、約言すればそんな男が古田君だらう。過般銀行集會所に代表通が寄つて金融上の議論の沸騰した時、古田君は

してゐるのが銀行家の集まりである。新春以來金融界に一種の波動があるやうに見ゆる。その一端は既に出てゐるらしくもある。筆者はその間のいきさつと、そこに躍る人物を『銀行界紛々録』として書いて見やうと思つた。腹案をきめてから一二つ確かめる必要を發見した、或る親しい金融界の先輩に夫れとなく質すと、その人はすく妙な面をした。

『書くつもりだね、困るよ君』と、さう云つて

『鬼に角、京城の金融界はまあ平和であるよ、その平和な金融界のドコカに多少のくもりはあるにしても、そのくもりを大きく傳へられる事になると面白くない。貴君の筆の自由をどうしやうとも思はぬし、どうしやうとしても中々聞かへて欲しいが、成るべくならひかへて欲しいネ、色々うわさに上る人々、又その人々を中心として周囲に心配する人もあらうといふものだ』

とか何とか云ふて、筆者の乘氣になつたヘンの氣先を折りかけた成程興にのつて書きまくつて、迷惑する人があつたり、書いたために波瀾が起きたり、感情を害する人々が出たりすると、氣の毒でもある。雜筆子に約束はしてゐたが氣が進まなくなると、サツパリ書く氣はせぬ。夫れに二月上旬から中旬にかけ筆者としては大きい又密接な影響のある問題や、風説があつたりしたので、かたが、氣をくさしてやめた。或る銀行家も前に書いたやうな事で一頻り舌を動かして、さて『君の方の問題はどうか』と遊襲して来る。夫れに筆者のねらつてゐる『銀行界紛々録』の結論を語る事實が、近く現は

『朝鮮の普通銀行業務は鮮銀が あれば好い、不動産方面は殖銀の存在で十分だ、その他の普通銀行は鮮銀本支店なき地方に行つて店を開くべしだ』

ネバリと云つてのけた。そしてウフ……と豪傑笑ひをした。すると京城銀行界の名物男であり、意見が多すぎて困り、云ひたくて語らねばき場所の乏しきに退屈してゐる一銀支配人の淺川君、その席でも既に三人前以上も舌を動かしてゐるのだが、談敵古田君にさう出

られては、黙つてゐるわけに行かぬ。少くも第一銀行を代表せる京城探題として——

『實に亂暴な話だ、吾々にいはずと普通銀行の存在する所には、鮮銀は無用だ、むしろ普通銀行のない土地に鮮銀は開店若くは移轉をするが好い』

憤然として相應したとは、列席の一人の話だ。憤然として——なにか、君達の口にかかると、事が大仰になつて困るよ、とは古田君が筆者に語つた所だ。然し君はそんな意見をもつてゐるのかと聞くと、古田君はマジメなる如く、又茶化す如き態度で

『朝鮮のママたとへばだね、鮮銀と殖銀は第一夫人並に第二夫人だよ、他は妾さ。本妻が病氣でねてゐる時には、妾の振舞ひも或る程度までは大目に見て好い、然し本妻が健康回復し、シツカリしてゐれば、妾は日かげ物だらうじゃないか……』

妙な引例でやつて来る。古田君は内心からさう信じてゐるらしいと支店銀行の人はいふ。信じてゐるからこそ四角八面に切りまくる。中央銀行が普通銀行よりも勉強するといふ態度は、どう見ても妾を驅逐せんとする本妻のふるまいでないかと評する人もある。

銀行紛々録中止

内心を研いでも、表面はすま

れて来るかも知れない。現はれて
来れば、又その時ものにする事も
出来るだらう。ナンカと考へつつ
書かぬ事にした。

天民博士と筆者

天民博士が京城を去つた、廣く
て深い人といへるのが和田二郎君
だつたらう、人物とか、造詣とか
は余りによく知られてゐる。筆者
は天民博士が筆者に遺憾であつた
と幾度も云ひ、筆者も亦遺憾に思
ふ一事を書いて見やう。

天民博士が、土地調査局の總務
課長として、事業完成の三四年間
筆者は京城日報の若い記者として
同局に時々出かけてゐた、事業が

完成すると、京日で四頁の土地調
査完成記念號といふのを出して吳
れと博士に頼まれた、筆者はたし
か千圓の附録料の約束をして、一
人でセツセと書いて出した。する
と博士は多年色々御後援にもあつ
かつたし記念號編輯の骨折料にも
と五十圓かを贈られた、筆者は
その時の京日支配人の藤村君に話
すと、藤村君は夫れは少いといふ
ので、博士に電話をかけるか、何
かして更に五十圓かを殖して呉れ
た。筆者は四夜か五夜かペンの握
りづめだつた勞をそこでむくひら
れたのであつた。

筆者を見ると、聞いてゐる人の有
無を問はず、何度もいふのである
『土地調査の完成について、君
の筆は非常に役立つた、完成頃の
僕が、今の僕なら大に君の勞に酬
ゆるのであつた。が、何しろあの
頃の僕は純理肌の役人で、財政を
純理で見、豫算をあまり事に忠實
であり馬鹿々々しくケチにした。
土地調査は二百何十萬かの豫算を
残し、夫れを僕は得意にしたもの
だ。僕は實に苦勞が足りなかつた
よ。君に殆んど何もしてゐない。
従つて君を見ると、さういふも思
ふよ』

東風抄

○ 津田 零 閃

幾夜か正月待ちの子が寝のさがり餅化

山陽線

スチーム利きの寢が寢覺め姉妹が寢顔

歸省一旬

人力車下りなの雪拂ひ門ぬち降り踏む

炬燵四ツ座の顔よせて外の吹雪吹き音

東海道

眸が裸木田代殘雪青空が飛び

○ 岩淵 山 與 水

街灯が更けの正月泥なベタふむ音

町に土黒々夕べ牛續く雪の降り出

雪の夜を下るさきの下群れも我われ

歸りは僕が抱く子で雪ぬかる夜の木高々

經濟日報の小野君も、曾て博士
の下にゐて、土地調査をやつた人
だ。その小野君が南山莊で一度大
に相槌を打つたので、筆者は柄に
なく氣を小さくした事もある。然
しその事は和田さんよりも筆者の
方が遺憾である……。

◆ 棋道風聞記

なにかし

○總督府の本間(徳雄)技師が
將棋が強い。

○鮮銀の色部理事が、同じく將
棋が強い。

○この兩大家は、今年の正月温
陽で初手合せを行ふた。

○但し勝負の結果を聞くと、双
方『ウフ、』とばかり。

○解するもの曰く、『どつちも
無比の長案家、三日や四日で覺の
つく筈はない。つまりとり疲れて
引分け——物別れだらう』と。

○聞くもの皆同感！ニナルホド
……大家同士の鉢合せぢやか
らのう』

琉球の人と自然

が唄へば始めて唄ふ。この二身一
如の接客法は自らを守る完全な保
護色なのだ。

彼女達は客の濫費を喜ばない、

歸りは僕が抱く子で雪のかる夜の高々

引分け—物別れたらうと。
○聴くもの皆同感！『ナルホド
く……大家同士の鉢合せぢやか
らのう』

琉球の人と自然

澤村 五郎

(大阪朝日支局)

が唄へば始めて唄ふ。この二身一
如の接客法は自らを守る完全な保
護色なのだ。

彼女達は客の濫費を喜ばない、
出来るだけ節約して二度三度の登
樓を期待する。先年の衆議院議員
選挙に際し立候補した客筋の當選
を念ずるの餘り、わざわざ郷里に
歸省して親類縁者を歴訪し搦め手
から潜行運動を行った遊女がある
と聞かされたがさもありとうと思つ
た。開票當日のこと開票場につめ
かけて客筋の當落を案じ顔に佇ん
でゐた幾人ものアンガアのあつた
ことを私は知る。

賣淫制度、私はそれを否定して
ゐる男だが、その否定の第一條件
は男性の荒淫に蹂躪され肉体は愚
か靈をまでけがされて終ふ遊女を
知るが爲であつたが、わがアンガ
ア達は靈だけはまだ光を失はずに
不思議な存在を續けてゐた。奇蹟
である。がこの奇蹟も他府縣から
侵入する輕佻な賣笑婦根性によつ
て近日日にその跡を斷つのではあ
るまいか。

○ 慶長十三年のこと島津家の琉球
征伐以來わが琉球は、支那と薩藩
との兩屬政治下に變体的な存在を
餘儀なくされた。

琉球の萬葉といふべき『おも
ろさうし』の古歌を唄つてミステ
リアスな開關の由來や、海洋の美
を謳歌し海の彼方の樂士との交易
を讀へて鬪氣滿々たるころもあ
つた琉球人も爾後は琉歌と稱する
三十字詩によつてさびしい諦感を
表現してゐた。琉歌それは三十一
文字を誇る和歌の變形化したもの
で殆ど同一だといつても過言でな
い。

『流れ落つ泪ことと紫の玉と

○ 那覇市辻遊廓はすぐれた音畫で
ある。この國特有の蛇皮線によつ
て奏でられる琉球ジャズ『カリ
タ』の超テンポな律音が景氣よく
客足を呼び集めてゐる。

やがて夜が更けてゆくと新内に
似た哀情切々たる竹簾節(たけと
んぶしと讀む)が客の心をしつか
り掴んで終ふだらう。

旅や濱泊り

草の葉の枕

寝ても忘ららん

吾親のお側

とかういふボヘミアンの心情を唄
ひ旅情を咬る歌詩もある。

里とわがなかや

松の葉のごとに

落ちてたいととも

ままとたげに

といふ『あせみづ節』も情緒纏綿
たるものがあらう。この唄の意味
は—あなたと私の仲は二つの針
が一つになつてゐる松の葉のやう
に枯れて落ちたとて離れはしない
—といふのである。そのほか首
里の在藩武士から戀人を奪はれ悲
歎に暮れた請負師が、自らの薄倅
を歌つた失戀の唄『汀間節』の悲
曲や、男が女を誘ひ出す逢引の唄

『川平節』の艶つばいところが交
錯して文字通り絃歌さんざめき合
ふ。煙客はウオッカよりもアルコ
ール分の多い泡盛を飲んで陶然と
アングア(遊女のこと)の美聲に

○ それにこの遊廓は他府縣のそれ
とは異なり、遊廓兼待合といつた
格であり、遊女は藝妓と娼妓とを
ちやんぼんしたもので昔から今に
至るまで、政治も教育も商賣もこ
の遊廓内で論議され協定され取引
されてゐる。

○ 現に縣會開期中、地方から那覇
に集つて來る縣會議員達の多くは
妓樓の一室に各自本據を構へて翻
策し懷柔する。今はさほどでもな
いが小学校學長會議に出席の校長さ
ん達も旅館に泊らずに妓樓から會
議への離れ術の常習者だつたとい
ふ。

○ 人口六萬の那覇市に三千の遊女
がゐることそれ自體が、如何に需
要の多きかを裏書して餘りあるだ
らう。と同時に數百年來男性に對
して抜くべからざる勢力を保持し
て來た彼女等の魅力を嘆きかける
だらう。

○ わがアングアには賣笑婦の共有
するあの荒んだ裏惑と曲んだ詐術
は微塵も發見されない。あるもの
は一夜妻としての貞淑さと、第二
夫人としての純情だといつても過
言でない。彼女達は家庭の主婦と
その氣分において遜色を持たない
客が黙れば彼の女も語らない。客

○ 安東都天子
とふ人の常はまれなる古寺も梅の
さかりは賑はひにけり

○ 佐野喜平次

のりをとく古き御寺にけたかくも
雪をしのきて梅の花さく

○ 今村 雲嶺

おくつきに枝さしかけて古寺の垣

根眞白に匂ふ梅か香

○ 松寺 竹雄

門やぶれ寺ふるけれど春ことには

ほ新らしく匂ふ梅か香

○ 淺井佐一郎

古寺のやれたる庭のかたすみにも

ひしくかざる梅の一本

○ 清水 正徳

古へを語り顔なり古寺の軒端にか
をる梅の老木は

○ 足立丈次郎

苦むせる老木の梅の香も高くふり
にし寺の庭に匂へる

○ 古田萬龜子

軒くちて法師もすまぬ古寺をまも
り顔にも梅のにはへる

特權であると考へ、私は選手に對
し美望に堪へないのであります』

—以上—

ツイストライキ スリーボール

松崎 嘉雄

(逓信局海事課)

漢江 漁郎

◆出養生の話

私は逓信野球チームの昭和五年
納會の慰勞會に列したことがある
宴酣なる折柄進行掛から野球チ
ームの將來の參考の爲めファンの
所感を聴きたいとの動議が出た。

次で數名のファンから遠慮のない
述感があつて大に興を盛んならし
めた。そしてよせば善いのに私も
ツイ釣り込まれて次のやうな一席
をやつた。

『野球ファンを大別すると(一)
元野球選手たりし者(二)多少野
球を試み又は之を試みたることな
きもルールに精通した者(三)ル
ールに精通せざる臆懼ファンの三
種とすることが出来ると思ふ。而
して私は遺憾ながら此の第三の臆
懼組の一人である。既に第一、第
二の組が夫々優秀なる御所感を述
べられたので私は勇敢に臆懼組を
代表して(但し此の席上には臆懼
は或は私一人かも知れませんが)
愚感を述べて見たい。

敵に一點リードせられた後味方

は九回裏に於て二死満塁、而もバ
ッターはツイストライキ、スリー
ボール、以上の光景は往々見受け
ることだが、甲乙兩大チームが宏
大なる京城グラウンドの眞只中で
熱烈なる數千のファンの環視の中
に争鬪戦を演じてゐる。今此の一
本の鐵楯で本年最後の優勝者が決
定するといふ刹那、其のバッター
の心境や如何?

私は右の光景に接した時常に我
が國史の花形である山崎合戦の秀
吉、光秀又は關ヶ原役の家康、三
成等の武將の心境を目のあたり見
せつけらるゝやうな胸の騒ぎをど
うする事も出来ない。我等は今迄
只歴史に依つて古英雄の心事を推
惟するのみであつたが、野球選手
は此の昭和の平和時代に於て尙血
醒き戰國時代に於ける英雄的心境
に浸りつゝ血を以て之を體驗し以
て男性的人格を築き上ぐることを
得るといふことは是れ全く現代に
於ては野球選手にのみ恵まれたる

○城大法文學部のブライズさん
は、徹底的な素食主義者、肉や魚
の臭ひと來たら、それこそ鼻を掩
ふて逃走される。

○奥さんの身になると、そうは
參らぬ——生理上からでも、脂肪
分の要求が急。そこでチヨイ／＼
三越の食堂へ運歩を運ばれ、いつ
もおいしさうに召上るのが、決ま
つてエビの天扶羅羅!。

○『ヤー奥さん、お出懸けにな
りましたネ』、夫人答へて曰く、
『アラ……一寸出養生にネ』、な
る程出養生だ。

○奥さんは、乗馬の天才、お宅
に小さい馬場があつて、愛馬を疾
風のやうに走らせながら、時を測
つて横合から、エイツ……ヒラリ
……所謂尻馬に乗るのが最もお得
意!。實に美技だ。見物の客人を
顧みて、『今度は、極東のお殿方
の、いみぢき御馬術を拜見いたし
たら御座います』、日出づる國の
おん殿方『ダ、ダーツ!』

方がまぢがつてゐる。

『世間ではとんでもない事いふ
のよ。あの人私のとこへ來たくて

眼の感じが美はしいのだと思ふ。

長いまつげの奥にうるはふてゐる
目の柔い親しみぶかい感じがそれ

異性風景

水井 ねい

京城の美男の筆頭に田中三郎さん
を載せても恐らく異議はないだ
らうと思ふ。お年は四十を一寸出
たばかりだがどうして仲々お若く
見える。あの艶々しい皮膚のいろ
和やかなほほゑみ。營養質らしい
体軀であつてその臭味のない點、
田中さんの精神内容も相當ふかい
處があるらしい。やむを得ずして
父業を繼ぐとはいふものの、かつ
ての希望が變質して政治的關心と
なるのも無理はない。

田中さんはまだ養父君在世の折
洋行を計畫しそれが實行の域にま
で行つてゐたのだといふ。米國の
大學に這入つて勉強して歸朝の上
は某大學の教授になる内約もあつ
たのだといふ。それが父君逝去に
よつて根本から破壊され田中時計
店主となつてしまつた。田中夫人
の言を借りていへば「だから私、
大學教授の夫人になり損ねた……」
のであつた。

世間では田中夫人がたつての望
み黙し難く懇望によつて迎へられ
たのだといふ。それもさういふ理
由はある。養子として、美男であ
る事、人物がしつかりしてゐる事
などに於いて。氏のやうなのは三
國一といふより日本國中さかした
つてさうざらにあるものではない
田中夫人が一目で好きになられた
といふ事を嘘ともほんとも私は
いはない。あれ位、水際だつた男
ぶりなら求婚者だつたら一度はあ
たつて見やうといふもの、見ない

は或は私一人かも知れませんが
愚感を述べて見たい。
敵に二點リードせられた後味方

得るといふことは是れ全く現代に
於ては野球選手にのみ恵まれたる

たる御座います、日出づる國の
おん殿方「ダ、ダーツ」

方がまちがつてゐる。

「世間ではとんでもない事いふ
のよ。あの人私のごとへ來たくて
年一ツかくしてたのよ。それが後
でわかつたのだからをかしいわ」
包みかくしのない田中夫人の述
懐は竹を割つたやうだ。向ふ様で
ゐらつしやりたくて、こちら様で
お貰ひになりたかつたら、これに
越したい事はない。

お二人の仲はとて理解がある
らしい。

さて美男、美男といつても田中
さんの顔の何處がいいのかと考へ
て見た。

田中さんから感じる感じはふく
よかさといふものだが、特にその

眼の感じが美はしいのだと思ふ。
長いまつげの奥にうるほふてゐる
目の柔い親しみぶかい感じがそれ
なのだ。容貌の美しいものは音聲
の美しさも伴うてゐる。田中さん
の聲も又音量のある澄んだ聲だ。
かういふ眼からうける感じに峻
厳さはない。親しみと温みである

就職希望

- 一、名古屋高商出身
- 一、本年二十一歳
- 一、銀行會社商店を
希望す。但し養子
に行くもよし(姓
名在社)

屋根の雪

角田 芳子

(南 米 倉 町)

心ぐき日のつときけり人病みてはかしくしからず
春立つといふに
まれに聞くからすの聲すくもり日の風にまじりて
屋根の雪散れり
雪とけの町にひさげる菜の花を瓶の瓶にきわやか
にさしつ
菜の花の一本ゆえにこの室の机の上に光りあふる
る
天つ日はほがらに照れりがらす戸に風さわに渡る
音の高らく
消えのこる雪の庭へにまがなしくよこれたる雀來
てあそふなり
こもりの冬日はあけぬ百貨店にともしき花の鉢
並びたり(六、二、一五)

最も古き歴史と

最も良き品質

三十年未
おなじみの
最上醤油



最上醤油

香味
佳絶
ホシ大ソース

永登大
醸造

お上品な
料理は
淡口醤油



淡口醤油

一度御試用

のほど願上ます

春 暖
御機嫌御伺

西 洋 料 理
支 那 料 理

東西の美酒を
とりそろえ御
入來待入候
御東上の際は
是非く御立
寄り被下度候

東京芝新櫻田町

泰 明 軒

衆議院そば

皮膚泌尿
花柳病科

渡邊醫院

院長 渡邊 晋

京城黄金町入口日本生命裏
診察十二時半マデ及ビ夕刻

内科
婦人科

今本醫院

(京城旭町一丁目)
院長 今本義胤

温陽温泉

神井館

設備は整頓し
居心地最も可

温陽温泉

温陽館

温陽にて最も
古き旅館です

昭和六年二月廿五日印刷
昭和六年三月一日發行

本誌定價

一ヶ月(一部) 四十五錢
半年分 二圓六十錢
一年分 五圓

京城府和泉町一七〇

發行兼 松本武正

編輯人 石川利夫

印刷所 京城日報社

京城府和泉町一七〇

發行所 京城雜筆社

電話光化門三〇六番

京報日報

每日申報

本店 京城府南大門通二丁目十四番地

電話光化門長七六〇番
振替口座京城二一〇五番



株式會社 漢城銀行

取締役會長 白 完 焮

專務取締役 堤 永 市

支店

南大門、東大門、西大門、本町、
水原、大田、大邱、釜山、
開城、平壤、平壤大和町、

資本金 五千七百五十拾萬圓
積立金 六千四百八拾五萬圓
(明治六年創立)

京城府南大門通二丁目

電話本局 (長一六二番・長一〇二番)

振替貯金口座京城一一番 (客用)



株式會社 第一銀行 京城支店

支店長 淺川 眞砂

銀行一般ノ業務ハ確實ヲ旨トシ精々御便宜ニ取扱申候
内地、滿鮮支、及歐米樞要ノ地ニ爲替取引有之候